

規範化される性愛観念とその変容
——日本近代文学における男性同性愛表象——

黒岩裕市

目次

序章	文学研究と男性同性愛表象分析——レズビアン／ゲイ・スタディーズ、 クィア理論との関係から	3
第1章	“Urning”の導入——森鷗外『キタ・セクスアリス』	11
第2章	“homosexuel”の精神化——森鷗外『青年』	28
第3章	精神医学と同性愛の「種族化」	38
第4章	性欲学における同性愛の変容	47
第5章	同性愛の感染性——江戸川乱歩『一寸法師』	58
第6章	同性愛の周縁化とその困難——江戸川乱歩『孤島の鬼』	68
第7章	男性同性愛表象の仏日比較——マルセル・ブルースト『ソドムとゴモ ラ』Iと堀辰雄『燃ゆる頬』	82
終章	戦時下、そして、戦後の男性同性愛表象に向けて	95
注		103
引用文献		118

序章 文学研究と男性同性愛表象分析——レズビアン／ゲイ・スタディーズ、クィア理論との関係から

1. はじめに

修士論文「同性愛を語る三つの作品——『ソドムとゴモラ』I、『コリドン』、『純粋なもの」と不純なもの』を読む」で、私は、マルセル・プルーストの『ソドムとゴモラ』I（1921年）、アンドレ・ジイドの『コリドン』（1924年）、シドニー・ガブリエル・コレットの『純粋なもの」と不純なもの』（1941年）というフランス文学の三つの作品における同性愛表象を分析した（黒岩 a）。

『ソドムとゴモラ』Iは、男性同性愛の描写に19世紀後半の精神医学が構築した「同性愛」概念を取り入れたテキストである。男性同性愛は女性的な「気質」と結びつけられ、病理化され、それに関与する個人は「種族化」される¹。一方、『コリドン』では古代ギリシアの「ペデラスティ」²が掲げられ、男性同性愛の脱病理化が試みられる。あえて医者を登場させ、彼の口から「健全」で、男性的な男性同性愛を論じさせるのだ。『純粋なもの」と不純なもの』では、男性同性愛はプルーストにならって「同性愛」概念のもとで「種族化」されるのだが、女性同性愛はそうした精神医学の言説から救い出されるかのように表象される。

取り込むにせよ、反論するにせよ、もしくは排除するとしても、19世紀後半の精神医学や、それを受け継ぎ20世紀初頭にその枠組みが完成した性科学が繰り広げた「同性愛」概念なしには、これら三つのテキストが織り上げられることはなかった。言うなれば、同性愛を病理化する「科学」言説と「文学」テキストとの関係性を探求することが私の修士論文の主題であった。

修士論文ではフランス文学に照準を合わせたが、本博士論文では日本文学の男性同性愛表象を分析しよう。特に近代日本の性愛規範が確立した明治末期から昭和初期に注目し、森鷗外、江戸川乱歩、堀辰雄の文学作品を取り上げる。そこには、西洋の精神医学や性科学、あるいは、それらをモデルにして大正時代にブームになった日本の性欲学が「科学的真理」として打ち立てた「同性愛／異性愛」概念が直接的・間接的に持ち込まれている。だが同時に、文学表象を通して、テキストでは「同性愛／異性愛」概念は攪乱され、変容している。修士論文の主題を発展させつつ、文学表象における「科学」言説の変容過程を詳細に読み、近代日本の男性同性愛言説史の再構成に取り組むことが本博士論文の目的である。

それはまた、性愛に関して今日でもなお繰り返されている論争——「性」は生物学的に規定されるのか、社会的に規定されるのか、「自然 [nature]」か「養育 [nurture]」か、「本質」か「構築」か等々——に応答するうえでも非常に有益なものとなるだろう。なお、本論の第3章・第4章で論じるが、精神科学や性科学・性欲学はつねに擬似科学的なもので

あった。その科学性をいったん保留する意味で、本論では「科学」と括弧付きで表記する。

ここで、一見不調和と思われる鷗外、乱歩、堀という組み合わせについても触れておく必要があるだろう。作家／医師であった森鷗外／林太郎は、早くから文学評論にクラフト＝エビングなど精神医学の見解を援用しており、文学作品で男性同性愛を表象する場合にも、明治末期の時点ですでに「科学」的な「同性愛」概念を持ち出している。明治中盤以降、「同性愛」概念は医学領域では時おり言及されていたものの、文学領域への導入としてはきわめて先駆的である。それゆえ、鷗外の作品の分析を本論の出発点に置く。

東西の男性同性愛関連文献の収集家としても知られている江戸川乱歩は、大正時代に性欲学が作り上げた「同性愛」のイメージを新聞や大衆向けの文学作品に取り込んだ。大正末期からの円本ブームや『キング』（1925年創刊）など総合雑誌の相次ぐ創刊が引き起こした昭和初期の大衆文化の隆盛の中で、多くの読者を想定して書かれた乱歩の作品は、「科学」的な「同性愛」概念の大衆化をもっとも鮮明に体現しており、本論でも必要不可欠である。つまり、同性愛を扱った日本近代文学の作家の中でも、「科学」言説から意図的にテキストを紡ぎ出したのが鷗外と乱歩なのである。そのために彼らの作品の解釈を本論の軸に据える。

一方、堀辰雄は「科学」言説に基づいた男性同性愛表象を意識的に試みた作家ではない。だが、このテーマにおいて堀が影響を受けたと考えられるフランスの作家マルセル・プルーストは、19世紀後半の精神医学の見解に従って男性同性愛を表象した。修士論文で取り組んだ仏文学の男性同性愛表象に接続させながら、一見、それとは相容れないように見える堀のテキストに潜む「科学」的な「同性愛」概念を明らかにしたい。

それではまず本論の読みにとって重大な役割を果たす「同性愛／異性愛」概念と「男色／女色」概念を概説しよう。

2. 「同性愛／異性愛」概念と「男色／女色」概念

いつの時代、どの地域にもホモエロティシズムは存在する。だが、それをどのように解釈するかに関しては大きな違いがある。デイヴィッド・ハルプリンは、古代ギリシアの「ペデラスト」やニューギニアのサンビア社会などで男性間の性行為を儀礼的に行なう部族民や戦士が、今日、「ホモセクシュアル」と呼ばれる人々と「同一のセクシュアリティ」を共有しているのだろうかという問いを立て、構築主義の立場からそれを否定している（ハルプリンa 82）。本論も、ホモエロティシズムが「ペデラスティ」と規定されるのか、「ホモセクシュアリティ」と規定されるのか、あるいは、それらとは別のものと規定されるのかは、社会的・文化的・歴史的に異なるという立場を取る³。

さて、現在の日本でホモエロティシズムは「同性愛」という概念によって解釈されているわけだが、「同性愛」とは“homosexuality”の訳語として1910年代に考案された「同性交接」、「同性色情」、「同性性慾」、「同性の愛」といった言葉のうちの一つで、1920年代の性欲学の流行の中で定着した新しい概念である。西洋の精神医学や性科学の基本的な見解を受け継いで興隆した日本の性欲学は、「性欲」を「正常／異常」と二元論的に分類したう

えで、もっぱら「異常」な「性欲」を、当時の流行語によれば「変態性欲」を扱った。同性愛もサディズム・マゾヒズム、フェティシズムとともに「変態性欲」と異端視された。竹村和子の言葉を用いれば、精神医学や性科学・性欲学は「変態性欲」を盛んに論じ、周縁化することによって、結婚と家庭内の生殖を「正しいセクシュアリティ」と規範化していったのだ（竹村 a 37-38）。

したがって、ハルプリンが述べるように、「同性愛／異性愛」は対立関係にあるのではなく、上下関係にあり、後者は前者を否定することで「自分自身を問題とすることなしに定義づける」。要するに、「異性愛」は「同性愛」を「問題化し、汚れたものとして棄却して、自分は特権的で徴のつかない高みへと上る」のである（ハルプリン b 68）。

さらに注意すべきことだが、精神医学や性科学・性欲学は「科学」用語を援用し、個人の内部の「異常」な「気質」や「素質」と結びつけて「変態性欲」を解釈したため、「同性愛／異性愛」の境界線は本質的・固定的に設定された。ミシェル・フーコーが指摘するように、「行為」ではなく「人格」に基づいてホモエロティシズムが規定されるようになったのだ。日本では性欲学がブームとなった大正時代にホモエロティシズムは個人に内面化され、「同性愛者 [homosexual] は一つの種族になった」のである（Foucault 59）。この点に関しては、本論文の第3章・第4章で論じる。

ところで、性欲学とともに「同性愛者」が誕生したといっても、もちろん、それ以前の日本にホモエロティシズムが存在していなかったわけではない。本論が扱う男性のホモエロティシズムは「男色」という概念に規定されていた。だが、歴史的コンテクストの異なる「男性同性愛」と「男色」を同じ括りでとらえることはできない。両者がどのように異なっていたのかを概説しよう。

まずは、井原西鶴の『好色一代男』に記されているように、「男色」と「女色」はともに「色道ふたつ」の下位概念であり、男性のみを欲望の主体としていたことが挙げられる（井原 a 20）。「男色／女色」概念では女性のホモエロティシズムを説明することはまったく不可能である。それゆえ、女子学生同士の心中事件に社会的関心が集まった1910年代前半に“homosexuality”の翻訳が急がれたのだ。

「同性愛／異性愛」概念と「男色／女色」概念にはより重大な差異がある。『田夫物語』や『色物語』における「野郎 [少年]」と「傾城 [遊女]」の優劣を議論する「野傾論」⁴が示唆するように、「男色／女色」は相対的な区分で、「人格」を決定づけるものではなかった。「男色／女色」概念のもとでは、原則的に男性ならば誰でも「男色」も「女色」も行なうことが可能であり、「男色」は家父長制を支える異性間性行為とも両立し、また、両立する限りにおいて容認され、武士の間の「衆道」^{しゅどう}は「武士道の華」（氏家 30）と讃美されもしたのである。「衆道」のペアとなる年長の「念者」^{ねんじや}と年下の「若衆」^{わかしゅう}が「念友」^{ねんゆう}と呼ばれていたことから、男同士の「友情」におけるホモエロティシズムが可視的であったことがわかる。換言すれば、男性のホモソーシャリティとホモセクシュアリティが分断されてはいなかったのである。

一方、内的な「気質」や「素質」を問題とするため、「同性愛／異性愛」概念は二律背反的なものとなり、「同性愛」は必然的に異性間性行為と抵触してしまう。明治時代以降も男子学生集団で同性愛は「男色」概念によって規定されていたが、西洋の精神医学や性科学が導入され、日本の性欲学が普及していくなかで、「同性愛」概念により解釈し直されるようになった。

確かに、性欲学を通して「同性愛」概念が「男色」概念に取って代わるようになるのだが、前者が定着した後も後者は消え去るわけではない。古川誠は、1920年代に「同性愛の認識図式がほぼ完成し」と述べたうえで、それは「単に男色が変態性欲に置き換えられた」のではなく、両者が「重層的に重なり合って」男性間のエロティシズムを定義するようになったと指摘する（古川 b 50-51）。より正確に言えば、「男色」が、「変態性欲」に囲い込まれた「男性同性愛」への対抗言説を構成するようになったのだ。そこでは、「男色／女色」概念のもとでも存在していたヘテロセクシズムやホモフォビアは捨象されて、過度に理念化され、美化されて、「男色」はホモエロティシズムを擁護するためのレトリックとして用いられるようになったのである。

このような「同性愛」概念と「男色」概念の二重性は、イヴ・コゾフスキー・セジウィックが提示する「局所＝マイノリティ化 [minoritizing]」の見解と「一般＝普遍化 [universalizing]」の見解との間の矛盾に相当する。前者は、同性愛を「主として、相対的に固定された、少数の明確なマイノリティに作用する問題だと定義する見方」（セジウィック 10）である。生得的で不変の「性的指向」という概念に立脚したゲイ・ライツなどもそれに当てはまる。一方、後者は、同性愛を「様々なセクシュアリティの連続体全体の中で、様々な位置を占める人々の生活を長期にわたって決定して行く問題だと定義する見方」（セジウィック 10）である。誰もが行ない得る「ソドミー」という行為を禁止するソドミー法や、アドリエヌ・リッチが唱えた性器接触的行為に限定されない女同士の連帯としての「レズビアン連続体」もそれに当てはまる（リッチ 87）。

セジウィックは、20世紀の同性愛の定義にはつねにこの種の矛盾が付き纏っていることを強調し、どちらか一方に裁定を下そうとするのではなく、こうした矛盾そのものを分析することの重要性を主張する（セジウィック 127）。というのも、ホモセクシュアリティの定義の一貫性のなさはヘテロセクシュアリティのそれに他ならず、ヘテロセクシズムの非一貫性を暴露することへと繋がるからである。それは近代の性愛観念が生成する支離滅裂なホモフォビア言説に抵抗していくうえでも非常に有益なやり方だろう（ハルプリン b 52,59）。本博士論文では、私もセジウィックやハルプリンにならって、男性同性愛表象における「同性愛」概念と「男色」概念の二重性、すなわち、「局所化」と「一般化」の矛盾を重大な争点として、鷗外、乱歩、堀の作品を読み解いていく。

3. レズビアン／ゲイ・スタディーズとクィア理論、本論の位置づけ

精神医学や性科学・性欲学の分野で「科学」的に病理化された同性愛は、一貫して研究の対象であった。言い換えれば、それは研究主体としての異性愛の自明性を補完するものであった。そうした同性愛の周縁性に異議を唱えたのがレズビアン／ゲイ・スタディーズ

である。英語圏、とりわけアメリカ合衆国では1970年代以降、ゲイ解放運動やコミュニティと結びついたレズビアン／ゲイ・スタディーズの蓄積があり、研究主体としての同性愛を立ち上げ、その可視化を目指し、異性愛の自然性や優位性に異議を唱えた。代表的な文献としては、デニス・アルトマンの『同性愛者——抑圧と解放』（1971年）が挙げられる。

だが、同時代の日本にレズビアン／ゲイ・スタディーズの成果はほとんど紹介されなかった。ゲイ・スタディーズに関して言えば、キース・ヴィンセント、風間孝、河口和也共著による『ゲイ・スタディーズ』（1997年）が日本でこの分野を拓いた著作であり、同年には欧米のレズビアン／ゲイ・スタディーズのすぐれた理論を翻訳した『現代思想』「総特集レズビアン／ゲイ・スタディーズ」（1997年5月臨時増刊）も刊行された。レズビアン／ゲイ・スタディーズにおける、同性愛の可視化や再評価はきわめて重要な企てである。しかしながら、こうした企てには、精神医学や性科学が規定した「同性愛／異性愛」という二元論的な性愛規範を再生産するという側面があったことも事実である。

1990年代に台頭してきたクィア理論が俎上にのせるのはまさにその性愛規範である。テレサ・デ・ラウレティスは「ゲイ」と「レズビアン」の間の差異やそれぞれの言葉のもとで覆い隠されてしまっている多くの差異を取り出すために、もともとは蔑称であった「クィア」という語をあえてアカデミズムの領域へと持ち込んだ（ラウレティス 69）。また、クィア理論に大きな影響を与えたセジウィックは、「クィア」とは様々な境界線を「横断すること」、「across」にあるとし、「同性愛／異性愛」の二律背反的な境界線を懐疑する必要性を唱えている（セジウィック c 40-41, 大橋 b 198）。セジウィックの「ホモソーシャル理論」やジュディス・バトラーの「ジェンダー・パフォーマティヴィティ」がクィア理論の礎となっており、通常は異性愛と見なされているものに同性愛的欲望が見出され、「同性愛／異性愛」の二元論には回収できない様々な欲望が評価された⁵。

日本では2000年前後に、セジウィックの『男同士の絆——イギリス文学とホモソーシャルな欲望』（2001年, 原著1985年）、『クローゼットの認識論——セクシュアリティの20世紀』（1999年, 原著1990年）、バトラーの『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』（1999年, 原著1990年）が相次いで訳された。そして、それと前後してクィア・リーディングが試みられるようになった。

それゆえ、アイデンティティ・ポリティックスを掲げるレズビアン／ゲイ・スタディーズと「横断」や「越境」を目論むクィアには対立する一面がある。特に、そのような対立は日本で前景化したように思われる。レズビアン／ゲイ・スタディーズからクィア理論へという歴史的展開が見られるアメリカ合衆国に対して、両者がほぼ同時進行的にもたらされた日本では、レズビアン／ゲイ・スタディーズかクィアかという二者択一的な議論が生じ、それはしばしば「本質」か「構築」かという二元論へと横滑りしていったのだ。しかし、たとえば、1971年の時点でアルトマンがすでに最終的な目標として「同性愛者 [homosexual] の終焉」（Altman 237）や「同性愛／異性愛」の境界線の「越境」（Altman 247）を提示しているように、レズビアン／ゲイ・スタディーズとクィア理論には明らかな連続性もうかがえる⁶。私は、二者択一ではなく、この両者が相補的になることで、より実りある成果が導き出せるだろうと考える。

ところで、クィアと文芸批評の親和性は大きいため、日本近代文学の領域でも、セジウ

ィックのホモソーシャル理論が紹介されつつあった 1990 年代中盤以降に、クィア・リーディングが行なわれるようになった。とりわけ、夏目漱石の作品がホモソーシャル理論で再読された。小森陽一『『こゝろ』における同性愛と異性愛——「恋」と「罪悪」をめぐって』（1994 年）、「男になれない男たち」（1994 年）、大橋洋一「クィアー・ファーザーの夢、クィアー・ネイションの夢——『こゝろ』とホモソーシャル」（1996 年）、佐伯順子「聖母を囲む男性同盟——『坊っちゃん』における男性的要素」（1999 年）などが挙げられる⁷。同性愛表象の解釈に基づいて『坊っちゃん』や『こゝろ』といった日本近代文学の正典＝キャンノンの読み直しが実践されたのである。

日本を代表するクィア文学批評家の大橋洋一が述べるように、クィア理論はそれまで「異性愛を同性間で演ずる不完全な愛」にすぎなかった同性愛で異性愛を研究するきっかけを切り開いたのであり、「異性愛や同性愛に対する見方を変え、両者を変貌させる未来を見せてくれる」大きな可能性を秘めている（大橋 b 199）。クィア理論によるキャンノン再読の重要性はいくら強調してもしすぎることはない。だが、一見異性愛と考えられる関係に同性愛の暗示を読み込む作業だけが主流になり、明らかなる同性愛表象の内実を詳細に分析する必要性が忘れ去られることは回避しなければならない⁸。

そこで本論文は、あからさまに同性愛を扱った文学作品を選択し、かつ、クィア理論を参考にして、テキストで精神医学や性科学・性欲学に立脚した「同性愛／異性愛」という二律背反的なカテゴリーが構築されるのと同時に、攪乱され、変容する過程を読んでいく。またその際には、「男色／女色」概念が西洋と比較して後世まで残存し、規範化されていた日本で、クィア理論がどれだけ適用可能性を持っているのかについても批判的に検証していく必要がある。具体的には、「ホモセクシュアル・パニック」⁹といった概念から日本文学のいくつかの作品を読み解く作業を行なう。

とはいえ、日本近代文学研究の領域でクィア・リーディングのみが偏重され、男性同性愛表象の内実が問われてこなかったというわけではない。代表的な論文としては、小森陽一の「日本文学における男色の背景」（1995 年）が挙げられる。小森論文では、明治十年代の男子学生の間で流行した作者不詳の『賤のおだまき』と幸田露伴の『ひげ男』（1896 年）が、「私」の領域における武士と美少年との「男色」と、「公」の領域における主君への「忠信孝義」との矛盾という観点から読み解かれ、「和歌的文脈」と「漢文体的候文」という文体の使い分けが「公」と「私」の対立を偽装するために機能していることが指摘される（小森 c 78）。なお、鷗外、乱歩、堀の男性同性愛表象を扱った先行研究は、それぞれの章で適宜参照する。

一方、レズビアン／ゲイ・スタディーズやクィア理論の動向も視野に入れつつ、同時にそこからは一線を画しながら、社会史の領域でも、1990 年代以降、近代日本の性愛観念の変容に光が当てられるようになった。1910～1920 年代に活躍した性欲学者の書物や彼らが主幹した雑誌が掘り起こされ、読み直された¹⁰。男性同性愛に関しては、明治以降の男性のホモエロティシズムの規定のされ方の変遷を主題とした古川誠の一連の論文——「セクシュアリティの変容——近代日本の同性愛をめぐる 3 つのコード」（1994 年）、「同性「愛」考」（1995 年）、「同性愛の比較社会学——レズビアン／ゲイ・スタディーズの展開と男色概念」（1996 年）など——がその先駆的な取り組みと言える。

また、海外でも江戸時代の「男色」も射程に入れたグレゴリー・プラグフェルダの『欲望の作図法——1600年から1950年までの日本の言説における男同士[male-male]のセクシュアリティ』(1999年)、あるいは、戦後が分析の中心になっているが、マーク・マクレランの『近代日本における男性同性愛——文化の神話と社会の現実』(2000年)や『クィア・ジャパン、太平洋戦争からインターネットに時代まで』(2005年)が2000年前後から刊行された。これら国内外の先行研究は、膨大な資料を考察の対象としており、『キタ・セクスアリス』などの文学作品にもしばしば言及している。だが、往々にして文献が部分的に引用されるにとどまるものであり、文学テキストの矛盾や亀裂が読み取られることはほとんどなかった。

本論は、このような社会史の領域の先行研究をも参考にしながら、男女の関係を、そして、男同士の関係を好んで描き出す日本近代文学のテキストに精神医学や性科学・性欲学に由来する「同性愛」概念が導入される過程を読んでいく。しかし同時に、クィア理論との関連で先ほども述べたように、文学テキストが性愛規範からのズレをどのように露呈しているかという点にも目を向ける。というのも、こうしたズレを通して、「科学的真理」として打ち立てられた性愛規範の偏向性が図らずも暴き出されるからである。竹村和子の言葉を借りれば、それは「物語の(再)生産機能」と「攪乱機能」ということになるだろう(竹村 c 5)。竹村は、両者のダイナミズムに「文学の力」を見ているのだが、私もそこに文学テキストの力があると考えている。

4. 本論の構成

それでは本論の構成を概説しよう。序章に続く第1章・第2章、第5章・第6章、第7章ではそれぞれ森鷗外、江戸川乱歩、堀辰雄という作家の作品に注目し、『キタ・セクスアリス』(1909年)と『青年』(1911年)、『一寸法師』(1927年)と『孤島の鬼』(1930年)、『燃ゆる頬』(1932年)の男性同性愛表象を分析する。第3章・第4章では西洋の精神医学、日本の性欲学における同性愛解釈を概観し、そこに内在する綻びを顕在化させる。以下に各章での論点を簡潔に記そう。

第1章では森鷗外の『キタ・セクスアリス』を、第2章では『青年』を読む。『キタ・セクスアリス』で描かれる明治初期の男子学生集団の同性愛は「男色」概念によって規定され、「一般化」している。換言すれば、一時的に誰もが関与し得るものととらえられている。一方、『青年』では明治末期の青年同士のホモエロティックでミソジニスティックな「友情」が繰り広げられる。しかし、両作品には西洋の精神医学に由来する“Urning”、“homosexual”という概念がそれぞれ原語のまま持ち込まれる。これら“Urning”と“homosexual”に着目して、鷗外のテキストの男性同性愛の二重性を読み解いていこう。なお、『キタ・セクスアリス』の読解の途中で、明治十年代の男子学生の間で流通していた『賤のおだまき』という書物の男性同性愛表象にも触れる。

第3章ではまず『キタ・セクスアリス』の男性同性愛表象に反論した河岡潮風のエッセイ(1909年, 1911年)で、いかに精神医学言説が読み落とされているかを確認する。続いて、

性科学・性欲学の基盤を作ったドイツ・オーストリアの精神医学者クラフト=エビングの『変態性慾心理』(1913年, 原著 1886年)を中心に、その矛盾を含めて、精神医学が構築した「同性愛」概念のアウトラインをたどる。続く第4章では、日本人の性欲学者羽太鋭治・澤田順次郎共著の『変態性慾論』(1915年)に目を向け、精神医学から基本的な枠組みを受け継ぎつつも、日本というコンテキストで「同性愛」概念がどのように変容したかを見る。さらに、性欲学系の雑誌である『変態性慾』(1922-1925年)に掲載された男性同性愛者の手紙を取り上げ、「エロ・グロ・ナンセンス」言説のもとで再構成された男性同性愛表象との連続性も示唆する。

第5章では江戸川乱歩の『一寸法師』を、第6章では『孤島の鬼』を読む。乱歩の作品においては、大正期の性欲学が浸透させた性愛規範に基づいて男性同性愛者がホモフォビアに見世物化され、「エロ・グロ・ナンセンス」の特に「グロ」と結託し、「一種異様の人種」などとあたかも「フリーク」であるかのように表象される。しかし同時に、テキストではつねにホモフォビアとホモエロティックな欲望が二重化されており、その結果として「正常／異常」の境界線は歪んでしまう。本論文はその点に注目して、乱歩の大衆向けの文学テキストに内包された、性愛規範の「再生産機能」と「攪乱機能」を顕在化させたい。

第7章では堀辰雄の『燃ゆる頬』を読む。この章では、『燃ゆる頬』のプレテキストになっていると思われるプルーストの『ソダムとゴモラ』Iの男性同性愛表象と堀のテキストのそれが比較検討される。そうすることで、通常、『燃ゆる頬』で見落とされる傾向の大きい精神医学の痕跡を可視化させ、男性同性愛のテーマにおける仏文学と日本文学の繋がりに光を当てる。

終章では戦時下の男性同性愛表象、及び、戦後の三島由紀夫の『仮面の告白』(1949年)と『禁色』(1953年)に触れ、これまでの議論を総括し、かつ、今後の研究の課題を示す。

以上、本博士論文では、西洋由来の精神医学や性科学・性欲学が構築した「同性愛／異性愛」概念を手がかりにして、森鷗外、江戸川乱歩、堀辰雄の文学作品を読む。セジウィックの言葉を再び借りれば、同性愛の「局所化」と「一般化」の間の矛盾・衝突・亀裂・二重性を読みの軸にして、「科学的真理」として規範化された性愛観念が文学作品に取り込まれ、再生産される過程を明確にする。それと同時に、文学表象を通じて性愛規範が攪乱され、「中立性」や「客観性」の下に偽装された偏向性が、テキストにおいて暴き出される過程を詳らかにする。こうした読解・再読を通して、本論文は、近代日本の性愛規範の基盤にある「科学」的な「同性愛／異性愛」概念が生成した、ホモフォビアの非整合性・非合理性に抵抗するところまでを目論むものとなる。つまり本論は、特定の文学解釈が終局的に、そのような言説を切り崩す地平を見届ける試みとなるだろう。

『キタ・セクスアリス』が発表されて約100年が経過した今日に至っても、精神医学や性科学・性欲学に基づいたホモフォビアは再生産され続けている。それゆえに私は、本論の取り組みはきわめてアクチュアルな意義を持っていると確信するものである。

第1章 “Urning”の導入——森鷗外『キタ・セクスアリス』

第1章と第2章では、西洋の精神医学に由来する「同性愛」概念を、非常に早い段階で文学作品に取り入れた日本の作家として森鷗外（1862-1922年）に注目し、『キタ・セクスアリス』（1909年）と『青年』（1911年）という二つの小説を論じていく。

あらかじめ鷗外が専門とした衛生学について確認しよう。森鷗外／林太郎は、1881年に異例の若さで東京大学医学部を卒業し、同年末に軍医として陸軍に入隊し、1884年から1888年まで官費留学生としてドイツに学んだ。『独逸日記』の冒頭でも彼の留学中の任務が「衛生学を修むること」であると明記されている（森 i 87）。大塚美保によれば、衛生学とは、「生理学、細菌学、地理学等々の関連諸学と連携しつつ幅広い領域を扱う学問であり、その範囲は、栄養・衣服・家屋といった衣食住に関わる問題から、自然環境や都市環境整備に関する問題、本国と環境を異にする植民地での風土順応の問題、生殖・育児・教育といった次世代再生産に関わる問題、病院・刑務所・交通機関・産業労働など特定の場の環境問題、そして伝染病や寄生虫対策にまで及んでいる」（大塚 53, 下線引用者）。本論では、衛生学において、「新生国民国家としての日本の国力増強」（大塚 52）のための「次世代再生産」が重大な課題になっていた点に留意しよう。

一方、林太郎が留学した時期のドイツでは、1886年にクラフト＝エビングの *Psychopathia Sexualis* の初版が出版され、精神医学が盛んに研究されていた。第3章で改めて論じるが、後の性科学・性欲学の礎を築いた *Psychopathia Sexualis* では同性愛に多くの紙面が割かれている。林太郎は留学中に同書を読み、クラフト＝エビングが記した日本の風俗に反論し（斎藤 a 156）、帰国の翌年、1889年には「ルーソーガ少時ノ病ヲ診ス」で *Psychopathia Sexualis* を引用している（森 f 120）。また、彼は同時期に、自ら創刊した『衛生新誌』に「男色の事」（1890年）というエッセイを發表しているのだが、その冒頭にも、「男色の事、クラフト・エビングの書などに詳論せられたり」（森 j 46）という一節がある。その後も、文芸評論『月草』の「叙」（1896年）、医学論文「性欲雑説」（1902-1903年）などで、鷗外／林太郎はクラフト＝エビングを頻繁に参照している（森 e 294, 森 h 103, 107, 117, 125, 128, 131 など）。

本章、及び、次章の目論見は、自身も医師で、同時代の西洋の精神医学に精通しており、日本の衛生学を形作った鷗外／林太郎が、文学領域で男性同性愛をどのように表象したかを探ることにある。先行研究としては、小森陽一「表象としての男色——『キタ・セクスアリス』の“性”意識」（1997年）、生方智子「『キタ・セクスアリス』と男色の問題系——ジェンダーとセクシュアリティの結節点に向けて」（1998年）、藤森清「強制的異性愛体制下の青春——『三四郎』『青年』」（2002年）などが挙げられる。

なお、鷗外の二つの小説が發表された明治末期には“Homosexualität”の訳語として「同性愛」という言葉は定着してはいなかった。しかし本論文では、以下で問題となる「男色」も含め、同性愛という言葉を経過的に使用し、特に精神医学のコノテーションを示す際には括弧付きで記す。

1. 「年長者」と「少年」、「硬派」と「軟派」——『キタ・セクスアリス』（1）

まずは、森林太郎の署名で『スバル』1909年7月号に発表された『キタ・セクスアリス』の男性同性愛表象を分析しよう。最初に確認しておくとして、この作品には二つの語りが設けられている。それはテキストの冒頭と末尾に置かれた匿名の語り手が主人公の金井湛を語る部分と、金井が一人称の語り手「僕」になって「自分の性欲的生活」（森 a 90）を綴り、最終的に“VITA SEXUALIS”（森 a 179）と名づけられる部分である。それぞれの時代区分は明瞭で、金井を語る部分は「自然派の小説」（森 a 86）が流行し、「出歯亀事件」（1908年）が世間を騒がせた明治四十年代に、“VITA SEXUALIS”は彼が6歳で、廃藩置県が行なわれた1871年（明治四年）から、21歳でドイツに「洋行」（森 a 175）するまでの期間に設定されている。“VITA SEXUALIS”の中で、金井＝「僕」がかつて所属していた明治十年代の学生集団の男性同性愛にも言及されるのである。

「僕」が11歳の時に入学した「独逸語を教える私立学校」（森 a 109）の場面には、次のような一節がある。

学校には寄宿舎がある。授業が済んでから、寄って見た。ここで始めて男色ということを知った。僕なんぞと同級で、毎日馬に乗って通って来る蔭小路という少年が、彼等寄宿生達の及ばぬ恋の対象物である。蔭小路は余り課業は好く出来ない。薄赤い頬がふっくらと膨らんでいて、可哀らしい少年であった。その少年という詞が、男色の受身という意味に用いられているのも、僕の為めには新智識であった。僕に帰り掛に寄って行けと云った男も、僕を少年視していたのである。（森 a 110-111）

「僕」は学校の寄宿舎で「始めて男色ということ」を耳にし、「少年という詞」が「男色の受身」を指すことを学ぶ。「僕」自身も「年長者」から「少年視」され、「手を握」られ、「頬摩」されるが、「厭悪と恐怖」しか感じない（森 a 111）。そして、「僕」の父親にそのことを告げても、「びっくりなさるだろう」という予想を裏切って、「うむ。そんな奴がおる。これからは気を附けんと行かん」と父親は「平気」な様子を見せる（森 a 112）。「僕」はそこから「男色ということ」は、学校で「嘗めなければならぬ辛酸の一つであった」（森 a 112）と結論づける。

「私立学校」の短い記述からは、男子学生の年齢差に対応した「能動／受動」という役割分担が読み取れる。「僕」も「嫌であったが、年長者に礼を欠いではならない」（森 a 111）と思い、「僕」をレイプしようとする学生も「長者の言うことを聴かなければあ、布団蒸にして懲して遣れ」（森 a 112）と自身が「年長者」であることを全面に押し出している。「少年」とは欲望の主体ではなく、あくまでも「受身」なものであり、「年長者」の「対象物」と規定されているのだ。さらに、金井の「嘗めなければならぬ辛酸の一つであった」という言葉からは、当時、学校という空間で、「男色」には原則的にすべての男子学生が関与し得ると見なされていたことがわかる。セジウィックの言葉を用いれば、そこでは男性同性愛は「一般化」していたのである。

男子学生集団の「男色」に関しては、「僕」が13歳になった時に入った「東京英語学校」

(森 a 113) の寄宿舍でより詳細に語られる。東京英語学校は「十六七位なのが極若いので、多くは二十代」(森 a 113) という年齢差のある男子学生によって構成されており、13歳の「僕」はそこでも最年少であった。「僕」は学生たちを次のように描写する。

性欲的に観察して見ると、その頃の生徒仲間には軟派と硬派とがあった。軟派は例の可笑しな画を見る連中である。[...] 硬派は可笑しな画なんぞは見ない。平田三五郎という少年の事を書いた写本があって、それを引張り合って読むのである。鹿児島の塾なんぞでは、これが毎年元旦に第一に読む本になっているということである。三五郎という前髪と、其兄分の鉢鬢奴との間の恋の歴史であって、嫉妬がある。鞘当がある。末段には二人が相踵いで戦死することになっていたかと思う。これにも挿画があるが、左程見苦しい処はかいてないのである。(森 a 113-114)

引用した一節によると、当時の学生は「軟派」と「硬派」に分かれていたという。前者が「女色」、後者が「男色」を嗜好する集団である。「軟派」が春画を好むのに対し、「硬派」は「平田三五郎という少年の事を書いた写本」を愛読している。それはすなわち、『賤のおだまき』という書物なのだが、同書に関しては次節で概説する。ここでは、『賤のおだまき』が「鹿児島の塾」と結びつけられている点を確認しておきたい。

「僕」は続けて、「硬派」と「軟派」の関係を次のように記述する。

軟派は数に於いては優勢であった。何故というに、硬派は九州人を中心としている。その頃の予備門には鹿児島の人は少いので、九州人というのは佐賀と熊本との人であった。これに山口の人の一部が加わる。その外は中国一円から東北まで、悉く軟派である。

その癖硬派たるが書生の本色で、軟派たるは多少影護い処があるように見えていた。紺足袋小倉袴は硬派の服装であるのに、軟派も其真似をしている。只硬派は同じ服装をしていても、袖をまくることが少い。肩を怒らすことが少い。ステッキを持っててもステッキが細い。休日に外出する時なんぞは、そっと絹物を着て白足袋を穿いたり何かする。(森 a 114)

「硬派／軟派」は地理的に分類されるのだ。『賤のおだまき』との関連で鹿児島の名前はすでに出されていたが、引用した一節では「硬派」と「九州人」が明確に繋がれている。

実際、明治期には「男色」は九州、特に、「兵児二才制度」の影響が根強い薩摩と結びつけられる傾向にあった(古川 a 32-33)。三品彰英が1943年に発表した「薩摩の兵児二才制度」¹¹や三品論を受け継いだ中沢新一によれば、「兵児二才制度」の成立はいつのことかはっきりとはわかっていないが、藩制時代の確立期に、士族の子弟による集団が形成され、西南戦争の頃まで機能していたという(三品 306, 中沢 40)。薩摩でも地域差があるものの、大卒では、6～7歳から14歳の8月までの少年による予備軍的幼年団の「兵児山」、14歳の8月から20歳の8月までの青少年による、制度の中核をなす「兵児二才」、20歳の8月から30歳までの成人男性による「中老」という3つのグループで「兵児二才制度」は構成さ

れていた。

「兵児二才制度」内部では年齢差がすべてで、それ以外の属性は否定され、厳しい規則のもとで自己鍛錬が行なわれた。また、そこでは「婦女子に接することはもとより、口上にのぼすことすら絶対に許されない」（三品 309）状態にあり、女性は厳格に忌避され、「兵児二才」と「兵児山」の間ではしばしば同性愛関係が結ばれた。

さらに特筆すべきは、「兵児二才」が、地域の名門の嫡男で、10～12歳までの美少年を「稚児様」、あるいは、「執持稚児」としてたてまつり、守護した点である。「稚児様」は藩主の身代わりと見なされたため、「兵児二才」にとっては藩主への奉仕の訓練となる（三品 329）。それと同時に、軍事的男子結社内の同性愛の欲望を「憧憬的恋愛」へと昇華させる役目も果たしていた（中沢 44-45）。

世紀転換期になると、この「兵児二才制度」のため、『萬朝報』といった新聞で「男色」と薩摩が結びつけられ、それが藩閥政治批判の手段として用いられるようになった。たとえば、1900年3月7日付の『萬朝報』には「学生の大墮落蒼龍義團の事」という記事があり、その冒頭では「藩閥政府の有力家が東京の少年に与えたる最大の感化」として「男色」と「決闘」が挙げられ、断罪されている（『萬朝報』1900年3月7日）¹²。

『キタ・セクスアリス』に戻ろう。九州出身という限定が加わるため、「硬派」は少数派である。だがそれにもかかわらず、上で引用したように、「硬派たるが書生の本色」と「硬派」が規範化されており、「紺足袋小倉袴」という「硬派」の服装を「軟派」も真似している。学生集団内部では「男色」は異端視されるどころか、反対に、正統なものとして見なされていたのである。

この作品の男性同性愛の「二通りの語られ方」に着眼した生方智子が指摘するように、「紺足袋小倉袴」や「白足袋」といった服装によって「硬派／軟派」が規定される点は非常に重要である。というのも、服装が第一の基準であることは、男子学生間で「硬派／軟派」の区分が流動的に解釈されていることを示唆しているからだ（生方 a 39-41）。要するに、男子学生であれば、誰もが「硬派」にも「軟派」にもなり得たのである。「私」をレイプしようとした「硬派」の逸見が「急激な軟化」（森 a 130）を遂げたという象徴的なエピソードも紹介されている。しかし、「男色」が許容されていたのは学生集団内部だけであり、集団外のそれは不可視化された。そのため、男子学生の成長と連動した「硬派」から「軟派」への「軟化」はあるものの、その逆は見られない。

以上、男子学生集団内部で同性愛が「一般化」の見解で規定され、期間限定的なものにとらえられたところは、「スクール・ボーイたちの同性愛」表象の特徴であるのだが、この点に関しては本論文の第7章で堀辰雄の『燃ゆる頬』を読む際に確認しよう。

ところで、上で引用した一節によると、「軟派」は「硬派」の服装を真似しても、「袖をまくることが少い。肩を怒らすことが少い」。また、「袖は肩の辺までたくし上げていないと、懦弱だといわれる」（森 a 113）とも記されている。ここからは、「硬派」が男性性を体現しているために、「書生の本色」と規範化されていたことが読み取れる。なるほど、この作品では男性間のセクシュアリティには過剰な男性性が付与され、レイプと暴力的なアナルセックスによって規定されている。「軟化」以前の逸見に求められた「僕」も、「獵人」

を前にした「鳥」に自身をなぞらえている（森 a 120）。一方、「軟派」は「懦弱」と見なされたために、「多少影護い処があるように見えていた」こともわかる。

とはいえ、『キタ・セクスアリス』の男子学生集団内部で「硬派」と「軟派」が対立的な関係にあったわけではない。「軟派」の宮裏という学生に「少年」の口説き方を聞かれた逸見が、怒り出すのではないかという「僕」の予想にも反して、「やっぱり手じゃが、こぎゃんして」（森 a 120）と実践的な解説をする場面もある。

ここで、これまで読んできた“VITA SEXUALIS”の男子学生集団における「性」の解釈のされ方を整理しよう。「硬派／軟派」が性的欲望の対象の性別によるセクシュアリティの区分だとすれば、「年長者／少年」は性的役割の「能動／受動」に関わる区分であり、むしろジェンダーに基づいた二分法と言える。つまり、男子学生集団は、男性の成長過程に応じた「年長者／少年」という二つのジェンダーと、「硬派／軟派」という二つのセクシュアリティで構成されているのである¹³。そうすると、「少年」とは「年長者＝男性」ではない存在として定義される。したがって、「僕」が「少年視」されることを極度に避ける背景には、男性間の性行為そのものへの嫌悪感のみならず、レイプされることで、女性化してしまうことへの恐怖心もあったのではないか。もちろん、「硬派たるが書生の本色」と見なされていた“VITA SEXUALIS”の男子学生の中で、「少年」と男性性の阻害を結びつける認識が広く共有されていたわけではないだろう。それは当時を振り返る語り手としての「僕」の判断であると考えたほうが妥当である。

「僕」は一貫して女性化への強い嫌悪感を抱いている。そもそも、“VITA SEXUALIS”は、「げんげ」の花を摘む6歳の「僕」が、「前の日に近所の子が、男の癖に花なんぞを摘んで可笑しいと云ったことを思い出して、急に身の周囲を見廻して花を棄てた」という興味深いエピソードで幕を開けたのであった（森 a 92）。

2. 『賤のおだまき』と「男色」の理念

続いて、いったん『キタ・セクスアリス』を離れ、先ほども触れた『賤のおだまき』に目を向けたい。この作品を検討することで、当時、「男色」の何が讃美され、何が退けられたのかがより鮮明になるだろう。『賤のおだまき』を論じた前田愛の『『賤のおだまき』考——『キタ・セクスアリス』の少年愛』（1989年）、小森陽一の「日本近代文学における男色の背景」（1995年）を本節では手がかりにしよう。

「鹿児島塾」に由来する、作者不明の『賤のおだまき』がブームになったのは明治十年代である。金井が13歳の段階では「写本」として男子学生間で流通していた書物が、1884年には自由党系の小新聞『自由燈』に掲載されることになった。男子学生の中で「密かに「写本」としてまわし読みされていたもの」が「新聞というマス・メディアに登場する」ようになったのである（小森 c 73）。前田愛の調査によると、連載に先立って、『自由燈』には「在東京同窓学友連」という署名で、次のような断り書きが出された。

是の一編は往時薩摩及び諸雄藩に於て壯士少年が膾炙伝承せし所の一奇書賤緒環てふ書にして壯士吉田大蔵少年平田三五郎の義談艶話を綴りし物語なり抑も男色の事は造

造化自然に悖戻したる行事にして開明の道学固よりこれを取らず法律亦た禁ずる所なりと云ふと雖も其の義を重んじ気を尚び生死渝らず相誓ふて文武を奨励し力を国家に尽すが如き彼の輕薄者流の利を見て義を忘れ禄の爲めに節を失ひ軟弱卑怯自ら甘んずる近世人士の風に比すれば大に取るべきものあり（前田 b 322）

『賤のおだまき』で綴られる「壮士」吉田大蔵と「少年」平田三五郎の「男色」とは、「造化自然に悖戻したる行事」であり、「開明」に反し、法律にも抵触すると記されている。ただし実際には、「在東京同窓学友連」の記述とは裏腹に、1884年の時点では、1872年に立案され、ほとんど成果がなかった、男性間の性行為を禁じた「鶏姦条令」が旧刑法制定とともに廃止されて間もない時期であった（古川 b 37-40）。いずれにせよ、そうしたリスクを冒してまでも、なぜ『自由燈』は『賤のおだまき』を掲載したのだろうか。それは行為としての「男色」は「造化自然に悖戻したる行事」、「法律亦た禁ずる所」だとしても、「義を重んじ気を尚び生死渝らず相誓ふて文武を奨励し力を国家に尽す」という「男色」の理念は国家にとっては有益なものだと考えられたからである。

本論文でも『賤のおだまき』を概観しよう。舞台は薩摩の嶋津藩、時代設定は主人公の平田三五郎が12歳の慶長元年（1596年）から15歳になる慶長四年までである。物語は「嶋津の累代執権職たりし平田太郎左衛門尉増宗の息男」で、「麗しく容色無双の少年」（『賤のおだまき』2）三五郎を見初めた「血気盛んの荒者」（『賤のおだまき』3）倉田軍平が、平田家の家来尾上権六を通じて、この美少年に「君思ふ枕の下ハ涙川身ハ浮草の寝入る間もなし」（『賤のおだまき』7）という露骨な歌を付けた手紙を渡すエピソードから始まる。

倉田が「文字の道ハ露知らず無学至極の者」（『賤のおだまき』6）であったため、三五郎は彼の手紙を無視する。彼はこの美少年に接近することを試みるが、実現せず、翌年、とうとう「同志」（『賤のおだまき』9）の小濱助五郎とともに13歳になった三五郎をレイプしようとする。しかし危機一髪というところに吉田大蔵が偶然通りがかり、三五郎は救われる。事実が発覚すると、倉田と小濱は「親類共」に「切腹」させられることになる（『賤のおだまき』16）。というのも、「兵児二才制度」に照合すれば、「平田太郎左衛門尉増宗の息男」で、美少年の三五郎は守護すべき「稚児様」に他ならず、彼らはそれを犯そうとしたからである。

ここから三五郎と大蔵の関係が始まる。倉田・小濱の一件を契機に、大蔵は、それまでは「高嶺乃花」であり、「廉直剛毅」で「武藝」や「文」に長け、「和歌乃道」（『賤のおだまき』19）にも精通した、評判の美少年である三五郎と「契を結」（『賤のおだまき』27）ぶ。物語は、倉田・小濱の「稚児様」へのホモエロティックな欲望を統制したはずの大蔵が、今度はその「稚児様」と関係を結んでしまうというねじれたプロットを構成するのだ（小森 c 76）。なお、「思ひもつれし恋の名を掛けてぞ解る雪の肌触れて契を結びける」（『賤のおだまき』27）といった一節からは、「在東京同窓学友連」が退けようとした、理念だけには限定されない男性間の性行為が、この作品には明示的に組み込まれていることがわかる。

以降、彼らはますます「文武二道」（『賤のおだまき』27）に精進するようになるのだが、石塚十助など二人の仲を「羨み妬む」者の「姦計」に脅かされ（『賤のおだまき』29）、「起

証文」(『賤のおだまき』37)が結ばれる。小森陽一や小森論を踏まえたキース・ヴィンセントが論じているが、「漢文体的候文」による「起証文」が、私的關係である「男色」をあたかも公のものであるかのように偽装するのである(小森c 78, ヴィンセントb 223-224)。だが、武士は公的には「武士道之儀第一之事」であるところの「忠信孝義」を君主に捧げなければならない。一方、「兄弟之契約」に基づいた「共生死事」はそれと矛盾する。その結果、「起証文」が禁じる「二心」となり、「二心」を内包することで「男色」の絆は危うさを抱え込んでしまうことになる(『賤のおだまき』37, 小森c 78)。

『賤のおだまき』は、鳴津藩の内乱である庄内一揆で、15歳になった三五郎が大蔵とともに出兵する場面で締めくくられる。戦場でも二人は「いつも互に寄添」っており、「打死」をした大蔵の跡を追って、三五郎も壮絶な「打死」を遂げる(『賤のおだまき』64)。三五郎は大蔵との絆において「文武二道」を訓練し、「忠孝廉直剛気たる吉田[の]気風」(『賤のおだまき』65)を模倣し、自己形成を果たしたのだ。ここに、「在東京同窓学友連」が前景化する「男色」の理念が指摘できる。

しかも、物語の最後では「後世男色を好む人只々色道にのみ沈溺し[……]忠孝二つを打ち忘れ信義の心ろなかりせば」(『賤のおだまき』68)と「後世」の「男色」が批判され、周縁化されており、そうすることで、三五郎と大蔵の絆が美化され、正統化される。『キタ・セクスアリス』の「硬派たるが書生の本色」という性愛規範の背後にも、形骸化したものであるかもしれないが、『賤のおだまき』に見られるような年長者の指導と少年の成長という原理が存在していたのである。

『賤のおだまき』は、坪内逍遙や山田美妙などの同時代の作品においても取り上げられている。逍遙の『当世書生気質』(1885-1886年)に登場する桐山勉六という書生は、「屢々取出して読むと思しく。其摺れたること洋書に優れり」(坪内137)というほど『賤のおだまき』を愛読しており、「女色」を「柔弱」と批判し(坪内139)、「女色に溺るるよりハ龍陽¹⁴に溺るるほうがまだえいわい」(坪内143)と男性同性愛を正当化する。ただし、その桐山も「唯々理論上に行ふ」(坪内143)と「在東京同窓学友連」と同様に男性同性愛を厳格に理念化している。一方、美妙の『少年姿——新体詩華』(1886年)は、『賤のおだまき』の平田三五郎の物語を翻案した新体詩「平田三五郎宗次」から始まっている(山田11-17)。

また、当時を回顧する文学作品にも『賤のおだまき』の名前はたびたび出てくる。たとえば、『キタ・セクスアリス』と同年に発表された永井荷風の『祝盃』(1909年)でも、学生時代の「男色」に触れて、「薩摩琵琶歌『賤の小田巻』にある平田三五郎が伝記」が持ち出されている(永井302-303)。さらに、大正期以降の性欲学の文献でも『賤のおだまき』は頻繁に言及された(羽太・澤田184など)。

興味深いことに、この書物の流通は日本国内にとどまらない。20世紀初頭に、巖谷小波が、マグヌス・ヒルシュフェルトを中心としたドイツの同性愛解放組織である科学的人道委員会で同書を紹介したのをきっかけに、日本の「男色」を語る際にしばしば引き合いに出されるようになった。エドワード・カーペンターはこの書物を「日本のホーマー」(Carpenter 149)と称讃している¹⁵。古代ギリシアの「ペデラスティ」にも重ね合わされながら、西洋では『賤のおだまき』が男性同性愛を擁護するために援用されたのである¹⁶。

3. 「三角同盟」と性行為なき「男色」——『キタ・セクスアリス』（2）

『キタ・セクスアリス』に戻ろう。15歳になった「僕」は古賀鶴介という学生と同室になる。古賀は「顴骨の張った、四角な、赭ら顔の大男」であり、「安達という美少年に特別な保護を加えている」（森 a 130）。古賀が「服装から何から、誰が見ても硬派中の鏘々たるもの」（森 a 130）であるため、「僕」は、「獅子の窟に這入るような積」（森 a 131）で彼の部屋へ移った。実際に古賀は「去年の秋頃から僕〔金井〕に近づくように努め」ており（森 a 130）、「僕は例の短刀の櫛を握らざることを得なかった」（森 a 131）のだが、同室になってからは、逸見のように「僕」を「少年視」することはない。「少年」という位置に置かれていなければ、「硬派」の学生に「面白い小僧だ」と上下関係でとらえられても、「僕」は嫌悪感を抱かず、むしろ「無邪気な大男」である古賀に好感を持つ（森 a 134）。そして、古賀の友人である美青年の児島とともに、「僕」は「三角同盟」（森 a 138）を結成する。以下、本節では「三角同盟」における「性」のあり方を論じよう。

古賀の「性欲的生活」について、「僕」は次のように述べる。

古賀は不断酒を飲んでぐうぐう寝てしまう。併し月に一度位荒日がある。そういう日には、己は今夜は暴れるから、君はおとなしくして寝ろと云い置いて、廊下を踏み鳴らして出て行く。誰かの部屋の外から声を掛けるのに、戸を締めて寝ていると、拳骨で戸を打ち破ることもある。下の級の安達という美少年の処なぞへ這入り込むのは、そういう晩であろう。荒日には外泊することもある。翌日帰って、しおしおとして、昨日は獣になったと云って悔んでいる。

児島の性欲の獣は眠っている。古賀の獣は縛ってあるが、おりおり縛を解いて暴れるのである。併し古賀は、恰も今の紳士の一小部分が自分の家庭だけを清潔に保とうとしている如くに、自分の部屋を神聖にしている。僕は偶然此の神聖なる部屋を分つことになったのである。（森 a 138）

古賀には「荒日」がある。「荒日」とは、「性欲の獣」が「暴れる」日のことを指す。「僕」は「性欲」を獣化し、それを抑制することを「清潔」や「神聖」と見なしており、古賀自身もそうした見解に同一化している。要するに、「性欲の獣」を縛ることが「三角同盟」の基盤になっているのである。また、ここでも、「廊下を踏み鳴らす」「拳骨で戸を打ち破る」など男性間のセクシュアリティは暴力的に描かれている。

「三角同盟」では、「性欲」一般が獣化され、その抑制が求められるのは間違いない。だが、「男色」と「女色」の位置づけは異なったものである。「僕」は次のように述べる。

平生性欲の獣を放し飼にしている生徒は、此 *triumviri* の前では寸毫も仮借せられない。中にも、土曜日の午後に白足袋を穿いて外出するような連中は、人間ではないように言われる。僕の性欲的生活が繰延になったのは、全く此三角同盟のお蔭である。後になって考えて見れば、若し此同盟に古賀がいなかったら、此同盟は陰気な、貧血的な物になったのかも知れない。幸に荒日を持っている古賀が加わっていたので、互に制裁を加えている中にも、活気を失わないでいることを得たのであろう。（森 a 138-139）

「性欲の獣を放し飼にしている」学生の中でも、「白足袋を穿いて外出するような連中」、すなわち、「軟派」が特に非難の的になっているのである。ここでは明らかに「三角同盟」は「硬派たるが書生の本色」という男子学生の規範に接近しており、「僕」もそれに加担しているのだ。しかも引用した一節では、「僕」が古賀の「荒日」を「活気」と結びつけ、「三角同盟」を「幸に」も「貧血性」から守ったと肯定的に解釈していることにも注意する必要があるだろう。生方が指摘しているように、この一節が『キタ・セクスアリス』で「性欲」が否定されない唯一の箇所なのだが、それが古賀の「男色」を指しているのである（生方 a 42）¹⁷。

このように「軟派」が貶められた背景にはミソジニーが認められる。「硬派」の逸見が「軟化」し、退学したことが示すように、この作品で女性は一義的に男子学生を「書生の本色」から逸らし、「墮落」（森 a 126）させるものにとらえられている。「性欲的生活は零」（森 a 138）の児島は別にしても、埴生や安達といった美少年は皆女性を通じて「墮落」という顛末をたどる（森 a 126, 142-143）。それに対して、「硬派中の鏘々たるもの」である古賀は「墮落」しない（森 a 155）。つまり、女性を「墮落」と結びつけ、「女色」がミソジニスティックに忌避された結果、「男色」が正当化されたのである。

「僕」もこうしたミソジニスティックな見方を共有している。佐伯順子が述べるように、「僕」は古賀や児島とは違い、西洋的な“love”に基づく「青年男女の naively な恋愛」（森 a 141）を夢見ているのだが、「醜男子」（森 a 113）意識とあいまって、それが実現されることはない。物語の終盤、留学先のドイツでのエピソードが紹介される場合も、「攻勢」、「陣地」（森 a 176, 177）など戦闘の隠喩で女性との関係は表現されている（佐伯 126-127, 生方 a 38）。

ところで、上で、「三角同盟」と古賀の「男色」の接点に触れたが、非常に興味深いことに、「硬派たるが書生の本色」という規範を体現しているだけではなく、彼らは次のように「硬派」のふりまでする。

三人で吉原を見に行こうということになる。古賀が案内に立つ。三人共小倉袴に紺足袋で、朴歯の下駄をがらつかせて出る。上野の山から根岸を抜けて、通新町を右へ折れる。お歯黒溝の側を大門に廻る。吉原を縦横に闊歩する。軟派の生徒で出くわした奴は災難だ。白足袋がこそこそと横町に曲るのを見送って、三人一度にどっと笑うのである。（森 a 139）

「硬派」は「紺足袋」、「軟派」は「白足袋」とそれぞれ服装により規定されていた以上、「小倉袴に紺足袋」という「硬派」の衣装を身に纏い、「硬派中の鏘々たるもの」である古賀を先頭に立てて、吉原を「闊歩」する「三角同盟」は、笑われる「軟派」の学生にとっては「硬派」以外の何物でもない（生方 a 40-41）。「軟派／硬派」の流動性を利用し、「軟派」の学生を「どっと笑う」「僕」は、「硬派」を演じることに喜びを見出してもいるのである。言うなれば、「三角同盟」とは擬似的な「硬派」、性行為なしの「男色」集団なのだ。「在東京同窓学友連」の断り書きや『当世書生気質』の桐山勉六の主張における「男色」の理念

化との共通点も指摘できるだろう。なお、「硬派」のふりをした「三角同盟」が「吉原を縦横に闊歩する」のに対して、「軟派」は「こそこそと横町に曲る」。ここからも「硬派」に男性性、「軟派」に女性性が付与されていることが読み取れる。

そもそも『キタ・セクスアリス』には「男色」のエロティシズムが拡散している。小森陽一が読み解いているように、上京したばかりの「僕」は「家従」たちが吉原について語る「雑談」に加わり、彼らの間で「おれ」となり、その「おれ」よりもはるかに年上の「家従」たちと同質化しつつ、彼らが春画に気を取られている傍らで、「西南戦争の錦絵」を見つめる（森a 103-104）。薩摩と「男色」の連関はこれまでも述べてきたが、明治十年代には、絵本などで「西南戦争」における西郷隆盛と「鹿児島塾」の子弟たちとの「男色」的絆が強調されていた。金井は時に「僕」から「おれ」へと一人称を変更して、明治の世の中ではすでに失われた士族的な「男色」的エロティシズムへと身を浸そうとしているのである（小森d 256-7）¹⁸。ただし、それは彼自身が「少年視」されないこと、すなわち、男性ジェンダーから逸脱しないことが確保される場合に限られる。

4. 「異常な性癖を持って生れたのではあるまいか」——『キタ・セクスアリス』（3）

“VITA SEXUALIS”で金井湛は一人称の語り手になり、明治十年前後の男子学生の「男色」を回顧している。しかし、彼は明治四十年代に存在しているという設定である。そのため、テキストには明治十年代にはなかったはずの「性欲」という概念が持ち出される。斎藤光が明らかにしたように、明治二十年年代から医学の領域では、「性欲」は食欲も含めた「本能的衝動」を指す語として使われることはあったが、今日用いられる“sexual desire”という意味には限定されていなかった。そのような意味で「性欲」を最初に用いた人物が他ならぬ森鷗外であったのだ（斎藤b 231）。

鷗外は1896年に文芸評論『月草』の「叙」で、ゴンクール兄弟やフロベールの「自然主義」という名の附いた一種特異な産物を論じる際に、次のように述べている。

又人間の動物的な側を誇張して、性欲すなわち劣等な色気を行為の唯一の原動力にしたような人物を写すのは、いわゆる病理を詩の種子に使うのだ。こういう類の詩の出て来たのは、伊太利のマンテガツツア、独逸のクラフト、エエビングなどの医学上の論説が詩の境にはいったからだ。（森e 294）。

「性欲」は「人間の動物的な側」の「劣等な色気」ととらえられ、クラフト=エビングなど「医学上の論説」と結びつけられている。そこで「性欲」が一時的な「行為」ではなく、それを引き起こす「原動力」と見なされている点は重要だ。「性欲」が個人の内部に存在するものとして定義されているのである。

一方、陸軍軍医であり、軍医学校の教官であった林太郎は1902年から1903年にかけて、自らが創刊した雑誌『公衆医事』に「性欲雑説」を發表し、「性欲ノ神経機関」、「男子ノ性欲抑制」、「獨姪[オナニズム]」など「性欲」に関わる13項目を取り上げた（森h 103-140）。

「性欲雑説」は、1908年に衛生学の教科書である『衛生新編』に収録されることになるわけだが（千葉 117）、作家森鷗外が文芸評論で用いた「性欲」を医学者森林太郎が医学・衛生学の領域で浸透させたのだ。そして、林太郎の名前で出された文学作品『キタ・セクスアリス』で、「性欲」が文学表象に織り込まれることになる¹⁹。

なお、「性欲雑説」ではクラフト=エビングの見解が多用されているものの、同性愛そのものが俎上にのせられることはほとんどない。たとえば、「獨姪」の項目で、古代ギリシア・ローマで「獨姪」が少なかったのは「男色」が行なわれていたためだという一節（森 h 124）、あるいは、「交互獨姪（mutuelle Onanie）ハ性欲反常（男子相姪、女子相姪）ノ者ノ為ス所」という補足的な説明が見出せる程度に過ぎない（森 h 125）。

上で引用したように、鷗外は1896年の時点で西洋の自然主義に皮肉を込めた眼差しを向けているのだが、日本では明治四十年代になると、自然主義文学がブームになった。『キタ・セクスアリス』の金井はそうした時代に位置しており、テキストの冒頭部分で匿名の語り手が金井について語る場面には、次のような一節がある。

金井君は自然派の小説を読む度に、その作中の人物が、行住坐臥造次顛沛、何に就けても性欲的写象を伴うのを見て、そして批評が、それを人生を写し得たものとして認めているのを見て、人生は果してそんなものであろうかと思うと同時に、或は自分が人間一般の心理的状态を外れて性欲に冷澹であるのではないか、特に frigiditas とでも名づくべき異常な性癖を持って生れたのではあるまいかと思った。（森 a 86, 下線引用者）

ここで金井は「性欲的写象」の氾濫の中で、自分自身が「冷澹」、あるいは“frigiditas”なのではないかという疑念に苛まれている。「frigiditas とでも名づくべき異常な性癖を持って生れたのではあるまいか」という箇所からは、“frigiditas”なる「異常な性癖」が生得的なものとして解釈されていることが読み取れる。

こうした不安に「何か書いて見ようという、兼ての希望」（森 a 89）が合流し、さらに、そこに高等学校を卒業した長男への「性欲的教育の問題」（森 a 90）が加わって、金井は、「性欲というものが人の生涯にどんな順序で発現して来て、人の生涯にどれ丈関係しているかということ」（森 a 89）、すなわち、自己の「性欲の歴史」（森 a 90）を執筆することを決意して、次のように述べる。

実はおれもまだ自分の性欲が、どう萌芽してどう発展したか、つくづく考えて見たことがない。一つ考えて書いて見ようか知らん。白い上に黒く、はっきり書いて見たら、自分が自分でわかるだろう。そうしたら或は自分の性欲的生活が normal だか anomalous だか分かるかも知れない。（森 a 90）

金井は「性欲」を“normal/anomalous”と二分し、それについて語ることが「自分が自分でわかる」ことになるととらえている。つまり、「性欲」が自己のアイデンティティを規定するものとして解釈されているのだ。

その過程で参照されるのが、“Lombroso”や「Möbius 一派」といった「精神病学者」の見解である（森 a 87）。この作品にクラフト=エビングの名前は登場しないが、*Psychopathia Sexualis* の主題であった“Sadist”や“Masochist”など精神医学における重要な概念は言及されており（森 a 88）、それらが「性欲の変態」（森 a 89）と括られる。長男への「性的教育」についても、金井を鼓舞したドイツから送られた報告書は「教育家」、「宗教家」、「医学者」によって書かれており、そこにも医学的見解が組み込まれている（森 a 90）。要するに、「哲学が職業である」（森 a 85）にもかかわらず、金井が「性欲」を理解する方法は「精神病学者」や「医学者」のそれに近いのである。

“VITA SEXUALIS”で金井が論じようとする「性欲の変態」とは「冷澹」であるかどうか、換言すれば、「性欲」の量による「変態」である。それは、サディズム・マゾヒズム、フェティシズム、ホモセクシュアリティのような「性欲」の対象による「変態」とは性質を異にしている。とはいえ、自然主義文学や出歯亀事件²⁰はすべてヘテロセクシュアリティを扱ったものであり、そうしたセクシュアリティに対して「冷澹」ということは、精神医学における「同性愛／異性愛」の二律背反のもとでは、ホモセクシュアリティに近いということになる。

実際に、精神医学者クラフト=エビングは「色情冷淡」を「同性色情者」と関連づけて解説している（クラフト=エビング 284）。したがって、暗示的なレベルにとどまっているものの、『キタ・セクスアリス』が「精神病学者」の見解に立脚している以上、金井が“VITA SEXUALIS”を綴る出発点には、“frigidity”と近接する“Homosexualität”「とても名づくべき異常な性癖を持って生れたのではあるまいか」という不安が隠れているのではない。『キタ・セクスアリス』の男性同性愛の分析では、寄宿舎の明瞭なる「男色」の表象ばかりにスポットが当てられる傾向が強いが、“VITA SEXUALIS”の執筆者としての金井がそもそもホモセクシュアリティに隣接していた点を見逃すことはできないだろう。

5. 「Urning たる素質」とテキストの綻び——『キタ・セクスアリス』（4）

さて、精神医学の見解が持ち込まれることで、かつての男子学生の「男色」表象には綻びが生じてしまう。本節では、そうした綻びに注目して、『キタ・セクスアリス』を読み返そう。

まず問題となるのが、「僕」が 11 歳の時に入学した「私立学校」で、はじめて「男色ということ」を知る場面である。先ほども引用したが、そこには次のような一文が付け加えられていた。

その少年という詞が、男色の受身という意味に用いられているのも、僕の為めには新智識であった。僕に帰り掛に寄って行けと云った男も、僕を少年視していたのである。
[...] そのうちに手を握る。頬摩をする。うるさくてたまらない。僕には Urning たる素質はない。（森 a 111）

引用した箇所前半では年齢差に基づいた「年長者／少年」という区分が提示されている。

だが、最後にそれとはまったく別の「Urningたる素質」が持ち出され、その有無を根拠に「僕」自身の同性愛の欲望が否定される。

ここで“Urning”について概説しよう。“Urning”とは、1864年、ハノーヴァー王国の陪席判事であったカール・ハインリヒ・ウルリヒスが著書『ウィンデクス』で、プラトンの『饗宴』をもとに考案した新語であり²¹、男性同性愛を“*anima muliebris virili corpore inclusa*”、すなわち、「男の身体に囚われた女の魂」によって説明するものであった。彼は、人間の胎児は子宮内では男性器・女性器双方を持ち、成長するにつれてどちらか一方を失うという同時代の生物学の知見にヒントを得て、“Urning”を考案し、それを生得的なものにとらえたのである。ウルリヒスが法律家であったことが示唆するように、“Urning”とは、もともとは医学とは一線を画した概念であり、彼自身もそれを病理というよりは突然変異的なものと解釈していた。

しかし、19世紀後半になると、精神医学者のヴェストファルやクラフト＝エビングが“Urning”を使うことで、この語は病理化された。精神医学においては、男性の体内の女性が他の男性を欲望すること、女性の体内の男性が他の女性を欲望することにより同性愛が解説されるようになるのだが、その原型が“Urning”なのである。

なお、ウルリヒスが“Urning”を作った背景には、男性同性愛を脱犯罪化する目論見があった。当時のハノーヴァーはドイツの25の領邦国家のなかで、男性間の性行為を罰する法律を持たない4つの領邦のうちの一つであった。だが、男性間の性行為を取り締まる刑法第143条を持っているプロイセンの侵略の危機にさらされていた。そこで、ウルリヒスは、“Urning”を後天的で選択的な悪徳ではなく、生得的なものであると主張し、それゆえに処罰の対象にするべきではないと論じ、ハノーヴァーにも適用されることになるかもしれないプロイセン刑法第143条への予防線を張ったのである。

結局、彼の懸念は現実化することになり、1866年に、ハノーヴァーはプロイセンに併合され、普仏戦争終結後の1871年にドイツ帝国が成立すると、男性間の性行為を禁じるプロイセン刑法第143条はドイツ帝国刑法第175条に受け継がれ、ハノーヴァーにも適応されることになった（月川 b 176-183, Greenberg 408）。ウルリヒスの企ては頓挫したものの、同性愛の先天性の主張が男性間性行為の脱犯罪化を目指すものであったという論点は重要なものであり、本論文でもしばしば触れることになる。

現在、“Urning”という言葉は独語圏・仏語圏・英語圏・日本語圏でも用いられることは少なくなったが、精神医学や性科学・性欲学が花開いた1880年代から20世紀前半にかけては、ポピュラーな用語であった。鷗外も早い時期から“Urning”を用いている²²。1889年に、鷗外は「台麓学人」という筆名で、『裁判医学会雑誌』に「外情の事を録す」というエッセイを発表するのだが、そこで“Urning”は次のように定義される。

刑法上と裁判医学上に価値あるは之に反せる場合、即ち男の男と交わるものなり所謂外情 Urningthum (Päderastie) 是れなり外情には鶏姦あり素股ありまた互に手淫することあり […]

今も巴里、龍動、伯林、維也納には後庭を売て業となすものあり即ち所謂かげまなり

男色 Urning なり其情錯は或は先天性に或は後天性なるの別あれど要するに伝粉薫香、媚を男子に求むるものなり往てこれを買うものは則ち男風 Päderast なり然れども間々一表一裏、両性を兼備する人あり。(森 g 155)

鷗外は「男の男と交わるもの」を「外情」と言い換え、それに“Urningthum”と“Päderastie”という二つのドイツ語を当てる。引用した一節からは「能動／受動」に対応して“Päderast”と“Urning”が使い分けられていることが読み取れるのだが、同時にその不十分さも指摘される。また、ここでは精神医学的な「先天性／後天性」の分類も示唆されている。ところが、鷗外が力点を置いているのは、“Urning”の内面ではなく、「鶏姦」、「素股」、「互に手淫すること」という列挙が示すように、男性間の性行為である。なお、引用した鷗外のエッセイでは暗示的にしか行なわれていないのだが、「かげま」を“Urning”と呼ぶのは精神医学的な再解釈であり、後に日本の性欲学の文献で試みられることになる²³。

それでは、『キタ・セクスアリス』の“Urning”をどのように解釈するべきか。「僕」は「Urning たる素質」(傍点引用者)を問題にしている。そこには「精神病学者」の見解を取り入れて、「frigiditas とでも名づくべき異常な性癖を持って生れたのではあるまいか」と、「性欲」を個人の内部に存在し、生得的なものにとらえる、明治四十年代の語り手の「僕」の眼差しが組み込まれている。父親に平然と「うむ。そんな奴がおる。これからは気を附けんと行かん」と言われて、「男色」とは、学校で「嘗めなければならぬ辛酸の一つであった」と結論づけてしまう、明治十年代の登場人物の「僕」の眼差しではない。つまり、男子学生集団の同性愛を「一般化」する眼差しに、特殊な「素質」に基づいて同性愛を「局所化」する眼差しがクロスしているということになるだろう。こうした精神医学言説に基づいた同性愛の「素質」は、これ以降も、テキストにいくつかの綻びを生じさせる。

13歳の時に入学した東京英語学校でも「僕」は最年少であり、年長の学生から「少年視」される。そこで埴生という学生を引き合いに出して、「僕」は次のように語る。

僕は硬派の犠牲であった。何故というのに、その頃の寄宿舎の中では、僕と埴生庄之助という生徒とが一番年が若かった。埴生は江戸の目医者の子である。色が白い。目がぱっちりしていて、唇は朱を点じたようである。体はしなやかである。僕は色が黒くて、体が武骨で、その上田舎育である。それであるのに、意外にも硬派は埴生を附け廻さずに、僕を附け廻す。僕の想像では、埴生は生れながらの軟派であるので免れるのだと思っていたのである。(森 a 115)

「一番年が若かった」ために「硬派の犠牲」となったという引用した箇所前半は、まさしく年齢差に基づく「年長者／少年」の区分に合致している。だが、続く一節では「硬派」が埴生を「附け廻さ」ないのは、彼が「生れながらの軟派」であるためだと解釈される。しかしながら、これまでも検討してきたように、「硬派／軟派」の区分は、服装によって決定づけられる流動的なものであった。少なくとも「先天性／後天性」の二元論とは無関係である。ここにも「素質」を重視する「精神病学者」の眼差しを見て取ることができるの

ではないだろうか²⁴。しかも、引用した一節に従えば、「硬派の犠牲」になる「僕」には「硬派」たるべき何かがあるということになり、先ほどの「僕にはUrningたる素質はない」という断言との間に整合性が取れなくなる。

さらに、「三角同盟」に触れた一節では、古賀が安達という美少年を「女色」、すなわち、女性による「墮落」から救おうとする場面が描かれるのだが、その古賀に関して「僕」は次のように語る。

古賀の単純極まる性質は愛す可きである。併し彼が安達の為めに煩悶する源を考えて見れば、少しも同情に値しない。安達は寧ろ不自然の回抱を脱して自然の懐に走ったのである。(森 a 142)

「僕」はたとえそれが「墮落」であっても「女色」を「自然の懐」ととらえ、安達と古賀との「男色」を「不自然の回抱」と位置づける。「男色／女色」が「自然／不自然」の二元論のもと、「不自然」と解釈されているのだ。しかし、それは明治十年前後の学生集団の論理とは一致しない。たとえば、「在東京同窓学友連」が提示した『賤のおだまき』の紹介文では、「男色」は「自然／開明」という二項対立の「自然」と結びつけられており、また、「硬派」の学生たちも、出自や振る舞いからむしろ「自然」に近いものとして表象されていた。「男色」を「不自然」と見る眼差しは、「精神病学者」の“normal/anomalous”の二分法に立脚しているのではないか²⁵。

このテキストには「男色」表象の出発点で「Urning たる素質」という精神医学的な見解が導入された。一方、それに続く男子学生集団の描写では、流動的な「硬派／軟派」によってセクシュアリティは規定されていた。こうした二つの見方の矛盾がもっとも顕著に表れるのが、「三角同盟」の代表的な存在であり、「硬派中の鏘々たるもの」であった古賀の結婚においてである。古賀が結婚する直前、彼と「僕」との間には次のようなやり取りが行なわれる。

「僕のかかあになってくれるというものがあるよ。妙ではないか。」これは謙遜したのではない。兎島に比べては、余程世情に通じている古賀も、流石三角同盟の一隅丈あって、無邪気なものである。僕は妙とも何とも思わなかった。(森 a 155)

古賀の言葉に注目すると、彼にとって女性とは「かかあ」、つまり、家父長制を維持するための「妻」であり、「母」である。「僕」が求めながらも実現できない「青年男女の naively な恋愛」などは眼中にない。そのうえで、自身の結婚については「妙ではないか」と付け加えている。もっとも、ここで彼が表明している違和感は、自身が「硬派中の鏘々たるもの」であったからというより、女性を完全に排除した「三角同盟」の一員であったことに起因するのだろう。しかし、「硬派」を“Urning”、あるいは、“Päderast”によって規定するのであれば、「僕」のほう古賀の結婚を「妙」なもの判断しなければならない。ところが、「僕」は「妙とも何とも思わなかった」と古賀の違和感を完全に打ち消してしまうのだ。

なお、女性を「かかあ」としてしか見ない古賀のこのような見解は、「僕」に見合いを勧める「僕」の母親の結婚観、すなわち、「号令結婚」や「脅迫結婚」を擁護する見方に近い（佐伯a 125）。家父長制を維持するためには、「青年男女のnaivelyな恋愛」をいたずらに追求する「僕」よりも、「男色」を嗜好し、「硬派中の鏘々たるもの」であった古賀のほうがふさわしいということまでもテキストは暗に示してしまうのである²⁶。

6. “VITA SEXUALIS”の封印、あるいは、暴露——『キタ・セクスアリス』（5）

以上、金井が「性欲の歴史」を執筆する際に従っていた「精神病学者」の眼差しは、こうしたいくつかの綻びを通して無効化されていると言えるだろう²⁷。改めて確認すると、“VITA SEXUALIS”とは、金井が「自分の性欲的生活がnormalだかanomalousだか分かる」ために綴った彼の「性欲の歴史」であった。物語の結末、再び金井が語られる部分で、彼はいったん、「どうも自分は人並はずれの冷澹な男であるらしい」（森a 178）と結論を出す。

だがすぐに「考え直し」、金井は自分が「冷澹」や“**Impotent**”なのではなく、「三角同盟」によって「性欲の虎を馴らして抑え」たため、「性欲」を制御しているのだと肯定的に述べる（森 a 178）。「**frigiditas** とでも名づくべき異常な性癖を持って生れたのではあるまいか」という不安は否定され、その背後にあった“**Homosexualität**”「とでも名づくべき異常な性癖を持って生れたのではあるまいか」という疑念も解消される。しかし、金井の「正常性」を立証するための「三角同盟」が、古賀の「男色」から「活気」を得ていたことは忘れてはならない。要するに、テキストでは、金井が「正常」になるためには、精神医学的には「異常」な同性愛を原動力とした絆を通過することが不可欠だという奇妙なねじれが生じてしまうのである。

金井は、「五月雨」（森 a 175）の夜に断筆し、「静に巻の首から読み返して見た」（森 a 178）。そして、自らが綴った“VITA SEXUALIS”という書物を「世間に出されようか」（森 a 178）と思案する。大学で哲学を教えている彼は、「**Prudery** に支配せられている教育界に、自分も籍を置いているからは、それはむつかし」く、また、長男にも「読ませたくはない」という（森 a 179）。物語は次のように結ばれる。

金井君は筆を取って、表紙に拉句語で

VITA SEXUALIS

と大書した。そして文庫の中へぱたりと投げ込んでしまった。（森 a 179）

金井は自分の「性欲の歴史」に明らかにクラフト=エビングの *Psychopathia Sexualis* を想起させる“VITA SEXUALIS”というラテン語のタイトルを付けたうえで、「文庫の中へぱたりと投げ込」むのである。

したがって、物語はいかにも「精神病学者」風な題名を与えられた書物が「文庫」へと隠蔽される場面で締めくくられる。男性同性愛に関して、「精神病学者」の目から見れば、

様々な結びを内包した“VITA SEXUALIS”という書物は「文庫」という私的空間へと封印されるのだ。

だがこれだけでは終わらない。本論文では、金井が“VITA SEXUALIS”を投げ込む先が「文庫」であることに注目したい。そもそも、“VITA SEXUALIS”には、10歳になった「僕」が彼の父親の「長持」を探り、「鎧櫃」の中に「男と女とが異様な姿勢をしている」春画を発見し、性器にまつわる秘密を探る場面があった（森a 96-97）。同様に、「精神病学者」の見解に従えば、「性欲の変態」に他ならない同性愛の欲望に満ちた“VITA SEXUALIS”も第一の読者として想定されていた金井の長男、あるいは、他の誰かに遅かれ早かれ発見されてしまうのではないか²⁸。そして、少年の金井が春画からセクシュアリティを探求していったように、この“VITA SEXUALIS”の発見者も同書をきっかけに、性愛の考察に携わるであろうということもテキストでは予期されているのではないか。つまり、“VITA SEXUALIS”を「文庫の中へぱたりと投げ込んでしまった」という結末は単なる「性欲の変態」の隠蔽を表現しているのではなく、その暴露と、それに続くであろうさらなるセクシュアリティ探求の可能性や必要性を示唆しているように思われる。

第2章 “homosexual” の精神化——森鷗外『青年』

1. 女性化への不安とミソジニスティックな男女の「恋愛」——『青年』（1）

前章で述べたように、『キタ・セクスアリス』は“VITA SEXUALIS”を「文庫」へと投げ込むことで、セクシュアリティへの取り組みの継続をほのめかして締めくくられているのだが、鷗外は、少なくとも男性同性愛に関して、さりげなく、しかし、見逃すことのできないやり方で、『青年』という作品の中でその考察を再開したのではないだろうか。『キタ・セクスアリス』と『青年』はもちろんそれぞれに独立した作品であるものの、本論文では男性同性愛表象という観点から、これら二つの作品を接続して読む。

『青年』は1910年3月から1911年8月まで『スバル』に連載された。この作品は、同時代の明治末期が舞台になっており、「詩人になりたい、小説が書いて見たい」（森 b 294）という野望を抱いて上京してきた青年小泉純一を主人公とし、純一の文学創造へ至る道筋を縦糸に、彼と年上の「未亡人」（森 b 330）である坂井れい子、「似つかわしい」（森 b 376）と称されるお雪さん、芸者のおちゃらといった女性たちとの関係、あるいは、年上の「医学生」（森 b 354）である大村莊之助との男同士の「友情」を横糸に編まれたいわゆる「ビルディングスロマン」である。本章ではまず、純一を軸にした男女間の「恋愛」に目を向けよう。

物語は、上京して間もない純一が大石狷太郎という作家の下宿を訪ねようとする場面から始まる。まず彼は、大石の下宿の「おちゃっぴいな小女」の目を通して、「色の白い、卵から孵ったばかりの雛のような目をしている青年」と読者に紹介される（森 b 276）。彼女だけではなく、通りですれ違った「一寸愛敬のある娘」（森 b 281）や「有楽座」でれい子と同席していた「令嬢二人」（森 b 327）をも純一の容貌は引きつけている。

純一の容姿をめぐって、れい子との「閱歴」（森 b 334）、すなわち、性行為の後に、そのことを想起しつつ書かれた彼の日記には、次のような一節がある。

それから己は単に自分の美貌を意識したばかりではない。己は次第にそれを利用するようになった。己の目で或る見かたをすると、強情な年長者が脆く譲歩してしまうことがある。そこで初めは殆ど意識することなしに、人の意志の抗抵を感じるとき、その見かたをするようになった。己は次第にこれが媚であるということを自覚せずにはいられなかった。それを自覚してからは、大丈夫たるべきものが、こんな宦官のするような態度をしてはならないと反省することもあったが、好い子から美少年に進化した今日も、この媚が全くは無くならずにいる。この媚が無形の悪習慣というよりは、寧ろ有形の畸形のように己の体に附いている。（森 b 343）

「醜男子」意識を持ち続けていた『キタ・セクスアリス』の金井湛とは対照的に、純一は「美

少年」であることを自覚しており、「自分の美貌」を利用さえしている²⁹。だが、その「美少年」という認識は純一に不安をもたらすものでもある。彼は、「自分の美貌」の源である「目」の魅力を「媚」と解釈しているのだが、それは「大丈夫たるべきもの」、言い換えれば、男性性に抵触し、純一に「宦官」を思い起こさせる。

『青年』における「媚」と「宦官」との連関は、純一とれい子の「有楽座」での出会いの場面に着目すると、よりいっそう強いものになる。そこで彼を引き寄せたのはれい子の「有り余る媚」を湛えた「切目の長い黒目勝の目」であった（森 b 323）。しかも、二度目の「閲歴」の後の日記に、純一は「奥さんの目の謎は伝染する。その謎の詞に己の目も応答しなくてはならなくなる」（森 b 386）と書いている。生方智子が指摘するように、「媚」とは、伝染性のもので、男性の純一を女性であるれい子に「同化」させるのだ（生方 b 8-9）。それゆえに、「媚」が、純一を「宦官」にしてしまうような「有形の畸形」として忌避される対象になっているのである。

そのため、『キタ・セクスアリス』の金井以上に、女性化への不安はつねに純一を襲うことになる。特に、大村が引用するオーストリアの哲学者“Otto Weininger [オットー・ワイニンガー]”（森 b 360）の説は純一に大きな不安を与える。大村は次のようにワイニンガーを説明する。

「どの男でも幾分か女の要素を持っているように、どの女でも幾分か男の要素を持っている。個人は皆 M+W だというのさ。そして女のえらいのは M の比例数が大きいのだそうだ。」

[...]純一は自分には大分 W がありそうだと思って、いやな心持がした。（森 b 360-361）

片山正雄が 1906 年に『男女と天才』というタイトルで訳したバージョンをもとに、ここでワイニンガーの説の該当部分を概観しよう。ワイニンガーによれば、「男の要素」である“M”と「女の要素」である“W”の配分で男女は決定される。“M”は「意識的」、「W”は「無意識的」なもので（ワイニンゲル 103）、「性慾」を管理するのが「意識」であるため、“M”によって規定される男性は「性慾」を統制する能力を持ち、“W”によって規定される女性は「性慾」に支配される。「男性慾を有し、性慾女を有す」ということになるのだ（ワイニンゲル 92）。一方、「天才」は「最も多くの事物を最も強く意識する人」（ワイニンゲル 114-115）と定義されるため、“M”の割合が「最高程度の男性」（ワイニンゲル 115）が「天才」になる³⁰。ワイニンガーの説は、純一を動揺させつつも、最終的には大村経由で彼にも共有されることになる³¹。

さて、こうした女性化への不安は、容易に女性嫌悪へと転換するものである。『キタ・セクスアリス』の金井が「青年男女の naively な恋愛」を理想化していたのに対して、純一は男女の「恋愛」を切望しており、「負債」（森 b 412）のように感じている。しかし、結論から先に言えば、『青年』でも男女の「恋愛」は実現されず、純一は女性に対して、真っ先に「敵意」を感じてしまう。彼が参加した「Y 県」出身者の「忘年会」（森 b 389）の場面には、それを端的に示す一節がある。そこに居合わせた芸者のおちやらが、純一のことを盗

み見ながら彼の前に来ないことに対して、純一は次のように感じる。

純一の心の中には、例の女性に対する敵意が萌して来た。そしてあいつは己を不言の間に翻弄していると感じた。勿論此感じは的のあなたを射るようなもので、女性に多少の冤屈を負わせているかも知れないとは、同時に思っている。併しそんな顧慮は敵意を消滅させるには足らないのである。(森 b 407)

「女性に多少の冤屈を負わせているかも知れない」という思いがありながらも、純一は女性への「敵意」を募らせていくのである。

引用した一節に「例の女性に対する敵意」(傍点引用者)と記されているように、純一は、おちやら以外の主要な二人の女性キャラクターにも「敵意」を向けている。とりわけ、年上の女性れい子に対しては、「男子」である「自分」が「受身になって」いることが、純一をトラブルに陥れ(森 b 350)、「主動者」(森 b 383)になるつもりで彼女を二度目に訪ねた際に、「人に逢うのを予期してでもいたかと思われるように、束髪(たづみ)の髪の毛一筋乱れていなかった」(森 b 384)様子のれい子を見て、彼女を明確に「敵」(森 b 384)と位置づける。純一のそうした「敵意」は、れい子と差し向かうなかで、しだいに強められていく(森 b 386-387)

さらには、「似つかわしい」と称されるお雪さんからも純一は「戦を挑むような態度」(森 b 296)を感じ取ってしまう。ただし(十四)では、純一が、彼女に抱いていた「不安なような、衝動的なような感じ」(森 b 379)が消滅したとも述べられている。純一はミソジニストではあるものの、少なくともお雪さんへの「敵意」には変化の兆しが見出せる。

れい子やおちやらへに向けられた、純一の過剰なまでの女性嫌悪には「霊肉二元論」の影響を見て取ることができる。この作品では、それは、彼自身が日記で引き合いに出すフランスの作家“Huysmans”の「人生に霊と体との二つの部分がある」という一節(森 b 348)に端を発している。「霊/肉」は対等ではなく、上下関係に置かれており、「精神/肉体」、あるいは、ワイニンガーが提唱する“M/W”とも対応するものである。純一にとっては、れい子との関係は「体丈の閥歴」(森 b 349)であり、「恥辱」(森 b 379)に他ならない。つまり、女性と精神的な「恋愛」関係を築こうとしつつも、実際には肉体的なそれしか結べないことが、彼自身が“W”=女性になってしまうのではないかという不安とあいまって、純一の中にたびたび「女性に対する敵意」を引き起こしているのである。

もっとも、純一が抱く「肉」への蔑視も一貫したものではない。それもまた男性を「霊」、女性を「肉」に振り分ける「霊肉二元論」には相違ないものの、物語の最後(二十四)では芸者おちやらの「男狂い」を綴った記事から、純一は嫌悪感ではなく、「殆ど嘉言善行を見聞きしたような慰め」を得ている(森 b 454)。

2. ホモエロティックな男同士の「友情」——『青年』(2)

続いて、純一と大村の「友情」がどのように表象されるのか検討しよう。二人が出会っ

たのは、夏目漱石を髣髴とさせる作家平田拊石の話を書く会合であった³²。それはいかにもホモソーシャルな「青年倶楽部」（森b 304）である。医学生の大村も純一同様に創作を目指しており、彼はドイツ語だけではなく、フランス語も堪能であるという設定で、純一とは主に「フロオベル」、「モオパッサン」、「マアテルリンク [メーテルリンク]」（森b 311）など仏語圏の文学を通じて親密になる。郷里でフランス語を学習した純一を、大村は「自分の知っている文科の学生の或るものよりは、この独学の青年の方が、眼識も能力も優れている」（森b 321）と評価し、純一も大村に「尊敬」（森b 425）の眼差しを向ける³³。

なお、純一とれい子の関係にもフランスの作家「ラシヌの一卷」（森b 379）が介在している。だが、フランス文学が純一と大村を結ぶのとは反対に、れい子との間ではそれは「肉」の関係のための口実でしかない。

純一と大村の「友情」を考察する際に重要なのは、両者の風貌が対照的に描き出されている点である。「雛のような目」をし、「美少年」を自認している幼い純一とは異なり、大村は外見的には「体格の立派な男」（森b 310）で、「血色の好い、爽快な顔付き」（森b 418）をしており、「平衡」（森b 318）を保っている。「青年倶楽部」で二人がメーテルリンクについて語り合った直後には、彼ら二人の関係性を象徴するかのよう、次のような一節がある。

大村の顔を、微かな微笑が掠めて過ぎた。嘲の分子なんぞは少しも含まない、温い微笑である。感激し易い青年の心は、何故ともなくこの人を頼もしく思った。[...] 医科の学生なら、独逸は出来るだろう。それにフランスも出来るらしい。只これ丈の推察が、咄嗟の間に出来たばかりであるのに、なんだか力になって貰われそうな気がする。ニイチエという人は、「己は流の岸の欄干だ」と云ったそうだが、どうも此大村が自分の手で掴えることの出来る欄干ではあるまいかと思われてならない。そして純一のこう思う心はその大きい瞳を透して大村の心にも通じた。（森b 311）

純一は大村を「頼もしく」感じ、「フランスも出来るらしい」という「推察」も手伝って、大村のことを「欄干」のようにとらえている。そして、それは純一の「大きい瞳」を通じて大村にも伝わったという。ここで、純一の「大きい瞳」にスポットが浴びせられる点に注意しよう。彼の日記には「己の目で或る見かたをすると、強情な年長者が脆く譲歩してしまうことがある」という一節があった。大村は「強情な年長者」（傍点引用者）ではないかもしれないが、女性だけではなく、男性の「年長者」にも純一の「目」は効力を発揮するのである³⁴。

なお、この作品で「強情な年長者」という称号にもっともふさわしいと思われるのは、「ひどく無愛想な奴」（森b 281）という評判の作家の大石であるだろう。その大石にも、純一の「目」は力を及ぼしている。純一の「曇のない黒い瞳」が「自分の顔に注がれたとき、自分の顔の覚えず霽やかになるのを感じ」て、「無愛想」な彼は、思わず「韁」を緩めてしまうのであった（森b 286）³⁵。

ところで、純一は、れい子との関係では、彼女の「目」が溢れさせる「媚」の「伝染」を通して、女性化してしまうことを恐れていた。それに対して、同じ「年長者」とはいえ、

男性の大村が彼の「欄干」のようになることは、純一の男性性を混乱させる気配はない。たとえ大村に「ゆっくり行こうね」などと「庇護するような口調」で接せられても、「純一は不平には思わな」(森 b 352-353) なのだ。物語の中盤では、上野の精養軒で酒を飲むかどうかをめぐって、純一と大村の間で、次のようなやり取りがなされる。

「酒も飲めないことはないのですが、構えて飲むという程好きでないのです。」

「そんなら勧めたら飲むのですか。」

此詞が純一の耳には妙に痛切に響いた。「ええ。どうも僕は *passif* で行けません。」

「誰だってあらゆる方面に *actif* に *agressif* に遣るわけには行かないよ。」(森 b 354)

純一は大村との関係でも“*passif*”であることに違和感を覚えてはいるものの、大村の発言を受けて、そうした不安は解消される。それどころか、“*actif/passif*”という役割分担は二人の絆を強くしているのである。

このように、『青年』では、純一と女性たちの「恋愛」と大村との「友情」は対比的にとらえられている。特に「肉」の要素が大きいれい子やおちゃらとの関係と大村との絆は交わらないように描かれている。たとえば、「有楽座」では、れい子と大村は見事に入れ違いになる(森 b 330-331)。また、(二十)には、大村と純一がメーテルリンクについて語り合う場面があるのだが、純一は、その前夜におちゃらから受け取った名刺を、“*L'oiseau bleu*” (森 b 418) の本の間に隠していた。メーテルリンクは純一と大村を結ぶ重要な作家の一人であり、ここではメーテルリンクに関する議論とおちゃらの名刺が拮抗する。だが結局は、単なる口実であったはずの前者が後者を凌駕し、男同士の「友情」が深められることになる³⁶。

ところが興味深いことに、純一と大村の「友情」にも、「肉」の要素が皆無だというわけではない。「青年倶楽部」の席上でも、二人が言葉を交わす前に、大村は「折々純一の顔を見ていた」(森 b 310) という。先ほども述べたように、大村を「欄干」と見なしたその思いも、純一の「大きな瞳」を通して大村に伝わった。要するに、「顔」や「瞳」といった年下の「美少年」の容姿が契機となり、年齢差・体格差に基づいて、“*actif/passif*”の役割分担によってつながれる大村と純一の「友情」とはきわめて「男色」的なものである。

以上、いくつかの相違点を示しつつも、純一と大村のペアが『キタ・セクスアリス』の金井と古賀のペアに重なるのは明らかだろう。両者とも大柄な年長者と、美醜の面で差こそあれ、年少者のペアである。大村は医学生として、「男子の貞操」(森 b 354)の必要性を唱えているが、『キタ・セクスアリス』の「三角同盟」も「性欲」の抑制装置であった。さらに、『青年』には大村がやってきたことで純一の「陰気な部屋」に「一種の活気」がもたらされるという一節があるのだが(森 b 418)、『キタ・セクスアリス』でも古賀は、「性欲」を抑制することによって「陰気な、貧血的な物になったのかも知れない」という「三角同盟」に「活気」を与える役割を果たしていた。

なるほど、『キタ・セクスアリス』で描かれる明治十年前後の男子学生集団では、古賀を含めた「硬派」は「少年」と実際に性行為を行っていたのに対して、『青年』では男性間の性行為が明記されることはない。『キタ・セクスアリス』で「男色」を象徴していたアイ

テムの「紺足袋」も『青年』ではもはやそれを指す記号としては機能しておらず、純一の下宿先の植長の妻お安という女性と結びついている（森 b 390）。ただし、「男色」が規範化されていた男子学生集団にあっても、古賀と金井は性行為を行なっておらず、「三角同盟」も性行為なき「男色」集団を形成していた。こうした点からも、金井と古賀のペアと純一と大村のペアの繋がりはお互いにはっきりと見えてくるのである。

3. 「同性の愛」と“homosexuel”——『青年』（3）

純一はミソジニスティックに男女の「恋愛」を求め、一方で、大村とのホモエロティックな「友情の楽しさ」（森 b 427）を享受するわけだが、物語の後半（二十一）には、「寂しがらない奴は、神経の鈍い奴か、そうでなければ、神経をぼかして世を渡っている奴だ。酒。骨牌。女。Haschisch」という大村の発言を受け、「二人は顔を見合せて笑」う場面がある（森 b 427-428）。女性はアルコール、賭博、麻薬と一括りにされ、その瞬間に、彼らの間のミソジニーとホモエロティシズムが頂点に達する。

ところが、それを発端として、その時までの「友情の楽しさ」とは異質なものに思われる、次のような疑いが大村を過ぎる。

純一の笑う顔を見る度に、なんと云う可哀い目付きをする男だろうと、大村は思う。それと同時に、此時ふと同性の愛ということが頭に浮んだ。人の心には底の知れない暗黒の堺がある。不断一段自分より上のものにばかり交るのを喜んでいる自分が、ふいと此青年に逢ってから、余所の交を疎んじて、ここへばかり来る。不断講釈めいた談話を尤も嫌って、そう云う談話の聞き手を求めることは屑としない自分が、此青年の為めには饒舌して忌むことを知らない。自分は *homosexuel* ではない積りだが、尋常の人間にも、心のどこかにそんな萌芽が潜んでいるのではあるまいかということが、一寸頭に浮んだ。（森 b 429-430）

純一の「笑う顔」や「可哀い目付き」がきっかけとなり、大村の「頭」に「同性の愛ということ」が浮上する。彼は、それを「人の心」の「底の知れない暗黒の堺」に由来させ、純一との関係を「不断」とは異なるものだと特殊化する。そして、「同性の愛」を抱く者として“*homosexuel*”というフランス語を持ち出し、自らがその“*homosexuel*”なのではないかという疑念に直面するのである。

ここで、“*homosexualité*”という語について概説しよう。“*homosexualité*”とは、ドイツ語の“*Homosexualität*”の仏訳である。それは、ハンガリー人作家で、ケルトベニーという筆名も用いたカーロイ・マリア・ベンケルトが 1869 年に、ギリシア語で「同一」を意味する“*homo*”とラテン語で「性」を意味する“*sexualis*”を融合して作った言葉である。定義上は同質性を指す“*homo*”を含むため、ジェンダー倒錯に基づいて「男の身体に囚われた女の魂」と男性同性愛を解釈する“*Urning*”とは対立するよう見える。だが実際には、ベンケルトはウルリヒスの影響のもとで“*Homosexualität*”を考案し、最初にこの語

を用いたのもウルリヒス宛の手紙の中であった (Greenberg 409, Courouve 130)。

ウルリヒスと同じように、ベンケルトも“Homosexualität”という新しい言葉によって男性間性行為の脱犯罪化を目指しており、これら二つの言葉が含意するところは近い。1880年代以降、精神医学のコンテクストに取り込まれ、両者は置換え可能な語として使われるようになる。その後、“Homosexualität”は、同性間のエロティシズムを指す“Urning”など他の語を駆逐していくことになるのだが、成立当時はいくつかの新しい用語の一つであったのだ。本論の議論にとっては、“Homosexualität”も“Urning”と同じように、同性愛を個人の内部にある、特殊な「素質」や「気質」に起因させ、「局所化」する概念であることが重要である。

ところで、引用した一節では、セジウィックが提唱する「ホモセクシュアル・パニック」が展開されているかのように読める。藤森清は、セジウィックの指摘を踏まえつつ、「ホモソーシャル体制下では、女を介さない男同士関係は、危険で成算のない男同士の所有の争い」にしかならないため、「西洋近代医学のオーラを纏って原語そのままに引用される「^(ママ)homosexual」という語は、「テロの脅迫のよう」[...]に[...]大村や純一に[...]届くだろう」と述べている (藤森 131)。確かに、鷗外のテキストでは、“Urning”、“homosexuel”などと「同性愛」概念は西洋語のまま使われている。だが、『青年』で、“homosexuel”という概念は大村に、ましてや純一に「テロの脅迫のよう」に迫ってくるのだろうか。

『青年』の一節を検討する前に、「ホモセクシュアル・パニック」を簡潔に説明しよう。西洋近代社会では、友情や同胞愛といった男性間の社会的な絆と男同士の性愛、すなわち、ホモソーシャルリティとホモセクシュアリティは強烈なホモフォビアによって分断されている。しかし、セジウィックは古代ギリシアの「ペデラスティ」を引き合いに出し、男性のホモソーシャルリティが必ずしもホモセクシュアリティと分断されているわけではないことを示す。古代ギリシアでは「男を愛する男」と「男の利益を促進する男」との間に切れ目はなかったのである (セジウィック a 6)。

それを踏まえて、撞着語法的な「ホモソーシャルな欲望」が仮定され、「最も肯定されてしかるべき男性のホモソーシャルな絆と、逆に最も非難されてしかるべき同性愛とを比べると、両者には往々にして重大な類似や一致が認められる」ことが強調される (セジウィック a 136-137)。ホモセクシュアリティとホモソーシャルリティは連続的であるからこそ、異性愛者を自認する男性が自分自身の同性愛の欲望に直面した場合には、自らのアイデンティティが攪乱され、激しい恐怖に襲われるのだ。セジウィックはそうした状態を「ホモセクシュアル・パニック」と命名した。

西洋社会を分析の対象とするセジウィックは「ペデラスティ」を参照しているが、『キタ・セクスアリス』の男子学生集団においても、男性のホモソーシャルリティとホモセクシュアリティは渾然一体となっていた。それでは、『青年』ではどうなのだろうか。該当する箇所を再び引用しよう。

純一の笑う顔を見る度に、なんと云う可哀い目付きをする男だろうと、大村は思う。それと同時に、此時ふと同性の愛ということが頭に浮んだ。人の心には底の知れない

暗黒の塚がある。[…] 自分は **homosexuel** ではない積りだが、尋常の人間にも、心のどこかにそんな萌芽が潜んでいるのではあるまいかということが、一寸頭に浮んだ。

まず、「同性の愛」は「人の心」の「底の知れない暗黒の塚」に結びつけられている。それゆえに、「僕には **Urning** たる素質はない」と断言した金井とは異なり、発言者の大村にもその存在の有無は明確にはわからなくなっている。彼は、「自分は **homosexuel** ではない積り」（傍点引用者）と自己の同性愛を完全には否定しきれていないのだ。しかし、だからといって彼のアイデンティティがそのために攪乱されるわけではない。それどころか大村は「尋常の人間にも、心のどこかにそんな萌芽が潜んでいるのではあるまいか」とその「萌芽」をあっさりと認めてしまう。確かに、医学生 of 彼は“**homosexualité**”を「尋常」性に抵触するものにとらえている。ところが、第3章で論じるように、“**homosexuel**”を特殊な「種族」（Foucault 59）と見なすのではなく、それを「尋常の人間」全体へと「一般化」してしまうのである。

さらに、ここで彼が“**homosexualité**”の訳語としてあらかじめ「同性の愛」という表現を持ち出している点も見逃せない。“**homosexualité**”が「愛」化され、精神化されるのである。そもそも『青年』が書かれた1910年代前半には、“**homosexualité**”の訳語はまだ一つには定まっておらず、「性欲」系の語彙と「愛」系の語彙が競合していた。「性欲」系の語彙のほうが“**homosexualité**”の原義に近いことは言うまでもないが、1911年7月26日に新潟で発生した女子学生同士の心中事件をきっかけに女性同性愛についての議論が噴出し、彼女たちの関係を「精神的なもの」にするために、「愛」系の訳語が選択されるようになったという経緯がある（肥留間 18-19）。『青年』における「同性の愛」も恣意的な表記ではないのだ。一方で、“**homosexualité**”の訳語が求められた時期には先立つが、鷗外／林太郎は、医学テキストである「性欲雑説」では、「男子相姪、女子相姪」（森 h 125）と“**homosexualité**”をはっきりと「性欲」的に訳していた。

このようにして、大村と純一の「友情」は「同性の愛」と「愛」化される。そうすると、純一は意識していないのかもしれないが、彼が「負債」のように追い求めながらも女性との関係では実現することのなかった精神的な「恋愛」とは、実は、大村との「友情」において達成されていたのではないか、という読みがテキストからは可能になる。大村と純一の関係は『キタ・セクスアリス』の古賀と金井のそれと類似しており、二人の男性の年齢差や体格差、“**actif/passif**”の役割分担など「男色」的な構図を取っていたにもかかわらず、テキストでそれは前近代的な「男色」ではなく、“**love**”の訳語であるところの「愛」に接合されるのだ。いずれにしても、“**homosexuel**”かもしれないという疑念は、男同士のエロティックな「友情」を最後まで堪能している純一にはもちろん、大村に対しても「テロの脅迫のよう」に迫ってくるわけではないのである。

続く（二十一）の後半も大村や純一が「ホモセクシュアル・パニック」に苛まれてはいないということを露呈している。大村を「ふと」、**“homosexuel”** という概念がよぎった後に、彼は純一とともに外出して谷中を歩くのだが、彼らはそこで三枝茂子という女子学生に出会う。大村は「女学界」という雑誌で茂子の短歌を選んだという経緯があった（森 b 432）。

“homosexuel”なのではないかという不安を回避するのであれば、男同士の絆に一人の女性を加え、欲望を彼女に向けることでホモエロティシズムを偽装する絶好の機会である。しかも、茂子は「女医」（森 b 434）を目指し、ドイツ語を学習し、文学創作にも着手するという『青年』では男性に割り振られた“M”の領域に属する女性である。

しかしながら、そうした点によって彼女が評価されることはまったくない。「臍垢」（森 b 432）など茂子の肉体的な汚さが前面に出され、あたかも茂子が男性の担当である「霊」の領域を侵犯したことを罰するかのようになり、大村は「或る過去を有していたらしい」（森 b 434）と彼女の「肉」の面を強調する。きわめてミソジニスティックに、茂子は「肉」＝“W”の領域へと引き戻されるのだ。大村に呼応して、純一も「気味が悪い」（森 b 434）と彼女をあからさまに嫌悪する。彼らにとって、男性の領分である「霊」＝“M”への女性の侵入は違反でしかなく、二人で茂子を「problématique な所のある女」と嘲笑し、“Au revoir！”とフランス語で挨拶を交わして別れるだけである（森 b 435）。

次の（二十二）以降、舞台は箱根に移るため、彼らの「友情」がこれ以上取り上げられることはない。結局、大村に“homosexuel”かもしれないという疑念は生じるものの、それを経過しても、彼は、男同士の「友情」に女性を介在させようとはせず、いっそう厳格にそこから女性を排除しようとする。奇妙なことに、「性欲」に他ならない“homosexualité”を経由して、テキストでは男同士の「友情」が「愛」化され、崇高化されるのである。

一方、純一はこの場面を経ると、箱根のれい子のもとへと向かう。そこでは、一見、純一、れい子と画家の岡村との間で三角関係が築かれるように見える。藤森はその場面に言及しつつ、純一が、れい子を所有する岡村に自己を同一化させ、三角関係を構成する「ホモソーシャルの教えを学習した」（藤森 129）と論じる。だが最後に至っても、純一は、れい子を媒介とした年長の岡村とのライバル関係ではなく、茂子のことを指すと考えられる、「大村が恩もなく怨もなく別れた女の話」を思い出し、「寂しさ」に襲われながらも、大村に同一化し、箱根を去ろうとする（森 b 470）。ここで『青年』は締めくくられる。

確かに、「後になってから、純一は幾度か似寄った誘惑に遭って、似寄った奮闘を繰り返す」（森 b 464）たと物語の最後では純一の未来もほのめかされており、その時には「純一の欲望は、ホモソーシャル体制のなかの異性愛として位置づけられ、安定している」（藤森 129）のかもしれない。「小説『青年』は一応これで終とする」（森 b 471）という鷗外の言葉も、この小説の続きを予感させるものである。だが、少なくとも『青年』で表象される純一はホモエロティックな「友情」に一貫して身を浸しているのであり、かつ、藤森が言うところの「ホモソーシャルの教え」を習得していないからといって不安定化しているわけではないのである³⁷。

前章で検証したように、『キタ・セクスアリス』では「精神病学者」の見解に相違ない「Urningたる素質」が男性同性愛表象の出発点で唐突に持ち出されるのだが、しかしそれは続く文学表象を通して無効化された。それに対して、『青年』では、大村と純一のホモエロティックな「友情」の表象の終着点で、“homosexuel”がテキストに導入される。“homosexuel”も“Urning”と同様に、当時は「精神病学者」の見方であった。だが、大

村は“homosexualité”に「同性の愛」という訳語——誤訳とも言えるのだが——を与えることで、“homosexualité”を「愛」化し、精神化したうえで、「尋常の人間」に「一般化」して、“homosexuel”なのではないかという不安をあっけなく回避する。言い換えれば、精神医学に基づいた“homosexualité／“hétérosexualité”の二元論は、“homosexuel”という言葉によって、テキストに持ち込まれているのと同時に、攪乱されてもいるのである³⁸。

つまり、この作品では、ホモエロティックな「友情」表象を通じて、“homosexualité”という概念自体が解釈し直されているのではないか。それはすなわち、「科学」的な概念であるところの“homosexualité”の、「文学」表象における読みかえである。医学領域と文学領域を越境し、独語・仏語双方に堪能な「医学生」という設定の大村が、純一との関係を規定するためとはいえ、精神医学の中心地ドイツの言葉ではなく、『青年』においては一貫して文学に関連した言語であるフランス語で「同性愛」を定義する点もそうした読みかえを暗示している。このようにして、『青年』の後半でさりげなく目論まれている「同性愛」概念の「一般化」は、鷗外／林太郎が「新生国民国家としての日本の国力増強」のために「次世代再生産」を管理し、「正しいセクシュアリティ」の構築を目指した衛生学の権威であったことを想起すると、見逃せない論点になるだろう。

しかしながら、『青年』の“homosexualité”の「一般化」は、「次世代再生産」に抵触しない範囲で試みられるものでもある。このテキストにおける“homosexualité”とは、「霊肉二元論」に基づいて、「同性の愛」とあくまでも精神化されたものであった³⁹。そのため、『青年』では、大村に“homosexuel”という概念を呼び起こすのが「可哀い目付き」という純一の「肉」の要素であったにもかかわらず、大村と純一の「友情」に潜む「肉」の部分は、皮肉なことに、本来はまさしく「肉」や「性欲」であるところの“homosexualité”のもとで不可視化されてしまうのである。それは「エロ・グロ・ナンセンス」全盛期に出された、「霊」の部分を消去され、完全に「肉」化された男性同性愛表象とは対照的であるが、この問題は本論文の第5章で取り上げる。

第3章 精神医学と同性愛の「種族化」

第1章と第2章では森鷗外の二つの文学テキストの男性同性愛表象を検討したが、続く第3章と第4章では、『キタ・セクスアリス』と『青年』に持ち込まれた“Urning”と“homosexual”がそうであるところの、精神医学における「同性愛」概念を概説する。もちろん、本章と次章だけで西洋の精神医学や性科学、日本の性欲学の全貌をとらえることはできない。そこで『キタ・セクスアリス』の「Urningたる素質」の「素質」を手がかりにして、「科学」領域で、同性愛がどのように「局所化」されていったのかを検討する。さらに、西洋由来の精神医学に基づいた「同性愛」概念が日本で普及し、変容した過程、とりわけ、当事者がそうした「科学」的な見解を取り入れて、それに同一化した過程にも目を向けたい。

まず、第3章では『キタ・セクスアリス』の男性同性愛表象に反論した河岡潮風のエッセイを論じる。性欲学がブームになる直前の明治末期に河岡が『キタ・セクスアリス』の男性同性愛表象から何を抽出したか、抽出しなかったかを確認することは、精神医学言説の論点を明確にするうえでも有益である。続いて、1913年に翻訳された精神医学者クラフト=エビングの『変態性慾心理』を読む。

1. 『キタ・セクスアリス』に反論して——河岡潮風「学生の暗面に蟠れる男色 の一大悪風を痛罵す」(1909年)、「男性間の顛倒性慾を排す」(1911年)

『キタ・セクスアリス』に関しては、同時期にいくつかの批評が出された。しかし、ここで男性同性愛表象が問題となることはほとんどなかった。たとえば、長谷川天溪は“VITA SEXUALIS”の男子学生を「無邪気」(長谷川 185)と称し、大町桂月は「三角同盟」を「純潔」(大町 17)と見なしている。そのなかで、例外的にそれに焦点を当てたのが、作家の河岡潮風であり、彼は『冒険世界』に「学生の暗面に蟠れる男色の一大悪風を痛罵す」というエッセイを発表した。

なお、『冒険世界』(1909-1919年)とは、日露戦争後の国家意識の高揚を背景に主に冒険小説を通して青少年を鼓舞することを目指した雑誌であり、河岡のエッセイも一義的には「男色」の当事者になる世代へ向けて書かれたものと思われる。そこには「ハイカラな今の美少年」、「真黒な印度の美少年」、「小憎らしいパリの美少年」(河岡 a 74)の、あるいは、「美少年の尻を追う墮落学生」(河岡 a 75)の顛末を描いたイラストなども収録されており、「男色」が「一大悪風」であることをビジュアル的に印象付けるような仕掛けがなされている。

さて、河岡は「森鷗外博士のキタ、セクスアリスと題する頗る大胆な小説」(河岡 a 67)における「男色なる悪風」(河岡 a 67)に触発され、「男色反対論」(河岡 a 67-68)を試みるという。彼が最初に注目するのは、『キタ・セクスアリス』の金井湛が11歳の時に「男色」の存在をはじめて知り、学校では「嘗めなければならぬ辛酸の一つであった」と結

論づける物語前半の一節である。その部分に対して、河岡は次のように述べる。

学生として中学を卒業する迄には、如何にしても全く男色を知らずに過ぎる訳には行かぬ。何かの機会に、漫然と男性同志に此の恥すべき関係があると知った時の、驚きと、好奇心は、往々にして間違いの基となるのである。申す迄もなく男色は指弾すべき大罪悪、背徳破倫禽獣にも比すべき醜行である。けれども何が故に背理破倫が、明白に摘発痛罵して、「男色はイケナイもの」なる観念を深刻に感ぜしむる記事のなきを悲むのである。(河岡 a 68)

河岡はここで「男色」を「恥すべき関係」や「指弾すべき大罪悪、背徳破倫禽獣にも比すべき醜行」と糾弾している。しかし、『キタ・セクスアリス』の金井が「男色」を「嘗めなければならぬ辛酸の一つであった」と言うのと同様に、引用した一節では「如何にしても全く男色を知らずに過ぎる訳には行かぬ」ととらえられている。タイトルが示唆するように、このエッセイで男性同性愛は「男色」と定義されており、学生・学校という期間的・空間的な制限のもとで、「一般化」の見解に従って解釈されているのである。つまり、“Urning”という言葉が含意している特殊な「素質」は俎上にのせられていないのだ。

ただし、このエッセイに同性愛を規定する特殊な「素質」がまったく出てこないというわけではない。河岡は、次いで古代ギリシア・ローマや聖書のソドムの町、さらには、アジア諸地域の男性同性愛や日本の「男色」史、とりわけ、文学的なテーマとしての「男色」を概観し、それを前置きにして「男色」の原因へと話を進める。具体的には、「男女関係の禁忌」、「男女関係の欠乏」、「虚栄の結果」、「狂的情操」(河岡 a 73) の4つが原因として提示されているのだが、最後の「狂的情操」には次のような説明が付けられている。

先天的の一種の色情狂で、性慾が同性の上のみ注ぐ者、巖谷小波氏によって我国に紹介せられたる伯林の同性交接研究会では此の種の者に同情するが唯一の目的であると聞いた。(河岡 a 73)

ここで触れられている「伯林の同性交接研究会」とは、ドイツの性科学者マグヌス・ヒルシュフェルトが1897年に創設した世界初の同性愛解放組織である科学的人道委員会のことを指す。それと関連づけて、河岡は「先天的の一種の色情狂」に言及している。要するに、原因の前三者が環境的、後天的なものであるのに対して、「狂的情操」においては先天的で、特殊な「素質」が問題になっているのである。

引用した一節で示されている巖谷小波と科学的人道委員会の関係について補足すれば、作家の巖谷小波は、1900年から1902年までベルリンに滞在しており、1901年に科学的人道委員会の夏期総会に参加した。1902年には、同会の会報誌『性的中間段階年報』に「男色——日本におけるペデラスティ」という彼の文章が掲載され、僧侶や武士の「男色」や「陰間」が紹介された。そこには明治時代に流布していた薩摩と「男色」の関連も含まれていたため、古代ギリシアの「ペデラスティ」を援用し、男性性の強化という観点から男性同性愛を正統化しようとしたベネディクト・フリートレンダーなどには大きな影響を与えた(月川 a 226-230, フリートレンダー184-186)。フリートレンダーの「男色」擁護論は

日本の性欲学者から批判されることになるのだが、それについては次の第4章で取り上げる。

河岡潮風の「学生の暗面に蟠れる男色の一大悪風を痛罵す」に戻ろう。確かに同性愛の先天性が示唆されてはいるものの、上で引用した一節以上の考察はない。続いて、「明治年代のお得意は学生社会」(河岡a 73)という見出しのもと、学生間の「男色」へと話は引き戻され、「男色」の原因ではなく、むしろその「恐るべき結果」(河岡a 75)が議論の対象になる。結論に至っても、「鉄拳制裁」による「男色征伐」が求められるだけである(河岡a 78)。つまり、河岡は「狂的情操」という精神医学的な概念を視野に入れつつも、それを論じることはなく、また、『キタ・セクスアリス』の「Urningたる素質」や、それが引き起こしたテキストの二重性に着眼することもないのである⁴⁰。

このエッセイを「予の論についての反対、各地に於ける男色の歴史的事実など、真摯なる研究材料を寄する人あらば幸甚なり」(河岡 a 79)と締めくくる河岡は男性同性愛研究に関心を持ったようである。2年後、『新公論』1911年9月号の「性欲論」特集にも、彼は「男性間の顛倒性欲を排す」という記事を寄せている。なお、古川誠が指摘するように、医学者や教育学者向けの専門的な雑誌ではなく、『新公論』という一般読者向けの雑誌が「性欲論」特集を組んだこと自体が画期的であり、そこには西洋の性科学の動向、性教育、同性愛などその後の性欲学で盛んに議論されることになるテーマがすでにほとんど出そろっていた(古川 a 113-114)。

その『新公論』の「性欲論」特集に発表した河岡のエッセイの梗概は、本章で検討した「学生の暗面に蟠れる男色の一大悪風を痛罵す」とほとんど同じである。しかし、両者の間には無視できない違いもある。タイトルが示唆するように、「男性間の顛倒性欲を排す」で男性同性愛は「男色」ではなく、「顛倒性欲」という概念のもとで規定されている。「顛倒性欲」とは、ウルリヒスの“Urning”に基づき、1869年に、ベルリン大学教授の神経心理学者カール・ヴェストファルが考案した“*conträre Sexualempfindung*”の訳語であり、直訳すれば、「転倒性性感覚・感情」(斎藤 d 289)という意味になる。要は、「男色」とは別の概念が用いられているのであり、本文中でも「男色」という言葉は注意深く避けられている。

「男色」から「顛倒性欲」へと立脚する概念が移行したのに伴って、河岡の論じ方にも変化が生じている。「学生の暗面に蟠れる男色の一大悪風を痛罵す」では、「男色なる悪風」を撤廃させるためには「鉄拳制裁」を加えるべきだと単純に結論づけられていた。一方、「男性間の顛倒性欲を排す」は次のような問題提起で締めくくられている。

彼等をして斯くならしめし原因は、是れ抑も制度の不備か將た社会の罪か、乃至は先天的の傾向あるによりて然るか、仔細に一考したいものである。(河岡 b 48)

結論部分で同性愛の原因が再び取沙汰されており、「先天的の傾向」、すなわち、特殊な「素質」が俎上にのせられているのである。このエッセイでもさらなる探求が行なわれるわけではないのだが、結論の問題提起によって、精神医学において構築された同性愛の先天性が「学生の暗面に蟠れる男色の一大悪風を痛罵す」よりも前景化していることは確かだろ

う。

『新公論』の「性慾論」特集に続く 1910 年代には、西洋の精神医学・性科学の文献が次々と翻訳され、河岡の二つのエッセイで萌芽的であったものの、決して十分には扱われなかった同性愛の「素質」が大々的に議論されるようになった。その嚆矢となったのが、1913 年に、『変態性慾心理』というタイトルで大日本文明協会が訳出したクラフト=エビングの *Psychopathia Sexualis* である。

ただし、同書の和訳は『変態性慾心理』が最初ではない。1894 年に法医学協会を中心に春陽堂から『色情狂篇』というタイトルで出版されている。『色情狂篇』を契機に「色情狂」という言葉が流通するなどある程度の社会的影響力も存在したが（斎藤 e 4-5）、第一の読者として想定されていた医学界における関心は薄く、一般的な広がりも決して大きなものではなかった。それに対して、1913 年の『変態性慾心理』では、序文でも明記されるように、読み手として「一般読者」（クラフト=エビング 例言 2）が念頭に置かれていた。同時に、同書は日本人の医学者やジャーナリストを触発し、彼らの著書や雑誌の刊行を促すものでもあった。一言で言えば、『変態性慾心理』は日本の性欲学の基盤になったのである。本章でも、次節で「素質」の問題を軸に据えて、『変態性慾心理』における同性愛解釈の基本的な枠組みを確認しよう。

2. 同性愛の「種族化」——クラフト=エビング『変態性慾心理』（1913 年）

ミシェル・フーコーの『性の歴史』I（1976 年）によれば、近代西洋社会では、「性」は抑圧されたと考えられているが、実際には、「性 [sexe] のまわりで、また、性についての、紛れもない言説の爆発」（Foucault 25）が起こったという。しかも、性に関する言説は、「権力の外で、あるいは、権力に逆らって増殖した」わけではなく、「権力が行使される場で」、「権力行使の手段として」活用された（Foucault 45）。キリスト教の「告白」において、打ち明けるべき秘密として「性」が特権化されたことがそれを示唆しているだろう（Foucault 49）。18 世紀以降、人口問題がクローズアップされ、また、子供の「性」が重大な論点になっていくなかで、「告白」は分散し、経済、教育、医学、裁判など至るところに、「性」について「語ることへの煽動」、「聴き取り、記録するための装置」、「観察し、問いかけ、文章化するための手続き」が設けられるようになった（Foucault 45）。

一方、科学技術・医療技術が飛躍的に進展した 19 世紀になると「告白」は「科学的形態」（Foucault 87）のもとで構成されるようになる。「告白」が医学、医学のなかでも 1880 年頃に花開いた精神医学に組み込まれ、性愛規範が生成されるようになったのである。ただし、そこでは規範的なセクシュアリティにスポットが当てられたわけではない。問題とされたのは、「性的逸脱、倒錯、例外的な異様、病理的な異常、病的な悪化」（Foucault 72）など規範から逸脱するセクシュアリティであった。性的な過剰や欠乏、もしくは、サディズムとマゾヒズム、フェティシズム、ホモセクシュアリティといった生殖に結びつかない様々なセクシュアリティが「倒錯」と位置づけられ、詳細に分類され、それらを周縁化することを通して、家父長制と異性愛家族制度を維持する「ヘテロセクシュアルなモノガミ

一」(Foucault 53) がただ一つの「正しいセクシュアリティ」(竹村 37, 59) として規範化されるようになったのだ。換言すれば、「異常」なセクシュアリティを可視化し、医学的に囲い込むことによって、「正常」なるセクシュアリティが構築されたのである。

その集大成であり、後の性科学⁴¹や性欲学にも大きな影響を与えたのが、ウィーン大学医学部教授で、精神医学者のクラフト=エビングの主著 *Psychopathia Sexualis* である。同書は 1886 年に初版され、たびたび改訂され、1902 年の著者の死後 1930 年代まで再版された。1892 年には英語訳、1895 年には仏語訳が出版され、精神医学が生成した性愛規範の普及に貢献した。先ほど触れたように、一般的な影響が大きいわけではなかったものの、同書は 1894 年という非常に早い段階で日本にも紹介されている。

日本語圏への *Psychopathia Sexualis* の浸透を決定づけた 1913 年の『変態性慾心理』に目を向けてみると、東京大学医学部教授で、日本の精神医学の基礎を築いた呉秀三が付した序文には、「平衡を失い常規を逸する」セクシュアリティ、すなわち、「変態性慾」を周縁化することで、「尋常の色情」なるものを規定し、それによって「国民の趣味と知能との啓発修養」や「国民の元気と精力との充実振興」を目指すことが明記されている(クラフト=エビング, 序 2-4)。そこからはフーコーが示した精神医学における性愛規範の生成過程が読み取れるだろう。

本章では続いて 1913 年に出された『変態性慾心理』をもとに、*Psychopathia Sexualis* の同性愛解釈を概説する。その前に同書の同性愛解釈の揺らぎを確認しよう⁴²。

クラフト=エビングは同性愛を説明するために、ウルリヒスの“Urningtum”、ベンケルトの“Homosexualität”、ヴェストファルの“conträre Sexualempfindung”といった先行概念を混同して用いている。第 1 章で述べたように、“Urning”とは、同時代の生物学的知見を援用し、胎児の性的な未分化状態からヒントを得ているが、それと同時に、プラトンの『饗宴』に登場する天上の女神ウラニアを起源とした、崇高で、神話的な概念でもあった(Greenberg 408, Garber 238, 月川 b 176-177)。医学のコンテクストで“Urning”を発展させたヴェストファルの“conträre Sexualempfindung”についてもそれは該当する。“Homosexualität”にしても古代ギリシア語とラテン語という二つの古典語を折衷した概念に他ならない。クラフト=エビングがこれらを使用することによって、結果的に *Psychopathia Sexualis* の同性愛解釈は神話性を帯び、疑似科学的なものになってしまうのである。

Psychopathia Sexualis 第 14 版(1912 年)を準拠としている可能性の大きい(斎藤 e 6)『変態性慾心理』の総論では、同性愛が次のように説明される。なお、1913 年の時点では、“Homosexualität”の訳語として「同性愛」という言葉は日本語圏ではまだ定着しておらず、同書でもいくつかの訳語が用いられているが、基本的には「同性色情」が採用されている。

此倒錯の色情は外部の誘因なくして、自発的に性慾的生活[Vita sexualis]の異常変質の現象として、既に発達せる性慾生活内に現れ、恰も先天的現象の如き観を呈するものと、或は初めには、尋常なる道を辿れる色情の経過中に、全く一定の有害なる影響に因りて現れ、恰も後天的現象の如き観を呈するものとあり。(クラフト=エビング 227)

同性愛は個人内部の「異常変質」、すなわち、特殊な「素質」による「先天的現象」と誘惑など外部からの「有害なる影響」による「後天的現象」に分類される⁴³。

この「先天性／後天性」の二分法は当時の精神医学においては重要な論点であった。というのも、その背景には男性間性行為を脱犯罪化する目論見があったからである。ウルリヒスやベンケルトと同様、クラフト=エビングも少なくとも先天的な同性愛に関しては、法律上の責任は問えないと論じ、男性間性行為を禁止するドイツ刑法第 175 条には反対している。要するに、先天性が同性愛の承認の根拠として持ち出されているのである。それに対して、後天的な同性愛と解釈される「老年の好色家」(クラフト=エビング 447)などは、危険な存在と見なされ、犯罪化される。ただし、“Urning”を病理というよりは突然変異的なものと理解したウルリヒスとは異なり、精神医学者のクラフト=エビングは、「鶏姦者は犯罪者にあらず、即ち彼は責任無能力なる精神病患者なり」(クラフト=エビング 438)とあくまでも同性愛を病理化してとらえている。

しかし、「先天性／後天性」の二分法については、すぐにその不十分さが指摘される点にも注意しよう。引用した一節の直後には次のように補足されている。

されど、所謂後天的なる例証も、之を仔細に観察せば、其素質は欠くべからざる条件として、潜在的同性色情 [latentem Homo [sexualität]], 或は少くとも両性 (同性及び異性共) 色情 [Bisexualität] となりて存し、仮眠より醒覚して倒錯症を確定せんには之が誘因を要することあるべし。従つて後天的顛倒的色情は寧ろ徐性顛倒的色情と称するを正しとすべし。(クラフト=エビング 227)

ここで、「後天的顛倒的色情」は「潜在的同性色情」や「両性 [...] 色情 [バイセクシュアリティ]]」、あるいは、「徐性顛倒的色情」と言い換えられている。「先天性／後天性」の区分は特殊な「素質」の「有／無」というよりも、むしろ「可視／不可視」のレベルで解釈されているのである。実際に、クラフト=エビングが扱う症例の中には、「後天的顛倒的色情」にカテゴライズされていても、「先天なる同性色情者」や“Urning”に近いと補足されるものもある (クラフト=エビング 238)。また原則として、同性愛の先天性は遺伝によって説明されるのだが、後天的な同性愛を論じる際にも遺伝は持ち出されており、「先天性／後天性」の区分は困難に陥っている。より正確に言えば、『変態性慾心理』では、後天的な同性愛は、先天的なその一部としてとらえられる傾向があるのだ。

なお、1894 年の *Psychopathia Sexualis* 第 9 版では、引用した部分に、後天的な同性愛とは「謎めいた現象」であり、「仮説」に過ぎないという一節がある (Krafft-Ebing a 195)。だが、『変態性慾心理』の原本であると考えられる *Psychopathia Sexualis* 第 14 版 (1912 年) では、引用した日本語訳のとおり、その箇所が削除されている (Krafft-Ebing b 226)。

レナーテ・ハウザーは、マゾヒズムに関して、1870~1880 年代には目に見える「客観的行動」を分析の軸にしていたクラフト=エビングが 1890 年代以降にその背後にある「心理的側面」を重視するようになったという変化を指摘しているが (Hauser 211, 214)、同性愛解釈においても 1890 年代には同様の変化が見出せるのではないか。つまり、クラフト=

エビングは目には見えない「潜在的な」何らかの「素質」によって、後天的な同性愛という「謎めいた現象」を解決しようとするのである。いずれにしても、「素質」に起因させるこうした解釈の仕方では、「同性愛／異性愛」の境界線は固定されることになり、同性愛の後天性が含意するセクシュアリティの可変性や流動性が十分に議論されることはない。

不十分な「先天性／後天性」の二分法に続いて、『変態性慾心理』ではそれぞれのタイプの同性愛がさらに「種々の階級」（クラフト=エビング 227）に細かく分類され、それは次のように説明されている。

これは個人の素質の程度に略々平行するものにして、軽度なるは単に精神的半陰陽 [psychischer Hermaphroditismus] たるに過ぎずと雖、稍重きものは同性色情となるも、こは性慾生活の上にもみ限局せらる。尚重症なるものは、精神的人格及び身体的感覚が色情的倒錯症の意味に従って変化す。更に最高度なるものは身体的体質をも変形するに至る。(クラフト=エビング 227)

この一節では、同性愛を引き起こす「素質の程度」として、「精神的半陰陽」、「同性色情」、「精神的人格及び身体的感覚 [の] 色情的倒錯症」、「身体的体質」の「色情的倒錯症」が並べられている。

マージョリー・ガーヴァーが論じるように、精神医学者・性科学者の多くは、同性愛を「ヘテロセクシュアル・モデル」に従って理解した (Garber 238-9)。すなわち、“Urning”がまさしくそうであるのだが、男性の中にいる女性が他の男性を欲望し、女性の中にいる男性が他の女性を欲望する現象を同性愛と解釈したのである。

したがって、上で引用した一節の「精神的半陰陽 [Hermaphroditismus]」も、いわゆる「両性具有」ではなく、個人の内面に異性と同性の「素質」が存在し、それぞれが「同性者に対する著明なる色情的傾向と同時に、異性者に対する同様な色情を有する」（クラフト=エビング 282）状態、要は、バイセクシュアリティを指している⁴⁴。そして、体内にある異性の「素質」が強くなると同性のみを欲望し、さらにそれが強まると「精神的人格及び身体的感覚」が、最終的には「身体的体質」までもが異性化するととらえられている。換言すれば、クラフト=エビングの同性愛解釈においては、バイセクシュアリティ、ホモセクシュアリティ、トランスセクシュアリズムがこの順番で、同性愛の連続体を構成しているのだ。

『変態性慾心理』の訳語を用いてそれぞれの「階級」を確認すると、後天的な同性愛は「色情の単純なる顛倒」、「男性脱化及び女性脱化」、「偏執性色情的変態への移行級」、「偏執的色情的変態」と、一方、先天的な同性愛は「精神的色情的半陰陽」、「同性色情」⁴⁵、「婦女的男子並びに男子的女子」、「女化並びに男化」（クラフト=エビング 264-265）と双方とも四つの段階に、ジェンダー倒錯の度合いに従って分類されている。しかしながら、「先天性／後天性」の区分と同様、これらの「階級」の境界線も不確かなものである⁴⁶。たとえば、クラフト=エビング自身、「同性色情」と「婦女的男子並びに男子的女子」の間には「多くの移行型あり」（クラフト=エビング 295）と補足している。

なお、先天的な男性同性愛のもっとも進んだ四番目の「階級」は「女化」（クラフト=エ

ビング 299) と訳されているのだが、原語では“*Androgynie*”である。再びガーヴァーを参照すると、“*Androgynie*”と“*Hermaphroditismus*”とはもともとは同じ意味であったが、伝統的に前者が男性性と女性性の「統合」を、後者が「混成」を示すという使い分けがなされている。古代ギリシアの彫像などでは“*Hermaphroditismus*”が乳房とペニスを有したものであるのに対して、“*Androgynie*”は男性性と女性性が一体化したのものとして表象される傾向にあった (Garber 208)。

それと対応するように、『変態性慾心理』でも、精神的な“*Hermaphroditismus*”とは内部の男性と女性という異なった部分で構成され、それぞれのヘテロセクシュアルな欲望に基づいて結果的にバイセクシュアリティを表わすのに対して、“*Androgynie*”は内面的な女性性が飽和し、身体に表面化して、男性の外面と「統合」した状態として提示されている。それゆえ、クラフト=エビングの説明では、一見近いもののように見える“*psychischer Hermaphroditismus*”と“*Androgynie*”は明らかに異なった同性愛の「階級」を表わしているのである。

しかし同時に、バイセクシュアリティ、ホモセクシュアリティ、トランスセクシュアリズムの進捗による同性愛解釈は、まさにそれらが連続体を構成するものとして並べられているために齟齬をきたしてしまう。

たとえば、第二の「階級」の「同性色情者」、すなわち“*Urning*”が同性に対してのみ「色情」を抱くと解説されているのに対して、それよりも進んだ「階級」であるべき「婦女的男子」のカテゴリーでは、女性との性的関係において女性化する「中年の官吏」の例が紹介されている (クラフト=エビング 299)。男性の体内の女性が他の女性を欲望するのはレズビアニズムであり、それはホモセクシュアリティに他ならないわけだが、クラフト=エビングの同性愛解釈を支えるヘテロセクシュアル・モデルではこの現象を十分に説明することはできない。そもそも、トランスセクシュアリズムがホモセクシュアリティの下位概念として論じられる点が問題なのだ。ガーヴァーは、精神医学のコンテキストではバイセクシュアルの議論がホモセクシュアルのそれに組み込まれ、不可視化されてしまう点を指摘しているが (Garber 240)、バイセクシュアリティだけではなく、トランスセクシュアリズムについても同じことが言えるのである。

ここまで検証してきたクラフト=エビングの同性愛解釈は、様々な矛盾点や弱点を抱え込んでいるが、大枠としては、フーコーが言う「倒錯の体内化と個人の新たな特定」(Foucault 58-59) の典型であることは言うまでもない。フーコーは次のように述べている。

ソドミー——かつての世俗法の、教会法のそれ——は禁じられた行為の一つの型であった。[...] 19世紀の同性愛者 [*homosexuel*] は、一人の登場人物となった。[...] 忘れるべきではないのだが、同性愛という心理学的・精神医学的・医学的なカテゴリーは、性的関係の型によってよりも、ある種の性的な感覚の性質、自身の中で男性性と女性性を転倒させるある種のやり方によって同性愛が特徴づけられるようになった時に[...] 構成された。同性愛は、ソドミーの実践から、一種の内的な両性具有 [*androgynie intérieure*] や魂の半陰陽 [*hermaphrodisme de l'âme*] へと変更させられたその時に、セクシュアリティの様々な形象の一つとして立ち現われることになったのだ。かつて

ソドミット [sodomite] は性懲りもない異端者であった。今や同性愛者 [homosexuel] は一つの種族 [espèce] になったのである。(Foucault 59) ⁴⁷

フーコーは、かつては市民法や教会法において禁じられた「ソドミー」という違反「行為」や「性的関係の型」によって解釈されていた同性愛が、医学や精神医学に取り込まれてからは、個人の内部にある特殊な「素質」、具体的には「一種の内的な両性具有や魂の半陰陽」によって説明されるようになったというパラダイム転換を強調している。本章で概観したように、クラフト=エビングの同性愛解釈でも「行為」に基づく後天的な同性愛に触れられてはいたものの、それは「素質」が決定する先天的な同性愛と読みかえられる傾向にあり、結局のところは「潜在的」な「素質」が問題とされていた。要するに、「異常」な性行為ではなく、それを引き起こす「素質」を有した個人が「異常者」として周縁化される対象になったのである。このようにして、同性愛に関与する人物が「同性愛者」という特殊な「種族」と見なされるようになったのだ。

第4章 性欲学における同性愛の変容

1. 性欲学の誕生——羽太鋭治・澤田順次郎『変態性慾論』（1915年）

第3章では『変態性慾心理』を読んだが、第4章では日本の性欲学の文献に目を向ける。性欲学者の羽太鋭治と澤田順次郎が1915年に共著で発表した『変態性慾論』、同じく性欲学者の田中香涯が1922年に創刊した雑誌『変態性慾』に掲載された読者である男性同性愛者からの手紙を取り上げよう。本章では、古川誠やグレゴリー・プラグフェルダーの先行研究を参考にして論じる。

大日本文明協会は、『変態性慾心理』の成功に続いて、オーギュスト・フォーレルの『性慾研究』（1915年）、フリードリヒ・ウィルヘルム・フェルスターの『結婚と両性問題』（1916年）など一般読者に向けて西洋の精神医学・性科学文献を次々と翻訳した。以降、これら西洋の書物の流行に後押しされた日本の医学者やジャーナリストが「性」を主題とした著書や雑誌を刊行した。日本人による性科学、すなわち、性欲学が創始されたのであり、性欲学は大正時代にブームになった（古川 b 47）。

ただし、それ以前の日本に「性」をめぐる知が存在しなかったわけではない。代表的なものとしては、1875年に千葉繁が訳したゼームスアストン [James Ashton] の『造化機論』をきっかけにして、明治初頭に流行った造化機論が挙げられる。だが、古川誠が指摘するように、そこで問題になったのは「懐妊論」、「精虫論」、「胎児男女ノ論」など「生殖器官 [造化機] に対する科学的なまなざしと性的行動をめぐる一連のプラグマチックな知（たとえば男女生み分け法）」であり、「性」は「表層化＝可視化」されていた（古川 a 125）。つまり、「性」を体内の「素質」に関連づけ、「正常／異常」に区分する精神医学のやり方とは根本的に異なったものだったのである。しかも、「プラグマチックな知」に焦点が当てられた造化機論においては、性行為も含めて、同性間のセクシュアリティに紙面が割かれることはほとんどなかった。

それに対して、クラフト＝エビングの『変態性慾心理』に直接的な影響を受けた性欲学では同性愛は大きなトピックになった。1915年には、その後、日本の性欲学を担うことになる羽太鋭治と澤田順次郎が共著で『変態性慾論——同性愛と色情狂』を春陽堂から出版した。同書は日本人の性欲学者が記した最初の単行本であり、18刷まで増刷され、商業的な成功をおさめた（Pflugfelder 291）。なお、この書物では“Homosexualität”の訳語として「同性愛」が用いられている。「同性愛」という言葉の使用例としてはたいへんに早いものである。もっとも、本文中では「同性愛」よりも、「同性間性慾」といった語が多用されており、訳語の統一性はない。

そのタイトルが示唆しているように、内容的には『変態性慾論』の多くの部分は『変態性慾心理』の受け売りであった。『変態性慾論』でも、クラフト＝エビングの見解に従って、同性愛は「先天性／後天性」の二分法のもと、特殊な「素質」によって規定され、ヘテロセクシュアル・モデルとジェンダー倒錯の度合いに基づいて解釈された。先天的な同性愛は、「精神的半陰陽 [Psychische Hermaphrodisie]」、「同性色情者 [Urninge]」、「女性的

男子 [Effeminatio]、又は男性的女子 [Viraginität]、「女化 [Androgynie] 又は男化 [Gynandrie]」(羽太・澤田 146) と区分されている⁴⁸。日本の性欲学でも、バイセクシュアリティ、ホモセクシュアリティ、トランスセクシュアリズムによって構成される連続体が同性愛として考察されたのである。したがって、性欲学にも、“Hermaphroditismus” と “Androgynie” の興味深い使い分けは導入されていたのだ。

続いて、本章では『変態性慾論』を中心にして、いくつかの問題点を抽出していきたい。まずは、西洋の精神医学者と日本の性欲学者の立場の違いに着目しよう。ヴェストファルやクラフト=エビングがアカデミズムに属する医学者であったのに対して、性欲学者はたとえば医師であったとしても、在野におり、文筆業を生業としていた。羽太鋭治や後述する田中香涯がこれに当てはまる。一方、澤田順次郎は生物学・博物学の出身で医師ではなかった⁴⁹。『変態性慾心理』には日本のアカデミックな精神医学の創設者である呉秀三が序文を書き、訳したのも呉の門下生の黒澤良臣であったのだが、それに続く性欲学はアカデミズムと結託することはほとんどなかったのだ。

そのため、彼らの著作は商業性が強く、あくまでも一般読者に向けたものとなり、読者の興味を引くような主題をわかりやすく解説するという形式が採用される傾向にあった(古川a 118)。クラフト=エビングの詳細な分類に関しても、『変態性慾論』には「専門家には必要なれども」、「通俗には咀嚼し難く、趣味の乏しき嫌いあり」(羽太・澤田 36) という一節があり、「専門家」に限定されない「通俗」的な読者への目配せが行なわれている⁵⁰。一言で言えば、西洋の精神医学の見解は形骸化し、結果的に性欲学は「科学」からはますます遠いものになっていったのである。

同性愛に関しても、「科学」からのズレは容易に指摘できる。たとえば、『変態性慾論』の冒頭で「同性愛と色情狂」が概略的に説明される際に、「性慾」は「高尚にして、神聖なるもの」と「極めて陋劣、醜悪なるもの」に二分される(羽太・澤田 3)。前者が家父長制と異性愛家族制度を維持する「正しいセクシュアリティ」に相当し、後者がそこから逸脱したセクシュアリティ、すなわち、「変態性慾」に相当する。ところが、同性愛については次のようにも記述されている。

顛倒的同性間性慾とは、同性即わち男性と男性、又は女性と女性との間に、連結せらるるところの、一種の性的感情、若しくは性交にして、変態性慾中、最も神秘的なるものなり。[…]

色情狂とは、色慾の異常なるもの、即わち色情に障碍を受けたる、精神病者の総称にして、其の名の如く、色に狂いて、荒れ廻るものあり。[…]

色情狂を、前の同性間性慾に比すれば、頗る殺風景にして、何れの方面より見るも、神秘的なところなし。(羽太・澤田 38, 39)

『変態性慾論』がモデルにしているクラフト=エビングにしても、プラトンの『饗宴』に由来する“Urning”を援用しており、*Psychopathia Sexualis* における同性愛解釈は神秘的なものになっていたわけだが、『変態性慾論』ではあたかも読者の関心を引きつけることが目的であるかのように、同性愛の神秘性がより明示的になっている。同性愛とは「極めて

陋劣、醜悪なるもの」であり、かつ、「神秘的なるもの」でもあるのだ。同性愛と比較して「色情狂」のほうは「殺風景」とさえ形容されている。なお、澤田は後に『神秘なる同性愛』（1920年）、『神秘なる同性愛の研究』（1925年）という単著も出版することになり、ここでも一貫性はないものの、同性愛は「神秘的」と形容されている（澤田10）。

ところが、『変態性慾論』本文で実際に提示される資料は同性愛の神秘性を保証するものではない。そもそも、当時、羽太や澤田は文筆業に従事していたため、大学の医学部に勤務していたクラフト=エビングとは異なり、自ら「変態性慾者」の症例を探ることができない。そのため、『変態性慾論』には『変態性慾心理』からの実例が多数引用されているのだが、それだけではなく、同時代の日本の新聞等で報道された「学生間に於ける男色」や「囚人間に於ける同性性慾」、「男性間性慾者の情死」などが「男子に於ける先天的同性間性慾」の事例として紹介されている（羽太・澤田 186-197）。しかしながら、それらは傷害や心中を扱った新聞記事であるため、男性同性愛の犯罪性を強調することはできても、同性愛の先天性を照明するものではない。男子学生の「男色」などは性欲学的区分に従えば、後天的な同性愛の典型とも言える。ましてや取り上げられている同性愛が「神秘的なるもの」であるわけでもない。理論と資料が乖離しているのだ。

さらに、同性愛の犯罪性に関しては、当時の日本には男性間の性行為を禁止する法律が存在しなかったという点が重要である。西洋の精神医学や性科学において、同性愛の先天性が唱えられ、それに基づいて同性愛が病理化された背景には、その脱犯罪化が目論まれていたわけだが、日本の性欲学ではその目論見が最初から失われていたのである。

それどころか、上で言及した資料が物語るように、『変態性慾論』では「先天的同性間性慾」も暗に犯罪化されている。同性愛を扱った『変態性慾論』第一編の後半になると、古代から現代に至る各国の同性間性行為を禁止した法律が紹介され、「国民を保護」（羽太・澤田 334）するために、法律による取り締まりが効果的であると論じられる。ドイツ刑法第175条の撤廃を求めたクラフト=エビングの見解とは反対に、『変態性慾論』では日本の刑法においても、「同性間性慾者に対する処分法」（羽太・澤田 333）の明文化が求められるのだ。同性愛の病理性にしても、「亡国病」や「文明病」（羽太・澤田 311）といった隠喩となり、同性愛を「排斥」（羽太・澤田 312）し、棄却する手段へと変容している。第一編の結論に至っては、「法律にて制裁を設くること」（羽太・澤田 349）が重要な社会政策の一つとして掲げられる。要するに、『変態性慾心理』と比較すると、『変態性慾論』で同性愛は観念的にはいっそう神秘化されつつも、現実の同性愛はクラフト=エビングの狙いとは逆に犯罪化されているのである。

2. 性欲学における再解釈——「陰間」と「薩摩」

ところで、クラフト=エビングは後天的な同性愛の一例として古代ギリシアの事例に触れているのだが（クラフト=エビング 243-246）、それ以上に、臨床的データの不足していた日本の性欲学者にとって、性科学・性欲学規範が普及する前の日本の「男色」は貴重な資料であった。以下、本節では、性欲学者が「男色」をどのようにとらえたのか、江戸時代の「陰間」と明治時代の「薩摩」を取り上げよう。

『変態性慾論』には、先天的な男性同性愛の一つとして「本邦に於ける男性間性慾」という項目が設けられており、平安時代の僧侶と美童、戦国時代の武士と小姓、江戸時代の「陰間」などが例に出される(羽太・澤田 178-181)。「陰間」については、「化粧を凝らし」て、「あでやか」に女装し、「芸娼妓」にも比較し得ると記されている(羽太・澤田 180)。それはジェンダー倒錯に基づく性欲学の同性愛解釈を裏付けるものである(Pflugfelder 280)。

こうして言及されてはいるものの、『変態性慾論』では、「陰間」は十分な議論の対象にはなっていない。一方、羽太や澤田と肩を並べる性欲学者の田中香涯はたびたび「陰間」を論じている。田中が主幹した雑誌『変態性慾』の創刊号 1922 年 5 月号の総論的な記事「変態性慾要説」では、クラフト=エビングの見解に従って、男性同性愛は「両性愛」、「純粹の同性愛」、「エッフエミナチオ」Effeminatio(女性化)と段階的に分類され、「陰間」は最上級の「エッフエミナチオ」に置かれている(田中 b 52-53)。

また、同誌 1922 年 7 月号に掲載された「男娼考」でも、「吾国に於ては今日此の如き不倫の醜業者は無い」(田中 c 128) という断言に続いて⁵¹、江戸時代の「陰間」は次のように解説される。

男娼や女形が其の体質に於ても女型に類似し、また精神状態も女性的情調を帯び、所謂「アンドロギニー」Androgynie(女性的男子)と認むべきものであることは、彼等の似顔絵、素顔絵、また其の逸話に関する記録に徴しても明かであって、彼等は所謂女性的男色者 Feminine Uranier たる資質を生来より有っていた。(田中 c 135)

この一節では、「陰間」は「生来」的な「Feminine Uranier たる資質」によって規定され、「Androgynie」と名づけられている。“Androgynie”は、“Hermaphroditismus”とは異なり、クラフト=エビングの『変態性慾心理』でも、羽太・澤田の『変態性慾論』でも、もっとも進んだ同性愛の「階級」であるところのトランスセクシュアリズムを意味した。言うなれば、田中の記事では江戸時代の「陰間」が典型的な「変態性慾者」になっているのである。

しかしながら、プラグフェルダーがその難しさを指摘しているように、「陰間」を含めた前近代の「男色」の性欲学的な再解釈は諸刃の剣である(Pflugfelder 279)。たとえば、江戸中期以降、「陰間茶屋」には女性も客として出入りしていた。「中条でたびたび墮ろす陰間の子」、「女でも男でもよし町といひ」⁵²といった川柳もそのことを顕著に示している(岩田 187, 蕪露庵 154-170, 白倉 180)。したがって、性欲学的に言えば、江戸時代の「陰間」は外見では“Androgynie”に属するものであっても、欲望の面では男性、女性双方を対象にする精神的な“Hermaphroditismus”に該当するのである。「陰間」の再解釈は、結果として、バイセクシュアリティ、ホモセクシュアリティ、トランスセクシュアリズムという「階級」の進行による同性愛連続体の秩序を混乱させてしまう。そもそも、「陰間」の中の女性が他の女性を欲望することはレズビアニズムに他ならないわけだが、第3章で触れた『変態性慾心理』の「中年の官吏」の事例と同じように、性欲学のヘテロセクシュアル・モデルでは「陰間」のレズビアニズムを説明することはできないのだ。

それゆえ、田中も引用した一節の直後に「されど其の性慾に至っては全く倒錯するに限

らず、同時に異性に対する愛情をも有っていたことは、彼等が御殿女中、後家等を買われた事実を見ても明白である」(田中 c 135) と苦しい留保を付け加えている。つまり、「陰間」をダイレクトに性欲学に取り込むことは、ジェンダー倒錯の「階級」に立脚した同性愛解釈を補強するのと同時に、性欲学言説の不十分さを暴露することにもなるのである(黒岩 f 61-62)。

性欲学のコンテクストに組み込まれたのは江戸以前の「男色」だけではない。明治期の「男色」もしばしば論考の対象になった。再び『変態性欲論』を取り上げよう。同書には、河岡潮風のエッセイを引き写す形で、同時期の批評ではほとんど無視されていた『キタ・セクスアリス』の「男色」表象が、「明治の文壇」における「男色」の例として、坪内逍遙の『当世書生気質』とともに持ち出されている(羽太・澤田 182-183)。

明治期の「男色」については、『人性』1906年4月号に掲載されたドイツのベネディクト・フリートレンダーの記事「同性的情交ニ就テ」と、それに対する性欲学者の反論が非常に興味深い(Pflugfelder 279-280)。フリートレンダーは、ヒルシュフェルトが精神医学言説から構築した「第三の性」理論、すなわち、ヘテロセクシュアル・モデルとジェンダー倒錯に基づいた同性愛解釈を拒絶し、古代ギリシアの「ペデラスティ」をモデルにして、少年への「男性的徳義」(フリートレンダー183)を根拠に男性同性愛を脱犯罪化し、正統化しようとした。そこで彼は、1902年に巖谷小波が科学的人道委員会の機関誌に紹介した日本の「男色」をめぐる記事の次のような一節に着眼する。

日本ニ於テハ男色ハ全国一樣ニ普及セルモノニアラズシテ、一般ニ南方ハ北方ヨリモ普及シテ居ル様デアル [...] 九州殊ニ薩摩ニ於テハ古来最盛ニ行ハレテ居ル [...] 男色ノ盛ニ行ハルル地方ノ人ハ男ラシク剛健ナルニ反シテ男色ノ行ハレザル地方ノ人ハ温和柔弱ニシテ放蕩者モ少クナイ (フリートレンダー184)

こうした小波の見解に従い、フリートレンダーは日露戦争の「英傑」が「南方」出身であることを踏まえつつ、「連戦連勝島帝国運命ノ危機ヲ救ヒ能ク空前ノ名誉ヲ世界ニ輝カシタル将師」と「男色」を関連づけ、「社会ノ男色承認ト男性的能力ノ養成」の間の「原因的関係」を示している。記事には、長州出身の桂太郎や乃木希典、薩摩出身の山本権兵衛や東郷平八郎ら15人の「英傑」の名前も列挙されている(フリートレンダー185-186)。

この記事に対して、羽太と澤田は、「大和魂」が「男色」に先んじている点や「英傑と女色」の結びつきを主張し、薩摩や長州出身の「英傑」が多いのは「男色」が原因ではなく「歴史的関係」の結果であると反論する。そのうえで、フリートレンダーの見解を「謬見」や「論拠なき説」と痛烈に批判し、「社会ノ男色承認ト男性的能力ノ養成」の間の「原因的関係」を断固として否定する。同性愛をジェンダー倒錯によって解釈する彼らにとって、小波が示唆し、フリートレンダーが継承した「男性的能力ノ養成」としての「男色」とは、まったく受け入れられない見解である。むしろ「男色」は病理化され、「肺結核」や「神経

の過敏なるもの」と重ね合わされ、男性の身体を「虚弱」にするものであると論じられる（羽太・澤田 322-324）⁵³。

そうはいつても、羽太や澤田の強い調子とは裏腹に、第1章で触れた三品論文、あるいは、中沢新一や小森陽一が指摘するように、「南日本の男子結社的な男色文化」の象徴である薩摩の「兵児二才制度」や、それを下敷きにした、西南戦争における薩摩の私学校の男子生徒と西郷隆盛との「武士的男色関係」を想起すれば、フリーレンダーが唱える「南方」出身の「英傑」と「男色」の間の「原因的関係」を「論拠なき説」と捨て去るわけにはいかないことは一目瞭然だろう（中沢 40-46, 小森 c 72-77, 小森 d 255-257）。また、世紀転換期には、フリーレンダーが「英傑」の一人に数える帝国海軍大臣山本権兵衛が原因で、日本海軍が「鶏姦海軍」と称されるという記事が『萬朝報』に出された（Pflugfelder 211, 『萬朝報』1899年7月4日）。この記事では、「男色」は揶揄されているのだが、それでも「英傑」の「男色」と軍隊の結合が前景化されていることには相違ない。

しかし一方で、『萬朝報』の記事も日露戦争以前の1899年のものであり、ここで問題になっている日露戦争において日本軍が「英傑」たちの「男子結社的な男色文化」や「武士的男色関係」からエネルギーを得ていたかどうかはわからない。フリーレンダーの「論拠」が弱いのは事実であり、性欲学者の側の言い分にも一理ある。

以上、薩摩の「男色」をめぐる議論を概観したが、本論文ではフリーレンダーと性欲学者のどちらの見解が正しいのかを判定することを目論んでいるわけではない。それよりも羽太や澤田が日本軍の「英傑」と「男色」のつながりを「誤謬」や「論拠なき説」という強烈な一言で断ち切る点に注目したい。言い換えれば、彼らは前近代と地続きの「男子結社的な男色文化」や「武士的男色関係」を性欲学的に解釈し直し、男性同性愛を「肺結核」にたとえて病理化することで、その要素を軍から一掃し、軍隊という男性集団内部の脱エロス化を試みているのである。軍隊と男性同性愛の関連性には本論文の終章で再び触れる⁵⁴。

3. 性欲学言説のエロス化——『変態性慾』における男性同性愛者の手紙

田中香涯の『変態性慾』（1922-1925年）だけではなく、1920年前後になると、北野博美の『性之研究』（1919-1920年）、澤田順次郎の『性』（1920-1923年）、羽太鋭治の『性慾と人性』（1920-1921年）などが刊行され、まさしく『性』雑誌乱立期（斎藤 c 8）という様相を呈した。これらの雑誌はいずれも一般読者をターゲットにしており、学術誌というよりは、娯楽的な読み物であった（Pflugfelder 295）。

性欲学系雑誌では、定期刊行物の特性を活かして、書き手である性欲学者と読み手の間にコミュニケーションが生まれた。たとえば、性欲学者は相談用の「質問券」を同封し、読者からの相談を募り、手紙を含めた読者の声が誌面上に掲載されるようになった。基本的に臨床医ではなく、文筆業を生業にしていた性欲学者にとっては自説を展開し、補強するための実例としてそれらを用いることができるというメリットがある。一方、書き手と読み手の相互的なやり取りを通して、性欲学の見解は読者の間により迅速に、より深く浸透していった（古川 a 116-117）。本章では次に、書き手である性欲学者から読み手の側へと

視点を移す。性欲学系雑誌の中でも『変態性慾』に寄せられた男性同性愛者の手紙をいくつか取り上げ、「同性愛者」という「種族」が立ち現れるプロセスを概説しよう⁵⁵。

『変態性慾』1922年9月号には、「男子同性愛の一实例」というタイトルで、TO生なる男性読者からの手紙が掲載された。TO生は性欲学用語を駆使して、彼自身の同性への欲望を次のように分析している。

先月より先生御発行の雑誌を拝見いたして居りますので、此の自分の変態な恋に苦しむ「辛らさ」を […] 書き綴って、理解深き先生に打ち明けて、せめてもの心やりとしたいと思います。 […]

自分は一人前の男であり乍ら、年長の同性を慕って行く女性的な男なのです。 […] どうにもならない事をどうにかしようと思う苦しさを、先生の科学的な立場から離れて、此の不幸に生れて来た自分を憐れんで下さい。

自分は女ばかりの姉妹中の一人息子です。その為め細胞が常の男子とは組織が違って居るのかも知れませんが、又は女の中に育てられた習慣が因かも知れませんが、自分では確かに先天的だと思って居ます。(TO生 a 241-242)

TO生は同性への欲望を「変態な恋」と呼び、「習慣」、すなわち、後天性の可能性を示唆しつつも、同性愛を「細胞」の変質と関連づけ、先天的なものと解釈し、自らを「女性的な男なのです」、「細胞が常の男子とは組織が違って居るのかも知れませんが」と「一人前の男」への抵触によって定義する⁵⁶。このようなTO生のとらえ方には、本章でこれまで概観してきた性欲学の同性愛解釈、つまり、「同性 [他の男性] を慕うことが「女性的な男」になるというジェンダー倒錯とヘテロセクシュアル・モデルが容易に見出せるだろう。

それと同時に、TO生が田中に向けて、「先生の科学的な立場から離れて […] 憐れんで下さい」と要求している点には注意する必要がある。『変態性慾』創刊にあたり、「発刊の辞」で、医師であった田中は他の性欲学者との差異化を図るべく、「能うだけ真面目なる態度を取り、学者的立場を失わない様に注意」と宣言していた(田中 a 2)。その田中に対して、「科学的」で「学者的」な返答ではなく、「憐れ」みを求めるTO生は、結果的に田中の宣言を裏切ることになるのである。

上で引用した一節に続いて、TO生の手紙には、次のような興味深いくだりもある。

中学時代には軍人上りの体操の教師を慕い、又は上級の人にかからかわれるを愉快として居ました。専門学校時代には同級生の年長者(鹿児島の人)を慕いつづけて来ましたが、其間中学の時に神田の下宿で福岡の人及び長崎の神官 […] に云い寄せられましたが、まだ人を慕っても性慾に根拠は置き乍ら、愈々実行となれば恐ろしさに逃げ、其後警視鑑の巡查(熊本県人)に慕われて、愈々と云う刹那にふと恐ろしくなり逃げましたが、今となって考えれば若い時代の思い出に……と惜しくも考えられます。鹿児島の人とは兄弟の交りは致し乍ら、今一步進んでは互の理性が許しませんで、今も清い交際をつづけて居ます。がもう何も彼も望みはありません。妻を得て年は廿七の男が君を慕うと云い出したら、相手の人は怒るでしょう。気狂がと云うでしょう。(TO生 a 242-243)

彼は学生時代に男性に「云い寄られ」た数々の「思い出」を回顧している。それが事実かどうかはわからないものの、東京在住の彼が語る相手の男性は「鹿児島」、「福岡」、「長崎」、「熊本」と全員が九州出身である。これまでも述べてきたように、明治時代には「男色」は九州、特に鹿児島に結びつけられていたわけで、TO 生の手紙からも「男色」地帯としての九州が浮上してくる。

しかし一方で、TO 生は「男色」のいくつかのパターンとの隔たりをも露呈している。そもそも彼は男性との行為を「実行」したわけではなく、だが、「男色」が許容される学生時代を過ぎて、同性への欲望は抱いたままであるという。TO 生は自己の欲望を先天性な「細胞」の変質に由来するものとして解釈しており、行為に基づいた、男子学生の一過性の「男色」とは明らかに異質なものととらえている。彼自身の言葉を用いれば、「気狂」、「科学的の精神病者」(TO 生 a 243)ということになるのだ。

また、相互浸透的な「男色／女色」とは異なり、「素質」を重視する性欲学では「同性愛／異性愛」は二律背反的なものになる。そのため、TO 生は「妻を得て」いながらも、バイセクシュアルではなく、あくまでもホモセクシュアルとして自己を定義している。ガーヴァーが指摘しているが、精神医学や性科学・性欲学では「同性愛／異性愛」の二項対立からこぼれ落ちるバイセクシュアリティは不可視化される傾向にあった (Garber 240)。この TO 生の手紙においてもそうした不可視性は顕著である。

さらに、「男色」モデルからの逸脱は嗜好の面にも見て取れる。彼は 27 歳となった現在でも年上の「苦み走った男性的な男」(TO 生 a 241)を求めている。TO 生のみならず、他の書き手も「男色」のもとで欲望の対象として特権化された「美少年」ではなく、「男らしい軍人」(大阪 SK 生 383)や「四十歳前後」の「男性的な人」(戸塚 A 生 130)など年上の男性への欲望を打ち明けている。

TO 生の手紙はそれだけで完結するわけではない。『変態性慾』には TO 生に共感した読者からの手紙が紹介されるようになる。たとえば、1923 年 1 月号で岡山天紅生は、「私の性格傾向は、本誌第一巻五号即ち九月号御掲載の T・O 生氏の告白と不思議にも符を合したように酷似しています」(岡山天紅生 45)と述べ、1923 年 5 月号で静岡 HY 生は、『『変態性慾』九月号に見えました東京 JO [TO] 生の同性愛者の苦悶、私はそれと同じ悩みに日夜苦しんで居る者です」(静岡 HY 生 236)と記している。彼らは、性欲学者田中香涯の論考だけではなく、読者である TO 生への共感を通して、性欲学の見解に自らを同一化し、「変態性慾者」、「同性愛者」というアイデンティティを確立していったのだ。

彼に言及した他の読者の手紙が掲載される中で、今度は JO [TO] 生の手紙が、1923 年 5 月号に再び掲載される。彼は、この二通目の手紙の最初では「自分」という単数形で語っている。ところが、しだいに「吾々」という一人称複数形を採用し、「此の満されざる悩み、此の遂げられざる望に苦しむ人と、せめて花散る一と夜を語り明かしたならば、此上なき慰安にもなりましようものを」と他の男性同性愛者との連帯が模索される (TO 生 b 237)。プラグフェルダーの言葉を借りれば、「『変態性慾者』の間の横の繋がり」が求められるのだ (Pflugfelder 299)。それは確かに悩みや苦しみを原動力にしているのだが、きわめてホモエロティックなものでもある。

ホモエロティックな紐帯を要求しているのは TO 生だけではない。戸塚 A 生も、おそらくはヒルシュフェルトの科学的人道委員会を念頭に置きつつ、「誰だったか、同性愛者の団体又はクラブを作って彼等を一所に集め、相愛の相手を得させることが最もよき方法であると云いました。真に理解あり同情ある言と信じます」(戸塚 A 生 130) と提案している。戸塚 A 生の記述では、同性愛の社会的承認や脱犯罪化を一義的に目指した科学的人道委員会が「相愛の相手を得させる」ための「団体又はクラブ」として、過剰なまでにエロス化されるのである。

このように「[変態性慾者]の間の横の繋がり」が強く欲せられる TO 生や戸塚 A 生の手紙には、マイノリティ意識がはっきりと現れている。こうした意味では、古川誠が指摘するように、それ以降、現代にまで続く「近代の悩める」[男性]同性愛者の原型をそこに見ることができるのかもしれない(古川 b 48)。しかし、性欲学系雑誌に立ち現れた男性同性愛者は、古川が言うような「悩める」だけの存在ではない。当事者である同性愛者は、ただ受動的に性欲学言説を内面化しただけではなく、したたかにそれを引き受け、はるかにホモエロティックなものに書き換えていったのだ。

本章では最後に、そうしたエロス化の端的な例として、1923 年 5 月号で紹介される神戸 YK 生の手紙を読みたい。それは次のように始まる。

本当の私の心持を解して呉れる友として……私は此の雑誌を手にしだしてから、自然私は変態性慾者である事を自覚して参りました。私は同性愛者で、又女性的男子である事も明かに知って来ました。此の雑誌の中に、同性愛者の告白が記載せられてあるのを読む度に、他の人々の女子に対しての慾望(?)と同じ様な感じを持って、それらの人々をしたわらないでは居られません。一度でいいから私の思っている事が実現されとう御座います。

同性を求むる事に終日もだえて居ります。いくらもだえても口に出す事の出来ない臆病な私は、せめても御研究の深い先生に打明けて、慰めの御言葉を頂戴したい、又私の告白を愛読者諸君に聞いて戴きたいと思ひまして、これまでの生活の全部を申し上げる次第で御座います。(神戸 YK 生 238)

他の手紙の書き手と同じように、神戸 YK 生も『変態性慾』誌を通じて「変態性慾者」、「同性愛者」、「女性的男子」と性欲学の見解に基づいたアイデンティティを獲得している。だが、彼が望んでいるのは、同性愛の「治療」ではなく、「実現」である。文筆業を生業としていた日本の性欲学者も、形骸化したものではあったが、あくまでも同性愛の「診断」と「治療」を最終目標として掲げていた。たとえば、「不幸な私の病気の療法は無いもので御座いましょうか」と結ぶ大阪 SK 生に対して、田中が「筆者 S・K 氏に御相談申しあげたいことがありますから、至急御住所御姓を直接本会までお知らせ下さいませんか」と暗示的な回答をしているところからもそれはうかがえる(大阪 SK 生 384)。したがって、「治療」をまったく意図していない神戸 YK 生の手紙は、結果的に性欲学者による「診断」と「治療」の枠組みを無効化させてしまうのである。

しかも、この手紙の後半では、彼が同性愛をすでに「実現」していることが明らかにさ

れる。「エロ・グロ・ナンセンス」期に流通することになる男性同性愛言説をも予感させながら、「少年店員」に「自分は同性愛者である事を […] 話し、それを求め […] 彼は私のいう通りに愛を容れて呉れ」たエピソード、「男優の楽屋に入って交際を求め様とした」経緯、銭湯での「学生や青年」との肉体的接触、「二十五才の金髪美男子英国人」との関係などが赤裸々に綴られる（神戸 YK 生 239）。すなわち、YK 生がここで言う「私の思っている事」とは、同性愛関係の持続を意味しているのだ。要するに、「診断」と「治療」を通して、同性愛の消滅を最終的な目的とするはずの性欲学系雑誌において、皮肉なことに、同性愛の欲望が循環し、増殖されているのである。

性欲学系雑誌に掲載された手紙は、第3章で触れたように、フーコーが述べるところの「性」について「語ることへの煽動」に応答したものに違いない。同性愛者の言葉は性欲学者によって駆り出されたのである。だがフーコーは、「言説は権力を運び、生み出す。すなわち、権力を強化するのだが、それはまた、権力を侵食し、危険にさらし、脆弱化し、その行く手を阻むことも可能にする」（Foucault 133）とも指摘し、次のように続ける。

19世紀の精神医学や法解釈において、また文学において、同性愛・倒錯・ペデラスティ [pédérastie]・「精神的な半陰陽 [hermaphrodisme psychique]」といった種族や亜種についての一連の言説が出現したことは、確かに、この「倒錯」という領域への社会的統制の非常に強い進行を可能にした。だが、それはまた「逆転した [en retour]」言説の構成を可能にするものでもあった。つまり、同性愛を医学的に貶めるカテゴリーを利用して、しばしばそうした語彙において、同性愛が自らについて語り出し、その正統性や「自然性」を主張し始めたのだ。（Foucault 134）⁵⁷

デイヴィッド・ハルプリンは、この一節に言及して、同性愛者が彼ら自身を「客体化する抑圧的な医学化の言説を、肯定的な方向で反復し」、医学と同性愛の主客を入れ替えた「逆転した言説」に、フーコーが「有意義な政治的抵抗」を見ていることを強調する（ハルプリン b 88）。本論で取り上げた性欲学系雑誌の読者は、もちろん、ハルプリンがそこで一義的に想定しているマグヌス・ヒルシュフェルトのような「19世紀のホモセクシュアル解放思想家」ではない。しかしながら、性欲学系雑誌の仮名の読者の手紙もまた「逆転した言説」を構成するものなのだ。

以上、前章と本章で概説してきたように、西洋の精神医学や性科学をモデルにした日本の性欲学では、「先天性／後天性」の区分のもとで、「素質」に基づく先天性が前景化され、ヘテロセクシュアル・モデルとジェンダー倒錯の度合いを軸に、同性愛は「種族化」された。ところが、そもそも模範とした西洋の精神医学言説においてもその「科学」性を裏切る奇妙な神秘性が内在されており、細かな分類に関しても、十分には機能していなかったわけだが、アカデミズムではなく、一般読者を対象とした日本の性欲学は、精神医学の疑似科学性をより明確に顕在化させるものであった。しかも、性欲学言説に同一化した当事者の言葉は、性欲学規範を反復していると同時に、それを脆弱化させ、その規範を脅かす「逆転した言説」でもあったのである。

さて、このような一連の流れを促進したのが、言い換えれば、一方では男性同性愛を規定する「科学」言説を狭義の性欲学の文献を越えてより広く浸透させつつ、もう一方では同時進行でそれをなし崩し的に解体していったのが、昭和初期の「エロ・グロ・ナンセンス」の風潮のもとで出版された大衆向けの雑誌記事や小説である。そうした性科学・性欲学言説の再生産と変容を鮮烈に表わすテキストとして、続く第5章・第6章では江戸川乱歩の二つの文学作品を論じていこう。

第5章 同性愛の感染性——江戸川乱歩『一寸法師』

第1章と第2章では森鷗外の文学テキストに「同性愛」概念が持ち込まれ、変容するプロセスをたどった。第3章と第4章では精神医学、性科学・性欲学の同性愛解釈をそこに潜む様々な矛盾とともに確認した。続いて、本章と次章では江戸川乱歩（1894-1965年）の作品に注目する。

乱歩は、1923年に『二銭銅貨』で雑誌『新青年』からデビューし、以降、日本の創作探偵小説の旗手として活躍したわけだが、彼には男性同性愛の研究家という顔もあった。6歳年下の友人である鳥羽在住の岩田準一とともに、「昭和二、三年頃から […] 同性愛文献あさがはじま」り、「お互に文献カードを作って、発見の多きことを競うような時期も」あった。だが結局は、「学究的素質において私 [乱歩] は到底岩田君の敵でないことを悟って、岩田の研究に協力するようになったという（江戸川 m 160, 164-165）。岩田の「本朝男色考」が『犯罪科学』に掲載されたのも乱歩の伝手によってであり、彼が1943年に自費出版した、膨大な数の男性同性愛関連の書物を収録した文献目録『後岩つつじ』が、1956年に『男色文献書志』というタイトルで再版されたのも乱歩の尽力による。

乱歩はその「同性愛文献あさがはじま」が開始した前後に小説でも男性同性愛を扱っている。そこで本論文では、いずれも多く読者を持つ新聞、大衆誌というメディアに発表され、今日も読み継がれている『一寸法師』（1927年）と『孤島の鬼』（1930年）という二つの作品を取り上げる。

あらかじめ論点を提示すれば、乱歩のテキストで男性同性愛は、第3章・第4章で概観した性科学・性欲学規範に従って表象されている。しかし、テキストは規範からのズレも露呈している。本論ではそうしたズレに着眼したい。乱歩の男性同性愛表象に目を向けた橋本治のエッセイ「孤島の小林少年——江戸川乱歩とグロテスク考」（1994年）、高原英理の『無垢の力——〈少年〉表象文学論』（2003年）、海外でこの問題を扱ったジェフリー・アングルス「少年たちの愛を書くこと——村山槐多と江戸川乱歩の文学における男同士 [Male-male] の欲望の表象」（2003年）、さらには、障害表象に取り組んだ英語圏の論文も手がかりにしていく。

それでは最初に、1930年に発表された「陰間」を扱った雑誌記事を分析しよう。というのも、昭和初期の「陰間」表象は、『一寸法師』の男性同性愛表象と重要な共通点を有していると考えられるためである。

1. 1930年の「陰間」表象

「エロ・グロ・ナンセンス」全盛の1930年頃には、男性同性愛を題材にした雑誌記事がしばしば発表されるようになった。性欲学の文献では江戸時代の「陰間」が「変態性慾者」の典型として再解釈されたが、「エロ・グロ・ナンセンス」期には、同時代の男娼が「陰間」と呼ばれ、脚光が浴びせられたのだ。「学術と猟奇趣味の握手」⁵⁸を謳い文句にしていた『犯

罪科学』に掲載された三村徳蔵の「新東京陰間團」（1930年7月号）や、その続編の「ある陰間の一姿態」（1931年6月号）などが代表的な例である。特に、「新東京陰間團」に関しては、出版社サイドも大きな期待を寄せていたことが、次のような宣伝記事からもうかがえる。

今や男色の問題は、往昔の文献や独逸だけのものでなく、如実に吾人の側近に転開されつつある問題となって来たのである。エロチズムとマソヒズムの交錯せる人肉の市、新東京陰間團の正体は今や眼前に暴露されんとす。吾社はこの事実直面して、特に筆者を派して着実に正確に探求せしめつつある。読者諸氏よ、刮目して「犯罪科学」第二号を待たれよ！（「新陰間團現わる！」60）

書き手の三村も別の記事で、「新東京陰間團」に対しては、「この奇怪な事実に驚異の目を瞠る読者、更に詳しい事実を報道して来る特志家、^(ママ) [...] 自分の変態性慾者としての悩みを訴えて来る人等々々」（三村c 113）からの反響が大きかったことを強調している⁵⁹。

さて、「新東京陰間團」はA、Bなる二人の人物の対話で構成されている。読者の「驚嘆」を誘い、「好奇」を満たすべく、同時代の「陰間」が「如何に変態であり、如何に珍奇な生活を送りつつあるか」が綴られる（三村a 127）。男娼組織「新東京陰間團」は浅草を活動拠点にしている。「浅草の猟人」（三村a 128）を自負するAは「変態性慾者」ではないものの、「猟奇心」⁶⁰ゆえ、さらには、「研究」（三村a 127）対象と称して「陰間」と接触を持ち、「美少年」で、「薄く白粉や口紅をつけている」（三村a 129）安っちゃんという「陰間」と知り合う。そして、その安っちゃんを介して、「お姉さん」（三村a 129）と呼ばれる24歳の芳さん、女装した27歳のお秋さん、金銭も取らずに「変態性だけのためにそういう職業をしている」（三村a 133）光雄さん、マゾヒズムを嗜好する鉄ちゃんといった様々な「陰間」に通じる。

「新東京陰間團」の「陰間」のなかでも、53歳の「お爺さんのかげま」（三村a 129）と客の「四十歳前後の変態性慾者」（三村a 130）との関係がもっとも「醜悪なもの」（三村a 129）として提示されている点に注意しよう。「お爺さん」は、江戸時代の「陰間」のイメージを著しく裏切るものであるわけだが、だからこそ、年下の男性相手に「年増女」（三村a 130）のように振舞う「お爺さんのかげま」が、「グロ」の極みとして、「好奇」や「猟奇」の眼差しの対象になっていたのである⁶¹。

Aはこのように「陰間」を「変態性」によって解釈し、「先天的／後天的」に区分して、女性化したものとして描いている。そこに、第3章・第4章で概観した性欲学言説の影響が色濃く反映されていることは明白だろう。しかし同時にAは次のようにも述べる。

最初は好奇心でかげま買いをしたのだが、我々に沢庵の味が忘れられないのと同じように、かげまの味が忘れられなくなって、すっかり変態の仲間入りをする人間もあるらしいよ、いや、大抵はそうになってしまうらしい。（三村 a 130-131）

「かげまの味」を「お爺さん」を想起させる「沢庵の味」に巧妙にたとえながら、食べ物
の嗜好を引き合いに出すことで、Aは「変態」の境界線の可変性を暗示しているのである。

ここで再びセジウィックの言葉を借りれば、Aは一見、同性愛を「変態性慾者」だけに
「局所化」するよう見えるのだが、実際には「一般化」しているということになる。そ
うすると、たとえあくまでも窃視的な観察者の視点からAがBに「陰間」を語っていたと
しても、「陰間」に対する「猟奇心」や「好奇心」を露にする以上、彼らも「変態」と連続
的であることが明かされる。Aが言うところの「変態の仲間入り」である。つまり、「変態
性」が「正常／異常」の境界を侵して、「変態性慾者」ではないはずのAやBにまでも拡散
するのだ（黒岩e 1-3）⁶²。こうした「正常／異常」の境界侵犯性は『一寸法師』の男性同
性愛表象を分析する際にも重要な論点になる。

以上のように、「新東京陰間團」は浅草を舞台としているのだが、この記事だけではなく、
1930年頃に、同時代の「陰間」は浅草に結びつけられて表象される傾向が大きかった。た
とえば、浅草に精通した演歌師添田唾蟬坊は『浅草底流記』（1930年）で、「カゲマが出没
する」かどうかはわからないと前置きをしつつも、「花屋敷の前の、小高い築山の上に、出
るといふ」と述べており（添田 151, 152）、探偵作家の浜尾四郎も「同性愛考」（1930年）
というエッセイで「陰間買」の拠点として浅草公園を挙げている（浜尾 a 140）。

ただし、浜尾が「流行の尖端たる銀座街頭に進出して来た」（浜尾 a 141）と続けるよう
に、この時期には、浅草だけではなく銀座の「陰間」も描かれることがあった。吉行エイ
スケの小説『享楽百貨店』（1930年）の冒頭でも、「銀座裏の酒場」に「緋縮緬の長袖」を
着て、「島田のかつら」をつけた「陰間」が登場する（吉行 227）。

ところで、江戸川乱歩も、「エロ・グロ・ナンセンス」の流行に先立つ1926年に、『新青
年』に発表したエッセイ「浅草趣味」で浅草の「陰間」に目を向けている。乱歩は「安来
節」の小屋や「花やしき」（江戸川 j 38）など浅草公園の情景を綴るなかで、「野外いかもの」
（江戸川 j 41）の極みとして、次のように「陰間」にも言及する。

そこへ時々異形のものが現れる。男のくせに白粉を塗っている。そして通行人に、
「チョイト、あなた。」

なんて、くねくねと身体をよじらせて、手招ぎをする。野外かげまとも云うべき代物
だ。（江戸川 j 41-42）

この一節では「陰間」の身体の「異形」さが強調されている。だが浅草に「探偵小説以上
の刺戟物」（江戸川 j 38-39）を求める乱歩にとっては、「異形」であるからこそ「陰間」は
注目すべき素材にもなるのだ。実際に、「浅草趣味」の数ヵ月後、『朝日新聞』に掲載し
た長編小説『一寸法師』の冒頭部分で、厳密にはそれを「陰間」と呼ぶことはできないか
もしれないが、乱歩は同じ浅草を舞台に男性同性愛者の出会い、いわゆる「クルージング」
を取り上げている⁶³。本章では、次に、『一寸法師』の「クルージング」劇を読んでいく

ことにしよう。

2. 「一種異様の人種」の共演／饗宴——『一寸法師』（1）

『一寸法師』は1926年12月8日から東京版は1927年2月20日、大阪版は2月21日まで、大正から昭和へと元号をまたいで、東西の『朝日新聞』の朝刊に連載された。乱歩にとっては初めての新聞小説である。

まずは、『一寸法師』の本筋をたどろう。山野家の令嬢三千子の失踪と「銀座の——百貨店の呉服売場」（江戸川 a 550）などに人間の死体の一部が陳列される殺人事件を軸に、その周辺に「よく見世物などに出る」（江戸川 a 514）謎めいた「一寸法師」が出没し、上海帰りの名探偵明智小五郎が事件を解決するという展開で、多種多様なトリックが用いられ、三ヶ月の連載の間、読者を飽きさせない起伏に富んだ筋になっている。こうした本筋の序曲として、乱歩が連載前日に記した「作者の言葉」によれば、「私好みの古臭い怪奇の世界」（江戸川 a 496）の中心地である浅草を背景に、男性同性愛者が描き出されるのだ。

物語は、主要な登場人物の小林紋三が浅草公園の「安来節の御園館」（江戸川 a 497）を出てくる場面から始まる。「春の夜の浅草公園」は「異様」なほどに彼を引き寄せている（江戸川 a 497）。というのも、「不思議な魅力」を発散する深夜の公園は、紋三には「飛んでもない事柄」を発見できる刺激物に他ならないからである（江戸川 a 498）。

実際に、彼はそこで「何かしら普通でない非常に変挺な感じのもの」（江戸川 a 499）に出くわす。それが本筋の事件で重大な役割を演じる「一寸法師」である。「一寸法師」は、「十歳位の子供の胴体の上に、借物の様な立派やかな大人の顔がのっかって」おり、「生人形の様すまし込んで」いる（江戸川 a 500）。

エリザベス・グロスツが指摘するように、「一寸法師 [dwarf]」を含めた、いわゆる「フリーク」は様々な二項対立をかき乱す（Grosz 57）。この小説でも「一寸法師」は「大人／子供」、「人間／人形」⁶⁴という境界線を越境する存在として描かれることになるのだが、それが紋三に恐怖を与えると同時に、彼を魅了しているのである。

紋三が「一寸法師」に目を止めた後、『一寸法師』の匿名の語り手は深夜の公園の様子を次のように詳細に描写する。

その間を奇妙な散歩者が歩くのだった。寢床を探す浮浪人、刑事、サーベルをガチャガチャいわせて三十分ごとに巡回する^(ママ)正服巡査、紋三と同じ様な猟奇者、などがその主なものであったが、外にそれらのいずれにも属しない一種異様の人種があった。彼等は一寸その辺のベンチに腰をおろしたかと思うと、じきに立上って同じ道を幾度となく往復した。そして木立の間の暗い細道などで外の散歩者に出逢うと、意味ありげに相手の顔をのぞき込んで見たり、自分でもそれを持っている癖に、相手のマツチを借りて見たりした。彼等は極めて綺麗にひげをそって、つるつるした顔をしていた。縞の着物に角帯など締ているのが多かった。

紋三は以前からこれらの人物に一種の興味を感じていた。どうかして正体をつきとめて見たいと思った。彼等の歩きっぷりなどから、あることを想像しないでもなかったが、それにしても、皆三十四十の汚らしい年寄りなのが変わった。(江戸川 a 500-501)

この一節では紋三が「猟奇者」に属することが明記され、彼の関心をもっとも強烈に引くのが「浮浪人」や「猟奇者」とも異なる「一種異様の人種」という一群であることが明かされる。彼らは何か「意味ありげ」な動作をしているという。

「一種異様の人種」の「正体」は何か。結論から言えば、それは性的な意味での「相手」を探す男性同性愛者である。だが本論では、当時の大衆文化において、「未開人」や「土人」、黒人が「一種異様の人種」として享受されていたことにも注目したい。藤田みどりによれば、そもそもアフリカを探検したイギリス人リヴィングストンやスタンリーの作品が 1890 年代に紹介され、ブームになっており、日露戦争に勝利した後は、押川春浪らがアフリカを舞台とした冒険小説を次々と発表した(藤田 247-248)。

一方、明治末期からアフリカの記録映画が流行し、1919 年のターザン映画を契機にアフリカを扱った娯楽映画も人気を集めていた。これら小説や映画の中で「食人種」[...] 猛獣に等しく、最も「文明」から遠い人種としての黒人のイメージ(藤田 229)が反復されていたのだ。1926 年の『朝日新聞』の読者には「一種異様の人種」から黒人を引き出す素地は完成していたと思われる。

しかも、昭和初期の「エロ・グロ・ナンセンス」のもとでは、黒人は「グロ」として持てはやされるようになった。1930 年頃に出された一連のモダン語辞典では、「グロ」はもともと「怪奇」、「恐怖的」なものを指すが、「エロ」と一緒に用いられることで原義からずれて、「変態性慾的魅力を多分に持っている」という意味を有するようになったと説明され、「猟奇」とも重ね合わされた。そこでは、「グロ」の例として、しばしば「パリの女の間に黒ン坊を可愛がる風があった」ことが挙げられており、「グロ」と黒人の連関が強調された(鶴沼 59, 小山 109-110, 中山 181)。

また、1931 年に新潮社が出版した『現代猟奇尖端図鑑』ではより露骨に「グロテスク」なものとして「喰人島」、「黒人のグロ乱舞」、「黒人王の愛妾の群」などが列挙され、「グロの頂点」とキャプションが付けられている(佐藤 72-77)。『変態風俗画鑑』(1931 年)にも「南アフリカのピグニー族」や「ニュー・ギニヤ喰人種」の写真がアトランダムに収録され、巻末の解説の「グロ感風景」では、「人文の発達是有らゆる物を洗練して歪んだ物を淘汰」するため、「猟奇の変態慾望は未開人の中へ向けられて行く」と「グロ」が説明されている(『変態風俗画鑑』巻末 8)。つまり、「変態性慾的魅力」や「猟奇の変態慾望」と不可分となった「グロ」のもとで、黒人表象と男性同性愛表象は接近するのである。アフリカの黒人が好奇の眼差しで探索されたように、都市に蠢く「陰間」を含めた男性同性愛者も「グロ」を体現する「一種異様の人種」として狩り出されたのだ。「エロ・グロ・ナンセンス」の流行には先んじているが、『一寸法師』の男性同性愛表象の「一種異様の人種」は両者のそうした接近を鮮烈に示している。

さらに、第 3 章で論じたように、このテキストの「一種異様の人種」という隠喩からは、同性愛を個人に内面化し、特殊な「人種」として解釈する性科学・性欲学の見解も読み取れる。ところが、「人種」の隠喩が使われているにもかかわらず、『一寸法師』では、「一種

異様の人種」の内面が取沙汰される気配はまったくない。紋三に同一化した語り手の関心は、男性性を象徴する「ひげ」をきれいに剃り落とした「つるつるした顔」、あるいは、アナルセックスとも考えられる、「あること」を想起させる「歩きっぷり」といった彼らの外見に集中している。要するに、「一種異様の人種」は完全に表面的なものとして描かれているのであり、中村三春が述べるように、彼らは浅草公園という「人間百貨店」の中で、あたかも商品であるかのように陳列されているのだ（中村 103-104）。第2章で検討した『青年』における精神化された“homosexual”とは対称的である。

それに加えて、引用した一節では「三十四の汚らしい年寄り」とわざわざ男性同性愛者の年齢が記されていることにも注意しよう。「エロ・グロ」を象徴する雑誌記事の「新東京陰間團」でも、美少年ではなく、「沢庵」のような53歳の「お爺さんのかげま」がもっとも「醜悪なもの」として、脚光を浴びており、また、それゆえに商品価値があった。換言すれば、嫌悪感を引き起こすと同時に、「猟奇者」をそそる格好の素材であったわけだが、中高年男性の同性愛にスポットが当てられているという点でも、1930年頃の男性同性愛表象と『一寸法師』のそれとの共通点が指摘できるのだ。

3. 同性愛の感染性——『一寸法師』（2）

さて、紋三は「見世物」のように「一寸法師」を見ているうちに、「この怪物に段々魅力を感じて来た」という（江戸川 a 503）。一方で、彼は「一種異様の人種」も熱心に観察するわけだが、見世物化され、商品化された男性同性愛者は次のように詳細に描写される。

一寸法師はさい前から、妙に盗む様な目つきで、一方を見つづけていた。その目を追って行くと、かげになった方のベンチにかけている二人の男に注がれていることが分かった。洋服紳士と遊人風の男とは、いつの間にか同じベンチに並んで、ボソボソ話合っていた。[…]

二人は初対面らしいのだが、何となく妙な組合せだった。年配は二人共四十近く見えただけ、一方は小役人といった様なしなかつめらしい男で、一方は純粹の浅草人種なのだ。それが、電車もなくなろうというこの夜更けに、暢気相に気候の話などしているのは、如何にも変だった。彼等はきっと、お互に何かの目論見があるのだ。紋三は段々好奇心の高まるのを感じた。

「どうだね、景気は」

洋服は、相手の男のよく太った身体を、ジロジロ眺め廻しながら、どうでもよさそうに尋ねた。[…]

そんなつまらない会話が、暫く続いていた。紋三は、一寸法師に習って、長い間二人から目を離さなかった。

やがて洋服は「アア」と伸びと一緒に立上ったかと思うと、紋三達の方をジロジロ眺めながら、不思議なことには、再び同じベンチに、太った男とほとんどすれずれに腰をおろした。太った男はそれを感じると、一寸洋服の方を見て、すぐ元の姿勢に返

った。そして、頭の毛の薄くなった四十男が、何か恥かしそうな嬌態をした。(江戸川 a 503-504, 下線引用者)

ここで、例の「一種異様の人種」が「洋服紳士」と「遊人風の男」⁶⁵と特定され、その二人は「妙な組合せ」であることが強調される。ただし、特定されるとはいえ、語り手の眼差しは「よく太った身体」や「頭の毛の薄くなった四十男」など依然として男性同性愛者の表面にとどまっている。それが美少年のイメージとかけ離れていることは言うまでもない。

なお、12月10日付の『朝日新聞』東京版では、引用した場面に「洋服」が「太った男」の手を取り、「握り合わせて、彼等のくっついた膝の間に隠した。太った男は、それを少しも驚かないで、小娘の様に大人しくしていた。彼は洋服の手を握り返したのかも知れなかった」(江戸川 c 8) という一節が続く。「頭の毛の薄くなった四十男」が、まるで「小娘」であるかのように変貌する様子がこのクルージング劇最大の見せ場として設定されているのである。中高年男性の女性化する身体を通じて、性欲学言説の同性愛解釈が強烈に具現化されているのだ。だが、同日の『朝日新聞』大阪版や連載終了後、1927年に春陽堂から出版された『一寸法師』、あるいは、1931年に刊行された『江戸川乱歩全集』第二巻の『一寸法師』では、この部分は割愛され、男性同性愛者のクルージングはより暗示的なものになっている。

ところで、引用した箇所「一寸法師」は「妙に盗む様な目つき」で男性同性愛者のクルージング劇を凝視し、「好奇心」の高まりとともに紋三も「一寸法師」の「目つき」に同一化している。一方の男性同性愛者たちも互いに「ジロジロ」と見合っているだけでも、また、一方的に覗き見られるだけでもない。『一寸法師』の男性同性愛者たちは、紋三や「一寸法師」に「ジロジロ」とした眼差しを投げ返してもいる。ジェフリー・アングルスは「目撃する主体と眺められる対象の間の境界線を注意深く保持する」点を「エロ・グロ・ナンセンス」期のテキストの特徴と見なし、『一寸法師』もその一つに数えている(Angles 195)。しかしながら、「ジロジロ」という境界侵犯的な視線が反復され、循環することで、少なくともこのテキストでは、「目撃する主体と眺められる対象」の境界線はしだいに曖昧になっていく。したがって、男性同性愛者や「一寸法師」だけではなく、語り手を通して読者がしばしばその目線を採用する紋三までもが見世物化され、浅草公園の「人間百貨店」の中では商品化されてしまうのである。

「洋服紳士」と「遊人風の男」との交渉は成立したようである。クルージング劇には、次のように幕が下ろされる。

そして又、しばらくボソボソとささやき合くと、彼等は気をそろえて、ベンチから立上り、ほとんど腕を組まんばかりにして山を下りて行くのだった。

紋三は寒気を感じた。妙な比喻だけれど、いつか衛生博覧会で、ろう細工の人体模型を見た時に感じた寒気とよく似ていた。不快とも、恐怖とも例え様のない気持だった。そしてもっといけないのは、彼の前の薄暗い所で、例の一寸法師が、降りて行った二人の跡を見送りながら、クックッと笑いだしたことだった。(江戸川 a 504-505)

「一種異様の人種」は「ほとんど腕を組まんばかりにして」紋三の視界から消えていく。それは彼が最初に予想していた「あること」、つまり、男性間の性行為の実現であり、紋三は「寒気」を感じる。しかし、それまでの「一種の興味」が「寒気」という肉体的反応に変わったのは、紋三が「あること」の実行を想像しているからに他ならないのではないだろうか。さらに、そこでは境界侵犯的な「ジロジロ」とした視線が交錯していたことを想起すれば、紋三は自身が同性愛者という「一種異様の人種」になるという「恐怖」に脅えているのではないか。換言すれば、彼は同性愛の感染不安へと陥っているのである。

「寒気」という紋三のホモフォビックな身体的症状は、皮肉にも、そこに彼自身の同性愛の欲望が伴っていることを暗示している。ホモフォビアをホモエロティシズムから区別することはもはや不可能なのだ。セジウィックの言葉を用いると、『一寸法師』の冒頭場面で男性同性愛は、「一種異様の人種」だけに「局所化」されているように見えて、実際にはむしろ「一般化」しているのである。

なお、大正昭和の時期にブームとなった「衛生博覧会」⁶⁶で陳列された、破損した身体の模型である「ろう細工の人体模型」という比喻を通して、男性同性愛者の身体は「野外かげま」のような「異形のもの」に、あるいは、「生人形」のような「一寸法師」に近づく。言い換えれば、「フリーク化」するということも付け加えておこう。そして、引用した一節の最後の「クックッ」という笑い声を契機に、「一種異様の人種」の役は男性同性愛者から「一寸法師」に引き継がれることになる⁶⁷。

しかしながら、非常に興味深いことに、同性愛は「猟奇者」の紋三に感染するだけではない。深夜の浅草公園の「奇妙な散歩者」の中には、「刑事」や「^(マフ)正服巡查」も含まれていた。劇中で彼らは「猟奇者」を取り締まる役を演じるはずである。実際に、男性同性愛者のクルージング劇が始まる直前、公園では「喧嘩らしい人声」(江戸川a 501)が起こり、「一人の洋服姿の紳士が、警察官に引きすえられ」(江戸川a 501)る光景が描かれる。ところが、語り手は、舞台袖にはける「洋服姿の紳士」と「警察官」を、「二人は無言のまま仲よく押し並んで交番の方へ歩いて行った」(江戸川a 501)と奇妙なまでにホモエロティックに描写している。彼らは、クルージング劇フィナーレの「ほとんど腕を組まんばかりにして山を下りて行く」男性同性愛者と見分けがつかなくなっている。

ここにも「同性愛の感染性」が指摘できるだろう。男性同性愛者のクルージング劇と隣接して描かれることで、あたかも「洋服姿の紳士」と「警察官」の関係に同性愛の欲望が感染したかのように、二つのシーンは接近し、警官と容疑者、捕まえる者と捕まえられる者のホモソーシャリティに潜んでいたエロティシズムが顕在化するのだ。言うなれば、本来は「正常／異常」の境界を規定する役割の「警察官」までもが「一種異様の人種」に巻き込まれてしまうのである。「新東京陰間團」と同様に、『一寸法師』でも「変態性」は拡散している。

一見、同性愛の病理化・再病理化を促すかのような「同性愛の感染性」とは、反対に、このテキストが立脚しているはずの性科学・性欲学における「正常／異常」の境界線の不

確かさを明るみに出し、なし崩しにする。それはすなわち、「正常」なホモソーシャルリティに「異常」なホモセクシュアリティが組み込まれていることの証拠でもあり、紋三の「寒気」が物語っているように、ホモフォビアの所在や由来を解明するうえでもたいへんに示唆的である。第4章で概説したように、1920年代にブームになった性欲学がその後の日本で同性愛を規定する枠組みを形成したことを思い起こせば、『一寸法師』、あるいは、「新東京陰間團」から読み取れる「同性愛の感染性」は、今日の日本で氾濫しているホモフォビアに抵抗するためにも有効な手がかりを提示していると言えるのではないか。

以上、本章では『一寸法師』の冒頭部分を取り上げ、「同性愛の感染性」に着眼して論じてきた。ところで、この作品は東京と大阪の『朝日新聞』の朝刊に連載されたわけだが、新聞小説であるために、表象される男性同性愛は感染力を奇妙なまでに増大させている。『一寸法師』をそれが掲載された『朝日新聞』という枠に置いてみよう。

偶然とはいえ、『一寸法師』の「一種異様の人種」が「洋服紳士」と「遊人風の男」に個別化される連載3日目、1926年12月10日付の『朝日新聞』東京版朝刊には「奇怪を極めた変な殺人事件」の公判を伝える記事が掲載されている。その出だしを引用しよう。なお、この記事は『朝日新聞』の11頁、『一寸法師』は8頁である。

碓氷峠の底知れぬ谷へ同性愛に溺れた子供をつき落とし死体の行方全く不明のまま殺人罪に問れた中澤由之助（二八）にかかる奇怪な事件は去る五月中澤の捕縛当時も世を騒がせたがそれから半年余りの今日東京地方裁判所の公判廷（小林裁判長係り）でも依然として奇怪な幕にとざされたまま小説的な場面を展開している

引用した記事で問題となっているのは、28歳の男性が11歳の少年との同性愛の結果、少年を殺害したという「奇怪」で、「小説的」な事件である。同じ『朝日新聞』の紙面上に掲載されている『一寸法師』の男性同性愛表象でも、「怪奇」や「奇妙」や「変」といった言葉が何度も使用されていた。『一寸法師』という小説空間の男性同性愛は、「小説的」ではあるが、実際に起きた「奇怪を極めた変な殺人事件」と共鳴して、まるで三面記事であるかのように現実空間へと侵入していくのである。すなわち、『一寸法師』の男性同性愛表象は、虚構と現実の境界までも曖昧にするのだ⁶⁸。

初めての新聞小説のオープニングを飾るべく、乱歩はおそらく得意分野の「古臭い怪奇の世界」の拠点浅草を舞台に選び、その中でも特に「異様」で、「奇妙」で、「変」な男性同性愛者のクルージングを、本筋に至る序曲としてテキストに取り入れたのだろう。該当する箇所は、『朝日新聞』ではわずか3日分の連載に過ぎず、『一寸法師』の本筋で男性同性愛者が再び登場することはない。乱歩も、後年、『一寸法師』を執筆した当時を振り返って、「朝日新聞の幹部が、私をある料亭に呼んで、御馳走してくれた」その席上で、小説冒頭の「衆道」のことが「話題にのぼり」、一同で「大いに談論風発したことを思い出している（江戸川1240-241）。しかし、『一寸法師』の男性同性愛表象は乱歩が回顧しているように安全に楽しめるものなのだろうか。

『一寸法師』の冒頭部分では、性科学・性欲学言説から紡ぎ出された男性同性愛のイメ

ージが繰り広げられており、1926年当時、東京大阪合わせて120万部を越えていた『朝日新聞』に掲載され、また、その後に単行本として刊行され、全集にも組み込まれることで、多くの読者のもとへそうしたイメージは届けられたに違いない。男性同性愛者はホモフォビックに見世物化され、「異形のもの」となり、「フリーク化」する。

ところが、『一寸法師』はただ単に性科学・性欲学言説を反復しているだけではない。テキストでホモエロティシズムは拡散している。換言すれば、男性同性愛は感染性を有しているのであり、「正常」であるべき男性の登場人物が「異常」な同性愛へと巻き込まれ、その結果、性科学・性欲学が構築した「正常／異常」の境界線が問い直されることになるのだ。しかも、虚実が混合する新聞メディアにおいて、『一寸法師』の男性同性愛者のクルージング劇は隣接する事件記事とも相互浸透的になっている。つまり、乱歩の回顧的な記述からうかがえる作家・新聞社サイド双方の雰囲気とは裏腹に、『一寸法師』で表象される男性同性愛は、「正常／異常」の境界を侵犯し、男性のホモソーシャルリティを不安定化させるという危険であり、同時に、有益でもある、同性愛の感染力を存分に発揮しているのである⁶⁹。

第6章 同性愛の周縁化とその困難——江戸川乱歩『孤島の鬼』

1. 男性同性愛表象と「子供であること／ないこと」——『孤島の鬼』（1）

『一寸法師』は読者の評判も良く、成功をおさめた。しかし、乱歩はそれを「あまりの愚作」（江戸川1283）と見なし、1927年、『一寸法師』への嫌悪感から1年以上に渡る「休筆」期間に入る。その期間に、先ほども触れた岩田準一との「同性愛文献あさり」が始められるのであった。そして、1928年に『陰獣』で探偵小説文壇に復帰した後、1929年から翌年にかけて月刊誌『朝日』に連載した『孤島の鬼』で乱歩は再び男性同性愛表象に取り組むことになる⁷⁰。

『一寸法師』では紋三はしばしば視点人物になったが、原則として語り手は外部に存在し、浅草公園の「人間百貨店」におけるクルージング劇が描き出された。それに対して、『孤島の鬼』には一人称の語り手が登場し、彼自身は読者の代表として同性愛者にならずに、かつ、他の男性とホモエロティックな関係を結ぼうとする。本章ではこうした語り手「私」の矛盾を軸にして『孤島の鬼』を読む。

『孤島の鬼』は、博文館の雑誌『朝日』の創刊号である1929年1月号から1930年2月号まで連載された。『朝日』は、当時、百万部の売り上げを数えていた講談社の『キング』に対抗する目的で、博文館が1929年に創刊した総合的な「娯楽雑誌」（江戸川1385）である。同時期には平凡社が『平凡』（1928年）、文藝春秋社が『オール読物』（1931年）、新潮社が『日の出』（1932年）といった大衆向けの「娯楽雑誌」を次々と刊行しており、『朝日』もその中の一冊と位置づけることができる。「一家に一冊あれば皆なが満足出来る雑誌」、「誰が見ても、誰が聞いても、誰が読んでも面白くて、しかも感動する（独特の編集法）」という創刊号の宣伝文句からも同誌が『キング』を意識していたことは明らかである。

乱歩の『探偵小説四十年』によれば、博文館の編集長であった森下雨村が、前年に『陰獣』が掲載された『新青年』が「非常によく売れた」（江戸川1383）ことに目を付け、『朝日』創刊に際して、流行作家としての乱歩に白羽の矢を立てたのであった。したがって、作者の乱歩の側にも『朝日』の創刊を飾るにふさわしいエンターテイメント小説を書こうとする意欲があったと思われる。

まずは、『孤島の鬼』の梗概を確認しよう。物語は「まだ三十にもならぬに、濃い髪の毛が、一本も残らず真白になっている」（江戸川b 11）一人称の「私」⁷¹が語り手になる。「私」は20代であるにもかかわらず老人のような風貌をしている。一方、「私の妻」には「恐ろしく大きな傷の痕」（江戸川b 11）がある。そしてテキストは、二人にこうした外見上の特異性をもたらすことになる、「世人が嘗て想像もしなかつた様な、あの奇怪事」、「私達の経験した人外境」を語る手記の形式を取っている（江戸川b 13）。ここからは、「私」はあくまでも「世人」の代表、すなわち、読者の代表として、人間世界の外の領域である「人外境」

を語ろうとする姿勢が見て取れる。

「私」が物語の冒頭で、「世の探偵小説、怪奇小説という様なものに類似していながら、その実甚だしく風変わりである」（江戸川 b 14）と記すように、『孤島の鬼』は「探偵小説」と「怪奇小説」に大きく二分することが可能である。前半の「探偵小説」の部分は、「私」の恋人の木崎初代と素人探偵の深山木幸吉という「二人の人物の変死事件」（江戸川 b 14）、具体的に言えば、日本家屋を舞台にした密室殺人と、衆人環視のもとでの殺人を中心に展開する。

そこで、「私」は第一の殺人を記述するにあたって、「物語の筋道を失」わせないために、「一人物との間に醸された同性恋愛的な事件までをも、恥を忍んで […] 暴露しなければなるまい」と続け、そのようにして物語に男性同性愛が導入される（江戸川 b 14）。この「一人物」とは、「医科大学」を出て、「ある奇妙な実験に従事している」諸戸道雄のことであり、「私の知る限りに於いて、肉体的にも精神的にも、最も高貴な感じの美青年」と紹介される（江戸川 b 19）。

連載第一回の回想場面では、「私」と諸戸との馴れ初めが綴られる。二人が出会ったのは、事件が発生した時間よりも 8 年前、「私」が 17 歳、諸戸が 23 歳の時であった。当時を振り返って、「私」は次のように述べる。

科学者諸戸道雄は、私に対して、実に数年の長い間、ある不可思議な恋情を抱いていた。そして、私とは云うと、無論その様な恋情を理解することは出来なかったけれど、彼の学殖なり、一種天才的な言動なり、又異様な魅力を持つ容貌なりに、決して不快を感じてはいなかった。それ故彼の行為が、ある程度を越えない限りに於ては、彼の好意を、単なる友人としての好意を、受けるに吝でなかったのである。（江戸川 b 30）

非常に回りくどいやり方で、「私」は諸戸の側の「不可思議な恋情」と「私」の側の「友人としての好意」を分断しようとする。換言すれば、「不可思議な恋情」を諸戸一人に押し付けて、ホモセクシュアリティとホモソーシャリティを分断しようとするのだ。

だが、回顧的に語られる 8 年前の「私」にとっては、そうした区分は曖昧なものになっている。「私」は「子供であった」こと、さらに、学校でも「遊戯に近い感じでは、同じような事柄が行われていた」ことを根拠に、諸戸との交際を「そんなにひどく不快な感じではなかった」と述べる（江戸川 b 31）。具体的には諸戸は「私」を「芝居や活動写真や運動競技」へ連れて行き、「私」に語学を教え、「精神的な庇護」も与えた（江戸川 b 31）。すなわち、学生時代の二人の絆は「衆道」における「念者」と「若衆」、また、乱歩が探偵作家の浜尾四郎経由で古代ギリシアの「ペデラスティ」にも精通していたことを想起すれば（江戸川 n 51）、「エラステース」と「パイディカ」にも近い。

「私」が「子供であること」を強調する点は重要である。ここで、第 3 章で論じたクラブト=エビングを再び参照しよう。『変態性慾心理』で同性愛は「先天的／後天的」に二分され、ジェンダー倒錯によって理解された。しかし、「性慾的発達」が未完成な少年・少女

は「色情的中性」（クラフト=エビング 224）と解釈され、その性的な未決定性ゆえに、少年期・少女期の同性愛は「変態性欲」と接合されつつも、あくまでも一時的なものとして、次のようにそこから一線を画された。

同性色情的行為（相互手淫等）が破瓜期前に現るゝともそは必ずしも顛倒的色情の証とは謂い難し。[…] 破瓜期に於て実際の色情性が発達し、且、決定するものなり。其以前にありては未分化の時なりとす。[…]

破瓜期に至れば、青春の破戒者は自己の真の性を認め、精神的並びに身体的牽引刺戟に依って以て支えらるゝ色情を根拠として、先に犯したる同性色情的行為に関しては羞恥を感じ、不快を覚ゆるに至る。破瓜期後の同性色情行為にして始めて決定的なり。

然れども身体的性慾的発達よりも精神的性的未分化の時期は長く持続するものなり。

（クラフト=エビング 334, 335）

確かに同性愛を引き起こす原因と考えられていた「手淫」には厳格な管理・取り締まりが求められたのだが（クラフト=エビング 229-231）、同性愛の先天性を偏重したクラフト=エビングにおいても、特殊な「気質」の有無とは別に、「破瓜期」以前の少年・少女の同性愛は「一般化」の見解でとらえられているのだ⁷²。作家もこうした見解を利用し得ただろう。それはすなわち、ホモエロティズムを少年期・少女期に封印し、無害化したうえで表象するという戦略である。乱歩も『孤島の鬼』でそれを実践している。

『孤島の鬼』の回想場面では、手を取る、肩を組むといった接触的行為が重視され、性器に還元されないホモエロティズムが追求されている。「私」は、「彼〔諸戸〕のなすがままに委せ」ていたのだが、ただ受身であったわけではない。「無心を装って、併しやや胸をときめかしながら」とエロティズムには十分に意識的なのである（江戸川 b 31）。要するに、性的に曖昧で、「未分化」と見なされた「子供であること」を逆手にとって、子供の「遊戯」を装い、濃厚なホモエロティズムが展開されているのだ。

なお、これは乱歩が 1926 年に発表したエッセイ「乱歩打明け話」における「同性愛のまねごと」と同じ構図である。15 歳の「僕」は「なかなか色っぽ」（江戸川 i 24）い美少年であり、「年輩も背恰好も僕ぐらいで、やっぱり相当有名な美少年」（江戸川 i 28）と手を握り合うことで生じるエロティックな「熱」や「震え」（江戸川 i 29）を感じている。「僕」は、「こちらから握るよりも、先方から握って欲しい」（江戸川 i 29）と受身のポジションを強調しながらも、エロティズムをしっかりと堪能している。こうした触覚的なホモエロティズムの探求には、「次世代再生産」のための生殖を特権化する、性器中心主義への抵抗が指摘できる。ただし、それはまた男女間の性行為を蔑み、とりわけ女性を「汚いもの」（江戸川 i 30）とミソジニスティックに忌避するものでもある。この問題については後ほどまた触れよう。

しかしその一方で、「破瓜期後の同性色情行為にして始めて決定的なり」というクラフト=エビングの一節が示すように、少年期・少女期の同性愛の許容は、その時期を越えた同性愛を「変態性欲」と周縁化するものでもあった。回想場面から事件が発生した時間に戻ると、「私」は「その後も彼の異様な恋情を棄てなかったばかりか、それは月日がたつに従って、愈々濃かに、愈々深くなりまさるかと思われた」、「それが私の二十五歳の当時までも

続いていたというのは、余りにも理解し難き彼の心持ではなかったか」（江戸川 b 34）と、今度はもはや「子供でないこと」を根拠にして、諸戸の欲望を異端視する。

このようにして、「私」が「子供であること」を援用し、ホモエロティズムを無害化しつつ、享受しているとすれば、一方の諸戸道雄は「私」とは対照的に表象される。テキストには諸戸の言葉も織り込まれている。本論文では回想場面で、諸戸が「私」に「君は美しい」（江戸川 b 32）と言った後の彼の言葉に目を向けたい。諸戸は「私」に向けて、次のように語る。

僕を軽蔑しないで呉れ給え。君は浅間しいと思うだろうね。僕は人種が違っているのだ。凡ての意味で異人種なのだ。（江戸川 b 33）

第4章で概観した、性欲学系雑誌に手紙を寄せた JO 生や YK 生と同じように、「医学生」（江戸川 b 19）の諸戸も自分自身の同性愛の欲望を「局所化」し、「人種化」して解釈しており、「私」とは「異人種」とであると断言する。つまり、諸戸は、「同性愛者」という周縁化されたアイデンティティを内面化したキャラクターとして設定されているのだ。

だが、諸戸と「私」は「異人種」なのだろうか。引用した一節の直前の箇所で、「君は美しい」と言われた「私」は「女性に化し」、「一層魅力を加えた、この美貌の青年 [が] 私の夫であるという、異様な観念」（江戸川 b 32-33）に襲われている。「非常に妙なことを云うようだけれど」という前置きはあるものの、ここでは諸戸ではなく、「私」のほうがあたかも“*Androgynie*”の状態にあるかのように女性化＝トランスしてしまうのである。

しかも、「私」は「私のなめらかな頬に少年のおもかげが失せなかった」点や、「私の筋肉が世の大人達のように発達せず、婦女子の如く艶かであった」点を誇っている（江戸川 b 35）。それは「若衆」や「パイディカ」の美であるのだが、男性性の欠如に他ならず、“*Angrogynie*”にも近いものである。要は、諸戸が「凡ての意味で異人種なのだ」と断言するほどには、「私」と諸戸との間の「人種」の境界線は明瞭ではないことがテキストからは読み取れるのだ。

2. 探偵小説と男性同性愛の危険な関係——『孤島の鬼』（2）

連載二回目になると、「私」は「これは甚だ奇妙な事柄である。一人の男がもう一人の男を愛する余り、その男の恋人を奪おうとする。普通の人には想像も出来ない様な事柄である」（江戸川 b 35）と述べ、同性に対する欲望の、特に成人男性間のその「奇妙」さ、「異様」さを根拠に、諸戸を初代殺害の犯人とする読みを読者に喚起し、次のように矢継ぎ早に問いかける。

諸戸の様な、謂わば変質者を、常軌で律することは出来ぬのだ。彼は異性に恋し得ない男ではなかったか。彼は同性の愛の為に、その恋人を奪おうと企てた疑いさえあるではないか。あの突然の求婚運動がどんなに烈しいものであったか。彼の私に対する

求愛がどんなに狂おしいものであったか。それを思い合わせると、初代に対する求婚に失敗した彼が、私から彼女を奪う為に、綿密に計画された、発見の恐れのない殺人罪を敢て犯さなかったと、断言出来るであろうか。(江戸川 b 75)

「同性の愛」ゆえに諸戸は「常軌で律すること」のできない「変質者」と名づけられ、殺人の嫌疑がかけられるのである。性欲学の文献でも示唆されていたが、『孤島の鬼』という探偵小説に組み込まれることで、男性同性愛は明確に犯罪化されるのだ。『青年』とは異なり、乱歩の作品では「同性の愛」のもとでも同性愛が精神化されるわけではない。

なお、これまでの章でも論じたように、「一般読者」を対象とした性欲学のブームを経た1930年頃には、同性愛言説は「エロ・グロ・ナンセンス」の風潮の下で、アカデミズムとは一線を画した大衆向けのメディアに取り込まれ、男性同性愛を扱った記事も『犯罪科学』や『犯罪公論』といった「犯罪」を売りにした大衆誌に掲載されるようになっていた。そうした媒体に収録されたのは、同性愛を犯罪化するものばかりではない。たとえば、岩田準一の「本朝男色考」が連載されたのも『犯罪科学』であった。

また、諸戸が初代殺害の犯人に仕立て上げられる過程で、彼の同性への欲望が「異性に恋し得ない」こと、さらには女性嫌悪と解釈される点にも注意しよう。諸戸は、「僕は婦人には何の魅力をも感ずることが出来ないのだ。寧ろ憎悪を感じ、汚くさえ思われる」(江戸川b 35-36)と言い、語り手の「私」も彼を「性来女嫌い」(江戸川b 36)と定義する。そもそも男性同性愛表象とミソジニーの結びつきは強く⁷³、精神医学においても男性同性愛は「婦女恐怖」(クラフト=エビング 337)と規定された。

一方、物語中盤では幼少時に諸戸が母親から性的虐待を受けたことも告げられ、それが女性嫌悪と「倒錯的な愛情」(江戸川b 193)の原因になったのではないかと「科学者」の諸戸自身が解説する。アングルスが指摘するように、そこにはフロイトの同性愛解釈との共通性も見出せる(Angles 216)。フロイトは、「多くの性対象倒錯者においては、幼少の頃に影響を受けた性的な体験が存在しており」(フロイト 35)、「正常な性対象との間で苦痛にみちた経験をすると、性対象倒錯の方にリビドーが進んでいく」(フロイト 30)と説明している⁷⁴。

諸戸はこのようにあからさまにミソジニスティックなキャラクターとして創造されている。しかし、語り手の「私」も決してミソジニーと無縁なわけではない。たとえば、初代との性行為の後で、「私」は「少年の夢の様に、美しいばかりのものではなくなっていた」(江戸川 b 27)と述べるのだが、こうした言葉の背後には、崇高なる「少年の夢」を穢し、世俗化するものとしての男女間の性行為、特に女性の存在が見て取れる。性器に限定されない、「少年」による触覚的なホモエロティシズムの探求が誘発したのと同種のミソジニーがここでも露見されるのだ。同性愛者ではないという設定の「私」は、ホモエロティシズムだけではなく、ミソジニーまでも諸戸一人に押し付けようとしているのではないか。

男性同性愛者をことさらに「女嫌い」と表象するやり方に対して、キース・ヴィンセントは、『孤島の鬼』とほぼ同時期の浜尾四郎の『悪魔の弟子』(1929年)にも触れながら、「[男性] 異性愛者の女性蔑視が男性同性愛者への謂れのない形容に転嫁されている」(ヴ

インセント・風間・河口 139) と論じる。男性同性愛者のミソジニーが本当に「謂れのない」ものであるかどうかは慎重に検討していく必要があるものの、『孤島の鬼』のそれも含めて、男性同性愛表象に付随するミソジニーを分析する際には、ヴィンセントの見解は大きな手がかりになるだろう。

以上、物語の前半で「私」は同性愛の欲望を引き合いに出し、諸戸に嫌疑をかけるのだが、結局、彼は殺人犯ではなく、第二の被害者深山木幸吉を引き継ぐ名探偵であることが判明する。「性欲倒錯者」、「無気味な解剖学者」、「甚だ風変りな人物」(江戸川 b 106) から名探偵へと諸戸は役割を転換するのだ。このように最初は語り手が犯人と思っていた、すなわち、読者にそう思わせていた奇妙な人物が実は名探偵であったという展開は探偵小説では決して珍しいものではない。明智小五郎からしてそうであった。明智が初出する『D坂の殺人事件』(1925年)でも、語り手の「私」は、「如何にも変り者」(江戸川 d 180)の明智を殺人犯として推理するのだが、明智自身によってそれは完全に覆される。

『孤島の鬼』でも諸戸の役割の転換を機に、諸戸と「私」は、エドガー・アラン・ポオのデュパンとその友人のように、あるいは、コナン・ドイルのホームズとワトソンのように、ペアになって事件の解決を目指す。『孤島の鬼』や『D坂の殺人事件』にも該当するのだが、こうした「名探偵と凡庸なる友人」という組み合わせのもと、後者が語り手の役割を果たすのは探偵小説の定石である。というのも、「凡庸なる友人」の目線を持ち出すことで、事件に臨場感を与え、かつ、読者と名探偵との謎解きゲームをよりフェアなものにできるからである(内田 9-10)。

そのため、探偵小説では「名探偵と凡庸なる友人」は非常に密着した関係を構成する。デュパンとその友人も、ホームズとワトソンも、パリやロンドンといった大都市で、あたかも一体化するかのように共同生活をしている。特に、デュパンと友人は、まるで「狂人」のように「完全に二人だけの世界に生きていた」という(ポオ 83, 84)。しかも、彼らがみな独身者で、女性を排除した生活を送っている点も見逃せない(Angles 212)。性科学・性欲学の文献では「独身者」は「変態性欲者」、とりわけ、同性愛者と結びつけられて解釈された。たとえば、『変態性欲論』では、「独身者は本能の厭迫より、不自然なる性欲に向って、突進する傾きある」と論じられ、「独身と晩婚とは、同性間性欲と密接の関係あり」と説明されている(羽太・澤田 337)。

つまり、探偵小説はポオやドイルといったその創始から男性間のホモエロティシズムを内包していたと言えるのではないか。それゆえに、探偵小説に男性同性愛を暗示的に書き込むのは容易いが、それを明示することは「名探偵と凡庸なる友人」のペアを容易くエロス化するため、困難に陥ってしまうのである。

したがって、「名探偵と凡庸なる友人」となった諸戸と「私」の絆も不安定なものになる。「私」は再び回りくどいやり口で諸戸との関係を語り、そこではまたしても「子供であること」が援用される。二人の行動は「小学生の時分によくやった探偵遊戯」、「子供らしい遊戯」などに重ね合わされ、諸戸も「秘密好きな変り者の少年」になる(江戸川 b 138)。「私」は諸戸との「探偵遊戯」を次のように記す。

若い私達の心の片隅には、確かに秘密を喜び、冒険を楽しむ気持があったのだ。それ

に、諸戸と私との間柄は、単に友達という言葉では云い表わせない種類のものであった。諸戸は私に対して不思議な恋愛を感じていたし、私の方でも、無論その気持を本当には理解出来なかったけれど、頭丈けでは分っていた。そして、それが普通の場合の様に、ひどくいやな感じではなかった。彼と相對していると、彼か私かどちらかが、異性でもある様な、一種甘ったるい匂を感じた。ひよっとすると、その匂が、私達二人の探偵事務を一層愉快にしたのかも知れないのである。(江戸川 b 138-139)

引用した一節では男同士の「友情」と「恋愛」の分断と連続性が同時に示されているが、「私」は「私に対して不思議な恋愛を感じてい」る諸戸との絆に「一種甘ったるい匂」を感受し、そういったホモエロティシズムを「探偵事務」の原動力と見なしている。言い換えれば、「私」は、諸戸の同性愛の欲望にもかかわらず彼と「名探偵と凡庸なる友人」という関係を結んだのではなく、同性愛の欲望ゆえにその関係を維持しているのである。なお、ここでも同性愛者ではないという設定の「私」が、諸戸を前にしてトランスするイメージを繰り返している。

以降、『孤島の鬼』は探偵小説から怪奇小説・冒険小説へと推移していく。「私」と諸戸の「名探偵と凡庸なる友人」を軸に物語は進むのだが、「私」はまるで読者に諸戸の同性愛の欲望を忘れさせないかのように、連載の各回に渡って、それに触れている(Angles 217)。たとえば、連載第九回では「その友達[諸戸]は私に親友以上の愛着と好意をよせている、この私の立場も実に異様なものであった」(江戸川 b 201)、連載第十一回では「私に対する不倫なる愛情」、「諸戸の不思議な熱情は、私には到底理解出来なかった」(江戸川 b 241)、連載第十二回では「仮令同性にもしろ、それ程私のことを思い続けている彼」(江戸川 b 264)などと言及される。そして連載第十三回に至って、このテキストの男性同性愛表象の二重性が前景化されることになるのだが、その場面を読む前に、物語に登場するもう一組の「名探偵と凡庸なる友人」のペアについても概説しよう。

諸戸と「私」のペアの前でかすんでしまうが、素人探偵で、第二の犠牲者となる深山木幸吉と「私」も「名探偵と凡庸なる友人」として、物語前半では行動する。深山木は、「私」の40歳を越えた「風変りな友達」(江戸川 b 57)である。彼は「独り者」だが、「私」は「諸戸の様に女嫌いという訳ではな」(江戸川 b 58)いと補足し、諸戸と深山木を引き離そうとする。だが、この二人は類似したキャラクターになっており、深山木も「私の容貌に一種の興味を持つ」(江戸川 b 58)と推測され、初代の家の近くのカフェで引き合わされた深山木と諸戸はすでに通じ合っているような「意味ありげな挨拶」(江戸川 b 67)まで交わす。それは『一寸法師』の浅草公園のクルージングにおける男性同性愛者たちの「意味ありげ」(江戸川 a 500)な行動をも想起させるものである。

なお、クラフト=エビングが「ウールニングの相互の認識能力は一種奇なりと謂わざるべからず」(クラフト=エビング 337)と解説するように、同性愛者の相互認知は精神医学の文献にも明記されている問題であった。本論文の終章で検討するが、プルーストや三島の作品にもそうした相互認知は取り入れられている。

ところで、初代が殺されたことを告げた「私」はこの年長の友人に甘えるのだが、連載

第一回の回想場面と同様に、「私」は彼の胸で「子供」になり、深山木との接触から「不思議に甘い感触」を受け取り、それが彼を刺激している点も自覚している（江戸川 b 61）。この段階では、諸戸は「私」によって殺人犯に仕立て上げられているため、彼とホモエロティックな関係を結ぶことができない。それゆえに、橋本治が指摘するように、深山木が諸戸の代役として持ち出されているとも解釈できる（橋本 57）。いずれにしても、探偵小説に書き込むのならば、男性同性愛者として創造される諸戸を相手にするよりも、性的に曖昧な深山木との関係のほうが安全であり、かつ、物語を展開させるうえでも容易いものである。

作者の乱歩も探偵小説における明示的な男性同性愛表象の困難には自覚的であったようだ。1932年に平凡社が刊行した『江戸川乱歩全集』の最終巻のために書き下ろされた「探偵小説十年」では、『孤島の鬼』の男性同性愛が探偵小説の「筋を運ぶ上の邪魔物にさえなった」（江戸川 1385）と述べられている。

3. ホモエロティックで、ホモフォビックな「人外境」——『孤島の鬼』（3）

物語冒頭では、「二人の人物の変死事件」の背景に「もっともっと驚嘆すべく、戦慄すべき大規模な邪悪、未だ嘗て何人も想像しなかった罪業」（江戸川 b 14）が潜んでいることが示唆された。素人探偵の深山木幸吉が残した、「人外境便り」（江戸川 b 146）と称される「一種異様な告白文」（江戸川 b 147）をきっかけに、そうした「邪悪」や「罪業」が物語の表舞台に出てくる。「人外境便り」の書き手は、「私には二つの、違った形の顔があって、一つの方は美しく、一つの方は汚い」（江戸川 b 153）と自己の身体を表現する。それは「見世物に売る」（江戸川 b 305）ために、「美しい」女性秀ちゃんと「汚い」男性吉ちゃんを癒着させた人工的な「シャム双生児」であり、「告白文」を綴っていたのは秀ちゃんのほうであった。

「秀ちゃん吉ちゃん」は男女の「シャム双生児」であるため、プラトンの『饗宴』で登場人物のアリストファネスが語る「両性具有」をも思い起こさせる（プラトン 81, Angles 214）。レスリー・フィードラーが述べるように、男女の「シャム双生児」は現実にはあり得ないものであり、だからこそ昔からセクシュアルな空想の格好の対象になっていた（フィードラー 244）。「人外境便り」にも読者の好奇心を満たすべく、「秀ちゃん吉ちゃん」の性的側面が散りばめられている。

この「秀ちゃん吉ちゃん」を作ったのは、紀伊半島沖の孤島岩屋島で「不具者」（江戸川 b 301）を製造し、「鬼のユートピア」（江戸川 b 303）の建設を企む諸戸の父親の丈五郎であり、彼が一連の殺人事件の首謀者であった。初代が持っていた「系図帳」（江戸川 b 28）に記された暗号を解読し、岩屋島の財宝を発掘することが彼の狙いだったのである。その企みに気づいた諸戸は、あたかも「衆道」の「念者」と「若衆」が「義を結ぶ」といった感じで（江戸川 b 202）、「私」の手を握り、手に手を取って孤島へと乗り込む。そして、丈五郎を幽閉し、「秀ちゃん吉ちゃん」を含む諸戸屋敷の「不具者」を解放し、島の財宝を見つけるため、二人は孤島の地底へ潜入する。ところが、脱出した丈五郎に命綱の縄を切断され、彼らは迫り来る海水に脅えることになる。本節ではこれに続く地底の場面を取り

上げよう。

「暗中の水泳」（江戸川 **b 288**）という絶望的なシチュエーションで、「私」は諸戸の「強烈な意志」（江戸川 **b 279**）に励まされ、辛うじて生き延びる。「私」は次のように記す。

諸戸は私の腹の所に手をまわして、しっかり抱いていて呉れた。真の闇で、二三寸しか隔っていない相手の顔も見えなただけれど、規則正しく強い呼吸が聞え、その暖かいいきが頬に当たった。水にしめった洋服を通して、彼のひきしまった筋肉が暖く私を抱擁しているのが感じられた。諸戸の体臭が、それは決していやな感じのものではなかったが、私の身近かに漂っていた。それらの凡てが、闇の中の私を力強くした。諸戸のお蔭で私は立っていることが出来た。若し彼がいなかったら私はとっくの昔に水におぼれてしまったかも知れないのだ。（江戸川 **b 290-291**）

島の地底は「真の闇」であるため、視覚の力が減退し、聴覚・嗅覚・触覚が前景化する。「規則正しく強い呼吸」や「暖かいいき」、「ひきしまった筋肉」、「決していやな感じのものではなかった」という「体臭」などの諸戸の身体的な諸要素を通して、「私」へと生きる力が伝授される。諸戸と「私」の関係は、学生時代にそうであったように、再び「念者」と「若衆」、あるいは、「エラステース」と「パイディカ」といった様相を呈しているのである。

そうしたなかで、諸戸は地上の「光」の世界と地底の「闇の世界」を対立させ、後者を「人類が絶滅した […] 別の世界」と名指す（江戸川 **b 298-299**）。それは「人外境」に他ならない。しかしそこはまた「法律も、道徳も、習慣も」、「羞恥も、礼儀も、虚飾も、猜疑も」越えたある種のユートピア的な世界でもある（江戸川 **b 298-299**）。「私」はこれまで「子供であること」を活用し、ホモエロティシズムを無害化して享受していたわけだが、「二人の頬と頬とが擦れ合」（江戸川 **b 299**）い、物語の中でもっともホモエロティシズムが高まるこの場面では、「子供であること」が局限に達して、彼らは洞窟という胎内に回帰した「二人切りの赤坊」（江戸川 **b 299**）になっている。「羞恥」がない「二人切り」の世界という点では、田口律男が述べるように、「秀ちゃん吉ちゃん」の「人外境」とも重なる（田口 113）。

なるほど、諸戸と「私」のペアは「秀ちゃん吉ちゃん」に接近する。障害表象とクィア批評の結節点を探るロバート・マクルアーは、障害を持った人々が、アセクシュアル、もしくは、過剰にセクシュアルな存在としてしばしばクィアに見られるのに対して、クィアな人々はどこか障害があるかのように見なされ、両者が一つになって、周縁化されることで、「健常で、異性愛の物語」が強化されると指摘する（McRuer 94）。

しかしより重要なのは、健常者や異性愛者は「障害者ではない」、「同性愛者ではない」と否定し続ける必要が生じるため、「健常で、異性愛の物語」とは、実際にはつねに崩壊の危機に瀕しているとマクルアーが論じる点である（McRuer 97）。「世人」＝読者の代表として、「人外境」を語ろうとする『孤島の鬼』の「私」が最終的に目指すのも、「健常で、異性愛の物語」に違いない。だがそれは実現するのだろうか。ここではひとまず問題を提起するにとどめる。

ところで、乱歩は大人向けの作品を子供向けにアレンジし直して発表したことで知られている。『孤島の鬼』の「暗中の水泳」も「少年探偵団シリーズ」第四弾の『大金塊』（1940年）で用いられている。

『大金塊』の名探偵明智小五郎は「古代ギリシャの勇士のような頭」（江戸川 h 554）をしており、小林芳雄少年は相変わらず「林檎のようにつやつやした顔」（江戸川 h 580）を見せている。彼ら二人と小林よりも年下の宮瀬不二夫という少年、不二夫の父親の四人が三重県沖の岩屋島、通称「鬼ヶ島」（江戸川 h 645）へと乗り込み、島の洞窟で宝探しが敢行される。ところが、二少年は大人とはぐれてしまい、孤島の洞窟で迷うことになる。迫りくる海水に脅える彼らの様子は次のように描かれる。

「それじゃ、なんだろう。ア、だんだんひどくなって来る。僕こわい！」
不二夫君は、思わず小林少年にしがみつきました。[…]
二人は岩の上に立って、いつの間にかしっかき合っていました。あまりのおそろしさに、物をいうどころではありません。ただ両手に力をこめて、お互いの体を強く強く突きしめて、生きた心地もなく立ちつくすばかりでした。（江戸川 h 677, 678）

『大金塊』の小林少年と不二夫が『孤島の鬼』の諸戸と「私」に対応しているのは明らかである。『孤島の鬼』で「子供であること」が引き合いに出され、正当化された男性同性愛が、『大金塊』では小林、不二夫という子供のキャラクターの間で、存分に繰り広げられているのである。ホモエロティシズムの少年期への封印という観点から、『大金塊』のみならず、乱歩の「少年探偵団シリーズ」は読み直される必要があるだろう⁷⁵。

なお、いかにも冒険小説的なこの一節を乱歩が子供向けの作品にアレンジするのはもったいなことである。というのも、アングルも指摘していることだが、作中で諸戸や「私」がその一場面に言及しているように、アンデルセンの『即興詩人』が『孤島の鬼』の「暗中の水泳」のプレテクストになっていると思われるからである（Angles 220-221）。乱歩は、「鷗外の名訳」（江戸川 b 278）を通して、『即興詩人』のアントニオとフェデリコの間に漂うホモエロティシズムを読み取り、『孤島の鬼』では「子供子供した」（江戸川 b 38）成人男性二人へとそれを適用し、さらにまた『大金塊』で実際の子供に再利用しているのではないか。『即興詩人』のホモエロティシズムを軸にして、男性同性愛表象における鷗外と乱歩の繋がりも見えてくる。

さて、諸戸と「私」は「赤坊」になり、彼らの間のホモエロティシズムは頂点に達したわけだが、「私」が「秀ちゃん吉ちゃん」とは人工的な「シヤム双生児」であるかどうか尋ねると、「私」と諸戸の「二人切り赤坊」の世界に秀ちゃんという女性が入り込むことになり、二人の関係は急変する。「私」は、あたかも直前までのホモエロティックな接触を帳消しにするかのように、急激にホモフォビアを持ち出し、諸戸の求愛を「狂乱の体」、「余りのいまわしさ」と述べ、「誰でもそうであろうが、私は恋愛の対象として、若き女性以外のものを考えると、ゾッと総毛立つ様な、何とも云えぬ嫌悪を感じた」と続ける（江戸川 b 306）。「私」は「世人」として、男同士の「友情」と「恋愛」を分断しようと試みるのだ。

しかし、「私」自身が諸戸の同性愛の欲望を「探偵遊戯」の原動力ととらえ、それを意識

しつつ、「暗中の水泳」で触覚的なホモエロティシズムを感受していた以上、「私」にとって男同士の「友情」と「恋愛」の間に明確な線引きはできない。高原英理が論じるように、『孤島の鬼』の「私」には「自分でもその実態がよく把握されていない『正常』へのこだわり」（高原 100）があり、それは「誰でもそうであろうが」という漠然とした前置きにも表れている。

以降、「私」は「世人」になるために、諸戸を「異様」なものと異端視する。「私」が言うところの「生地獄」（江戸川 b 304）が繰り広げられるのだ。視覚の効かない「闇の世界」で、諸戸は「蛇」に変わり、次のように描写される。

ハッと気がつくと、蛇は既に私に近づいていた。彼は一体闇の中で私の姿が見えるのであろうか。それとも五感の外の感覚を持っていたのであろうか。驚いて逃げようとする私の足は、いつか彼の臍の様な手に掴まれていた。

私ははずみを食って岩の上に横ざまに倒れた。蛇はヌラヌラと私の身体に這い上って来た。私は、このえたいの知れぬけだものが諸戸なのかしらと疑った。それは最早や人間と云うよりも不気味な獣類でしかなかった。

私は恐怖の為にうめいた。

死の恐怖とは別の、だがそれよりも、もっともっといやな、何とも云えぬ恐ろしさであった。

人間の心の奥底に隠れている、ゾッとする程不気味なものが今や私の前に、その海坊主みたいな、奇怪な姿を現わしているのだ。

地獄絵だ。闇と死と獣性の生地獄だ。

私はいつかうめく力を失っていた。声を出すのが恐ろしかったのだ。

火の様に燃えた頬が、私の恐怖に汗ばんだ頬の上に重なった。ハッハッと云う犬の様な呼吸、一種異様の体臭、そして、ヌメヌメと滑かな、熱い粘膜が、私の唇を探して、蛭の様に、顔中を這い廻った。

諸戸道雄は今はこの世にいない人である。だが、私は余りに死者を恥しめることを恐れる。もうこんなことを、長々と書くのは止そう。（江戸川 b 307-308）

「暗中の水泳」の中で、「私」が生きる力を受けた諸戸の「規則正しく強い呼吸」や「暖かいいき」、「決していやな感じのものではなかった」という「体臭」、「ひきしまった筋肉」といった望ましい肉体的な諸要素がすべて反転し、「私」の命を奪うかもしれない「ハッハッと云う犬の様な呼吸」、「一種異様の体臭」、「ヌメヌメと滑かな、熱い粘膜」へと変貌する。特に、「ヌラヌラ」、「ヌメヌメ」などと触覚的なおぞましが強調されていることに注目しよう。物語冒頭で「最も高貴な感じの美青年」と紹介された諸戸は、「えたいの知れぬけだもの」に、「海坊主」に、「蛭」に軟化し、獣化するのだ。換言すれば、視覚的には「美青年」の諸戸が触覚的に「フリーク」になるのである。

「私」は諸戸とのそうした「ヌメヌメ」、「ヌラヌラ」とした接触の中で、「死の恐怖とは別の、だがそれよりも、もっともっといやな、何とも云えぬ恐ろしさ」に襲われる。一言

で言えば、「私」が最大の恐怖を受けるのがこの場面なのである。そうすると、「私」を白髪にした「孤島の鬼」は何かという疑問が生じる。「闇の世界」の出来事であるため、それを特定することはできない。だが、「死の恐怖とは別の、だがそれよりも、もっともつといやな、何とも云えぬ恐ろしさ」を「私」にもたらしめているのは諸戸である。すでに彼自身の口から「悪魔 [= 丈五郎] の子」(江戸川 b 303) であることは表明されていたが、ここでは彼が「孤島の鬼」になってしまうのではないか。表の「孤島の鬼」が丈五郎だとすれば、裏のそれは諸戸である。これまで『孤島の鬼』においては脱線に過ぎなかったはずの男性同性愛が本筋と合流する。「鬼」は諸戸なのだろうか。

もう一度問い直そう。「私」を白髪に変えるほどの恐怖はどこからやってくるのだろうか。「私」の言葉によれば、「人間の心の奥底に隠れている、ゾッとする程不気味なもの」に由来している。それは同性愛者の諸戸によって与えられるのだろうか。「闇の世界」で諸戸の姿は見えず、触覚や嗅覚に基づいて彼を「えたいの知れぬけだもの」と思い描いているのは「私」に他ならない。そうである以上、諸戸の欲望ではなく、「世人」になるために諸戸一人に押し付けようとした「私」のホモエロティックな欲望が、「私」の「心の奥底」から浮上して、「ゾッとする程不気味なもの」へと化しているのではないか。橋本も「私」の中の「ある部分」が外部の何者か、すなわち、諸戸を「不気味な獣類」に見立てたという読みを提示している(橋本 59)。要するに、「私」は自分自身に内在する、ホモフォビックでホモエロティックな欲望のために、白髪の「鬼」になったのではないだろうか。「鬼」は「私」の中に存在するのではないか。

実際、地上に戻ると、「私」の頭髪は「全く色素を失って、八十歳の老人の様に真白に変わって」(江戸川 b 323) いる。「少年のおもかげ」を残し、「婦女子」であるかのような自己の美を誇っていた「私」が一気に老化し、物語の冒頭で「私」自身がほのめかしたように、「白髪鬼」(江戸川 b 12) になってしまうのだ。

なお、「暗中の水泳」の結果、「私」ほどではないにせよ、諸戸も憔悴し、「垢づいた鉛色の皮膚、おどろに乱れた頭髪、目は窪み、頬骨の突出た骸骨の様な顔」(江戸川 b 323) に変化している。したがって、孤島の地下で展開されるホモエロティックで、ホモフォビックな「人外境」とは、「美青年」同士の同性愛というより、老人男性の間のそれに近い。『孤島の鬼』の男性同性愛はただ単に「フリーク化」するだけではなく、「美青年」の同性愛から、『一寸法師』のクルージングや「新東京陰間團」の「お爺さんのかげま」とも共通する、「エロ・グロ・ナンセンス」の「グロ」にふさわしい中高年男性の同性愛へと変貌するのである。

4. 「大団円」に背く「異様」なる残滓——『孤島の鬼』(4)

連載第十三回で「生地獄」が中断された後は、性急な「大団円」が待っている⁷⁶。最終回である連載第十四回になると、島の地底で遭遇した徳さんの口から、諸戸が丈五郎の実子ではないこと、秀ちゃんが死んだ初代の妹であることが打ち明けられる。彼の助けで地底の迷路から抜け出すと、ちょうどそこに刑事が居合わせ、財宝を前に発狂した丈五郎は

逮捕され、「大団円」となる。

一方、「私」は外科医の諸戸のメスで「野蛮人の吉ちゃん」を切除し、「ちゃんと〔秀ちゃんの〕髪を結び、お化粧をし、美しい縮緬の着物」を彼女に着せ、「東京弁」を習得させて、「秀ちゃん吉ちゃん」という「フリーク」から「一人前」の緑という女性を作り上げ、彼女と結婚する（江戸川b 329）。こうした箇所にも「私」の漠然とした「「正常」へのこだわり」は見取れるだろう。そして、彼女を通じて岩屋島の財宝を受け継ぎ、それを元手に「医術の限りを尽して片輪者を正常な人間に造り変える」ための「整形外科の病院」を建て（江戸川b 329）、「私」は「生地獄」を忘れたかのように、諸戸に「私の外科病院の院長になってもらう積りで、楽しんでい」（江戸川b 330）る⁷⁷。

ところが、「私」にとって非常に好都合なこの「大団円」に諸戸の姿は見えない。「生地獄」の最後で「諸戸道雄は今はこの世にいない人である」と予告されたとおり、彼は生家を訪れた際に、「病を発してあの世の客」（江戸川b 330）になってしまったのだ。「道雄は最後の息を引取る間際まで、父の名も母の名も呼ばず、ただあなた様の御手紙を抱きしめ、あなた様のお名前のみ呼び続け申候」（江戸川b 330）という諸戸の実父からの手紙とともにこの物語は閉じられることになる⁷⁸。

1年2ヶ月の連載の間、読者を飽きさせないために設けられた仇討ちや宝探しといった様々な仕掛けの背後から、男性同性愛というもう一つの主題が顔を見せて物語は終わるわけだが、いずれにしても、「生地獄」を経てもなお諸戸への欲望を拭い去れない「私」が「世人」になるためには、吉ちゃんが秀ちゃんから切除されたように、諸戸を消去しなければならない。換言すれば、自己を「正常」なものにするためには、同性愛者という「異常」なもの、「えたいの知れぬけだもの」を外部に作り出し、それを周縁化しなければならないこと、だがそれだけでは不十分で、最終的にはその「えたいの知れぬけだもの」を抹消するしかないという暴力的な仕組みをテキストは露呈するのだ。しかし、それでも疑問は残る。「私」は本当に「世人」になったのだろうか。

ここで先ほど言及したマクラーの指摘を想起しよう。『孤島の鬼』でも諸戸というキャラクターにおいて同性愛とある種の「フリーク性」は融合している。「私」は彼を消し去ることで、「健全で、異性愛の物語」を完成させようとする。ところが、その物語は決して安定したものではなく、諸戸が取り除かれても、「私」のホモフォビックで、ホモエロティックな欲望そのものがテキストから消滅するわけではない。何よりも「孤島の鬼」というこの手記を綴ろうとする動機になった「私」の「異様」な外見、すなわち、白髪は、孤島の地底の「生地獄」で、「私」の内部から生じた同性愛の欲望が表面化した印ではなかったか。物語の結末から冒頭を読み返せば、そこで強調されている「私」の白髪とは、「私」が「人外境」の一員であるという証拠になる。

「私」が「世人」であることに抵触する要素は白髪だけではない。物語のクライマックスでは緑の傷口は完治したと述べられるが、オープニングでは、緑の身体には「腰の左側の腿の上部の所」に「むごたらしい赤あざ」がしっかりと残存しており（江戸川b 11）、「それは丁度そこからもう一本足が生えていて、それを切り取った」（江戸川b 12）かのように記されている。要は、緑も「秀ちゃん吉ちゃん」であったという「フリーク性」を身体

に刻印したままなのである。彼女の「フリーク性」とは一種の「両性具有」であった。緑の「赤あざ」は、まるでペニスを切断したかのようにあり、実際に、そこには吉ちゃんという男性＝ペニスが存在していた。つまり、テキストの冒頭では、「私」が結婚した女性がかつてペニスを持っていたということが浮き彫りになっているのである。このように、テキストにおいては、「フリーク性」と「クィアネス」は結託し、「私」が目指す「健常で、異性愛の物語」を崩壊させかねないノイズを発生させているのだ。

『探偵小説四十年』からも読み取れたように、作者の乱歩は、『孤島の鬼』を『キング』に対抗した「娯楽雑誌」であるところの『朝日』に見合うエンターテイメント小説にしようと画策していた。そのために、性科学・性欲学の見解に裏付けられた「子供であること／ないこと」が最大限に活用され、ホモエロティックな欲望とホモフォビアを使い分けながら、男性同性愛は表象される。すなわち、物語の前半・中盤では「私」をホモセクシュアルであるとは読み取らせずに、かつ、他の男性とのホモエロティシズムを堪能させ、物語の結末ではホモフォビックな性愛規範に従って、「私」を大衆向けの小説の語り手に適した「世人」に仕立て上げることが目論まれる。だが、そうした「私」の二重性のため、テキストではかえって性愛規範の生成過程の歪みが出るみに出され、さらには、「私」にまとりつく、白髪や緑の「赤あざ」といった「異常」なるものの残滓を通して、性愛規範の限界や不可能性までもが示唆されることになるのである。

乱歩は、『孤島の鬼』の男性同性愛表象を振り返って、「娯楽雑誌にそんなことを書くのは見当違いだと思った」（江戸川 e 385）とも述べている。確かに、このテキストには、「健常で、異性愛の物語」たるべき「大団円」に背く要素が内包されており、そういった意味では「失敗」であったかもしれない（渡辺憲司 156）。しかしながら、乱歩自身の評価は別にして、『孤島の鬼』は「娯楽雑誌」に適合するように書かれた大衆的な作品であるからこそ、結果として、テキストには性愛規範そのものを俎上にのせる批評性が宿ることになったという点は重要視されるべきであるだろう。

以上、前章と本章では、性科学・性欲学において構築された規範を反復し、再生産する乱歩の大衆小説『一寸法師』と『孤島の鬼』に目を向け、それぞれに読解を試みた。男性同性愛者を「一種異様の人種」、「えたいの知れぬけだもの」などと異端視する、乱歩作品のあからさまなホモフォビックな男性同性愛表象それ自体に、ホモフォビアが問い直され、切り崩される糸口は確実に潜んでいるのだ。

第7章 男性同性愛表象の仏日比較——マルセル・プルースト『ソドムとゴモラ』Iと堀辰雄『燃ゆる頬』

本論文ではこれまで、森鷗外と江戸川乱歩の文学作品における男性同性愛表象を、西洋由来の精神医学や性科学・性欲学言説との関連性に注目して分析してきた。本章では前章までの論点を継承しつつ、「科学」言説と「文学」表象のダイレクトな関係ではなく、精神医学言説から紡ぎ出された西洋の文学テキストと、それをプレテキストにした日本文学のテキストの男性同性愛表象を比較検討する。

具体的にはフランスの作家マルセル・プルースト（1871-1922年）の『ソドムとゴモラ』I（1921年）と堀辰雄（1904-1953年）の『燃ゆる頬』（1932年）を取り上げる。『ソドムとゴモラ』Iと読み合わせることで、一見、精神医学とは無縁に見える『燃ゆる頬』にもその痕跡がもたらされていることを顕在化させ、堀のテキストではそれがいかなる効果を有しているのかを考察する。

まずは1920年代の仏文学における男性同性愛のテーマ、及び、プルーストの『ソドムとゴモラ』Iを概説することから始めよう。

1. 1920年代の仏文学における男性同性愛の「流行」、マルセル・プルーストの『ソドムとゴモラ』I

1926年、フランスの雑誌『マルジュ』の3月号、及び、4月号で、「文学における同性愛」という特集が生まれ、ラシルドやフランソワ・モーリヤックなど同時代の作家・批評家に、次のようなアンケートが行なわれた。なお、『マルジュ』とはユジェーヌ・モンフォールが1903年11月に創刊した文芸雑誌である。モンフォールはアンドレ・ジッドと対立関係にあり、たびたびジッドの同性愛をあてこすっていた（*Marges* 7-9）。

1. 戦後 [第一次世界大戦後]、文学において同性愛への関心が高まってきたことにお気づきですか。[...] そうした関心の高まりの原因はどこにあると思われますか。
2. 小説、詩、演劇の中で、倒錯的な人物が表現されることは、風俗に影響を与えるものだと考えますか。それは芸術に対して有害ですか。
3. もしこうした傾向に反対する必要があるとお思いならば、どのような方法によって行ないますか。また、黙認するべきだとお考えなら、それはどうしてですか。（*Marges* 19-20）⁷⁹

この特集が組まれた背景としては、プルーストの『ソドムとゴモラ』（1921, 1922年）、ジッドの『コリドン』（1924年）といった男性同性愛をあからさまに主題とした文学作品が当時すでに名前の知られた作家によって発表されたことが挙げられる。

次に、上のアンケートに対する作家の回答を概観しよう。ルイ・マルタン＝ショフィエが「同性愛が戦争以来、流行の [à la mode] 文学的テーマになったことは疑いようがない」(Marges 41) と断定しているように、第一の質問に関しては、回答者の多くは男性同性愛が文学上の「流行[mode]」になっていることを認めており(Marges 21, 34, 35, 39, 46, 50)、その原因はプルーストやジッド、彼らが創造したキャラクターのシャルリュスやコリドンに帰せられた⁸⁰。

第二の質問については、風俗への影響と関連づけて、「同性愛の感染性」を懸念する声があがった。そのなかでもジェラルド・バウアーは「文学における同性愛の感染はマルセル・プルーストに端を発しているように思われる」(Marges 23) とプルーストを明確な感染源に据えている。他にも同性愛は、“contagion [伝染]”、“contaminé [伝染した]”、“épidémie [伝染病]”といった感染を示す言葉で表されている(Marges 28, 36, 37)。ただし、芸術にとって有害かどうかについては留保するという見解も存在した(Marges 26)。

同性愛の「流行」への対抗策を問う、第三の質問に対しては、男性同性愛の感染は自然におさまるのではないかという傍観者的な予測(Marges 25, 35, 43, 45) から、シャルル＝アンリ・ヒルシュのように、同性愛者を「精神病院」や「監獄」に隔離するべきだという強硬な意見(Marges 37) までが含まれていた。ヒルシュの見解は、精神医学において先天的な同性愛者は病理化されて「精神病院」へ、後天的な同性愛者は犯罪化されて「監獄」へと振り分けられたことと対応している。

36 人の作家・批評家から寄せられた回答を踏まえて、モンフォールは次のような結論を述べる。

少し前までは、「口には出せない [inavouables]」習慣を行なったと見なされることは、作家の信用を傷つけるものであった。しかし、今日では反対にその悪徳から作家は名声を引き出し、スノップたちは彼を讃え、サロンは彼を歓迎するだろう。彼は現代風＝モダン [moderne] で、「時流に明るい」ということになるのだ。そのようにして、かなりの数の男性同性愛 [pédérastes] 作家、さらにはそのふりをする作家までもが出現するだろう。(Marges 57)⁸¹

多分に皮肉を込めながらも、モンフォールは、1920 年代のフランス文学において男性同性愛が “moderne” なものになったと総括するのである(黒岩 c 286-287, 291)。

なお、引用した一節の「口には出せない」習慣とは、1895 年 4 月に、オスカー・ワイルドが法廷で提唱した「あえてその名を言わぬ愛 [the love that dare not speak its name]」を踏まえていることは間違いないだろう。ワイルドは、古代ギリシアの「ペデラスティ」、ミケランジェロやシェークスピアのソネットなどを引き合いに出して、年長者と若者の同性愛を「あえてその名を言わぬ愛」と呼び、崇高化した。プルーストの『ソドムとゴモラ』I には、ワイルドをほのめかしつつ、ロンドンの「あらゆるサロンでもてなされた」詩人が「罪 [同性愛] の発覚」後には、「あらゆる部屋から [...] 追い出され、頭を休める枕を見出すこともできなくなる」(Proust 17) という一節があるのだが、それとは裏腹に『ソドムとゴモラ』を嚆矢とした男性同性愛の流行の結果、「男性同性愛作家」がサロンで歓迎されるようになったと『マルジュ』誌では述べられるのだ。

また、1927年には、文芸評論家のフランソワ・ポルシェが、ワイルドの言葉をそのまま仏訳し、タイトルとした『あえてその名を言わぬ愛 [L'amour qui n'ose pas dire son nom]』を出版し、古代ギリシアから同時代までの文学における男性同性愛を扱った。ポルシェは、著書の冒頭で、『ソドムとゴモラ』を「非順応者たちのナントの勅令」(Porché 10) にたとえ、その出版を機に、仏文学における「ある種の変化」(Porché 19) が生じたと指摘し、『マルジュ』誌の回答者と同様、プルーストとジッドに多くの紙面を割いた。冷静で、緻密な読解を行なうポルシェであるが、結論に至ると、パリの文壇で男性同性愛が「増殖した」ことを「危険」(Porché 228) ととらえ、急速に語気を荒げる。ポルシェの著作からも男性同性愛の感染への不安が見て取れるのである。

『マルジュ』誌やポルシェの著書で、仏文学における男性同性愛の感染源と見なされたプルーストの『ソドムとゴモラ』は長編小説『失われた時を求めて』(1913-1927年)の第四巻に相当する。本論で取り上げる『ソドムとゴモラ』Iは、その冒頭のプレイヤッド版で約30頁の部分であり、『ゲルマンのほう』のIIとの合本で1921年に出版された。

粗筋をたどれば、ゲルマン公爵夫妻の帰宅を待ちながら、ゲルマンの館の中庭に身を潜める主人公の「私」は、それまではまったくの謎の人物であった、シャルリュス男爵に関する重大な「発見」(Proust 3)をする。それはすなわち、シャルリュスが同性愛者であったという「発見」であり、「私」はシャルリュスと元チョコッキ職人のジュピアンの出会いを覗き見、彼らの性行為を盗み聞きすることで、物語の流れをいったん中断して、一種の男性同性愛論を展開する。ジェンダー倒錯に基づいた同性愛解釈、同性愛の「種族化」とユダヤ人との共通性、同性愛の病理性と古代ギリシアの「ペデラスティ」との相違点、男性同性愛による階級の攪乱、同性愛者自身のホモフォビアと同性愛者同士の結びつきなど、その短さにもかかわらず、『ソドムとゴモラ』Iには男性同性愛にまつわる様々な論点が凝縮されている。

なお、プルーストは1908年の時点で、友人のルイ・ダルビュフラに宛てた手紙の中で、出版は困難であろうと予測しながらも、「男性同性愛 [pédérastie] についてのエッセイ」の構想を打明けている。その構想が結実したものが、『ソドムとゴモラ』Iであると考えられる(Compagnon 1200, 原田 10)。

ところで、『マルジュ』誌では、『ソドムとゴモラ』は『コリドン』と同列に同性愛の感染源として位置づけられていたわけだが、ジッドはプルーストの男性同性愛表象には批判的であった。古代ギリシアの「ペデラスティ」を援用して、男性同性愛を擁護しようとした『コリドン』の序文に付けられた注(1922年)でジッドは次のように述べている。

ある種の書物(特にプルーストの本)のため、人々は以前よりも怖気づくこともなく、最初は知らないふりをしていたもの、あるいは、知らないほうがよかったと思っていたものを冷静に考えるようになった。[...]しかし同時にそれらの書物は人々の見解を迷わせる重大な原因になったのではないかと私は心配している。戦争のしばらく前にすでにドイツでヒルシュフェルト医師が発表し、マルセル・プルーストが与すると思われる、男-女 [l'homme-femme] の理論、[...]性の中段階の理論は間違っ

のではないだろう。しかしそれは同性愛のいくつかのケースしか説明しないし、いくつかのケースにしか関係しない。私はこの本の中でそのようなものに関わるつもりはまったくない。すなわち、倒錯、女性化、ソドミーには。(Gide 8) ⁸²

ジッドは文学領域において男性同性愛が可視化されたきっかけとしてプルーストを認めつつも、それですべての男性同性愛を説明することはできず、自らはプルーストとは異なったやり方で男性同性愛を表象することを宣言している。

ジッドがプルーストの同性愛解釈の本質にあるととらえ、それとは一線を画そうとしたのが、ヒルシュフェルトなど精神医学者の見解である。本章でも『ソドムとゴモラ』Iと『燃ゆる頬』を読み解く際に、精神医学言説、とりわけ、「倒錯」や「女性化」を重要な手がかりにする。いずれにしても、『マルジュ』誌で男性同性愛表象の担い手としてプルーストと一括されたジッドが、精神医学言説をめぐって、プルーストの男性同性愛表象に反論するものとして自身の『コリドン』を提示しようとしていた点には注意したい(黒岩 c 277-282)。

2. 堀辰雄の『燃ゆる頬』、及び、「スクール・ボーイたちの同性愛」の系譜

プルーストやジッドの作品を契機に、1920年代のフランス文学において男性同性愛のテーマは可視化され、“moderne”なものと思なされるようになった。一方、同時期の日本文学では、第5章・第6章で検討したように、昭和初期の「エロ・グロ・ナンセンス」の風潮のもと、主に大衆向けのメディアに男性同性愛を扱った雑誌記事や小説は出現したものの、仏文学のそれに匹敵する男性同性愛の「流行」が指摘できるわけではない。だが、当時の日本の作家は同時代の西洋文学を意欲的に吸収していたため、両者の間に関連性がまったく見られないわけでもない。そこで、本論では仏文学にも精通し、「日本に於けるモデルニズムの旗手」(福永 170)として文学創造に乗り出した堀辰雄の初期の短編『燃ゆる頬』に目を向け、仏文学における同性愛の感染源と見なされたプルーストの『ソドムとゴモラ』、特に、『ソドムとゴモラ』Iと比較しながら、その男性同性愛表象を分析しよう。

堀がプルーストに傾倒していたことはよく知られているが、実際にプルーストを読み始めたのは、1931年4月に養成することになった富士見高原療養所においてであった。それに先立つ神西清宛の手紙には、「僕はプルーストの『ソドムとゴモル』を読もうって野望を起している」(2月19日)、『ソドムとゴモル』も借りて行きたい(3月21日)と綴られている(堀 g 67, 69)。したがって、1931年の時点で堀は『失われた時を求めて』のなかでも、『ソドムとゴモラ』に強い興味を示していたと言えるだろう。

堀自身の言葉に従えば、「その冬 [1931年]、病がやや癒えてから」(堀g 259)書かれた短編小説が『燃ゆる頬』であり、『文藝春秋』1932年1月号に掲載された。粗筋をまとめると、高等学校の寄宿舎を舞台にし、17歳で「少年時からの脱皮」(堀a 209)間際の「私」、西洋では男性のホモエロティシズムの象徴であった「希臘彫刻」の「ディスクスヴェルフェル円盤投手」と云うのに少し似てい(堀a 211)る上級生の魚住、「私」よりも年上だが同級で、「薔薇いろの頬

の所有者」(堀a 212)の三枝という三人の少年の間で同性愛の欲望が交錯しており、最終的には「私」と三枝の関係が「いつしか友情の限界を超え出したように見えた」(堀a 215)と前景化される。

しかし物語中盤で、「私」は夏休みに「或る半島」(堀a 216)へ三枝とともに旅に出、旅先の漁村で少女たちに出会う。「私」は同性愛と異性愛の間で揺れ動くのだが、結局は後者へと移行し、一方、三枝は脊椎カリエスが原因で死ぬ。そして数年後、肺結核の治療のために入ったサナトリウムで、「私」は、脊椎カリエスの療養をしている少年と知り合い、日に焼けた少年の顔に死んだ三枝の面影を見出し、かつての三枝への愛と彼が死んだこと、自己の少年期が終わってしまったことをようやく認識し、「大きな打撃」(堀a 222)を受け、その「打撃」とともに物語は締めくくられる⁸³。

この作品に関しては、「推薦の言葉」として川端康成が次のようにまとめている⁸⁴。

堀辰雄氏の「燃ゆる頬」は、少年の同性愛、性の目覚めによる少年の日の「脱皮」を扱ったものであるが、このように清潔な作品を、私は殆ど見たことがない。[…]
蜜蜂による花の愛情を見る冒頭にしろ、二人の少年が旅のゆきずりに声変りの頃の少女を見て、彼等の同性愛の日が閉じる頂点にしろ、少年の微妙な性感は、いたるところに細かい鋭さで洗い出されて、淡彩な筆触とは似もつかぬ、激しい官能の匂いを放っているけれども、しかしなによりも、みずみずしい清潔さが私を惹きつける。作者の感覚が少年のような清潔な裸でいることは、全く驚くべきである。「燃ゆる頬」はその純潔な結晶体のゆえに、私を殆ど黙らせようとしたものであった。(川端 206)

川端の言葉を借りれば、『燃ゆる頬』は「少年の同性愛」とそこからの「脱皮」、すなわち、「同性愛の日が閉じる頂点」を主題としており、「激しい官能の匂い」と「みずみずしい清潔さ」が共存した作品ということになる。さらにそれは「純潔な結晶体」と神聖化までされている。

作者の堀も1949年に『燃ゆる頬』を振り返って、川端に「いい批評をしていただいた」と謝意を示しつつ、「これは私のキタ・セクスアリスである。そういう主題のものを、できるだけ冷めたく硬い筆触で描いて、一種のペエソスを出してみたかった」(堀 e 259)と記している。以下、本章では、『燃ゆる頬』の「蜜蜂による花の愛情を見る冒頭」部分を読む。

堀自身も「これは私のキタ・セクスアリスである」とたとえているが、この小説は鷗外の『キタ・セクスアリス』や折口信夫の『口ぶえ』(1914年)といった「スクール・ボーイたちの同性愛」を扱った作品の系譜に属する(槇山 84, 吉川 98)。武者小路実篤の『お目出たき人』(1911年)や志賀直哉の『濁った頭』(1911年)の一節、里見弴の『君と私』(1913年)など白樺派の作品、前章で読んだ江戸川乱歩の『孤島の鬼』や浜尾四郎の『悪魔の弟子』(1929年)といった探偵小説の一部、『RちゃんとSの話』(1924年)など稲垣足穂の1920年代以降の諸作品、『燃ゆる頬』の推薦文を書いた川端康成の『少年』(1951年)、三島由紀夫初期の短編『煙草』(1946年)や『仮面の告白』(1949年)の第2章もその系譜に加えることができる。三島は『煙草』に関して、『燃ゆる頬』を「この短編に一番近い類縁」(三島c 203)に位置づけている⁸⁵。

前章までの論点を整理する意味でも、ここで「スクール・ボーイたちの同性愛」表象の特徴を明確にしよう。折口の『口ぶえ』に触れて、中沢新一は次のように述べている。

同時代の小説などを読んでみてもわかるように、この当時には、男の子同士の同性愛的な感情は、いまよりもずっとふつうの感覚で、とらえられていたのである。

明治のスクール・ボーイたちは、男の子だけの世界の中で、おおかれすくなかれこのような同性愛的な雰囲気を経験していたのだ。[...] たいていは、学校の世界を離れてからは、異性愛的な世界にめざめていくというのが、ふつうのコースだった。(中沢 10)

中沢が指摘するように、「スクール・ボーイたちの同性愛」表象の特徴の一つとしては、男子学生が「おおかれすくなかれ [...] 同性愛的な雰囲気を経験していた」点、セジウィックの言葉を借りれば、同性愛が特定の個人に「局所化」されていたのではなく、多くの男子学生に「一般化」したものとして解釈されている点が挙げられる。第1章で論じた『キタ・セクスアリス』の寄宿舎の場面と金井と父親とのやり取りや、上で列挙したいくつかの作品においても男子学生間の同性愛は「一般化」していることが読み取れる。

だが、同性愛が「一般化」していたのはあくまでも男子学生集団内部に限定されていた。「たいていは、学校の世界を離れてからは、異性愛的な世界にめざめていくというのが、ふつうのコースだった」。そうした期間限定的なところが「スクール・ボーイたちの同性愛」表象のもう一つの特徴だ。『キタ・セクスアリス』でも逸見という学生は「急激な軟化」をし、「硬派」の代表であった古賀も結婚する。

一方、年長者の同性愛の欲望の対象となる「少年」についても、「少年視」される期間の短さがしばしば強調された。明治・大正期に男子学生の間で非常によく読まれた紅夢楼主人の『美少年論』（1911年）には「美少年の佳期は、十三四歳より十七八歳を極度として、其間僅に五六年に過ぎ」（紅夢楼 5）ないという一節があり、同書の影響を受けた稲垣足穂も「少年の命は夏の日である」（稲垣 13）と「少年」の美の果敢無さを表明している。

ところで、『キタ・セクスアリス』と『燃ゆる頬』の間には出版年では20年以上の隔りがある。『キタ・セクスアリス』以降の「スクール・ボーイたちの同性愛」表象の変遷をたどろう。第一章で分析したように、形骸化していたとはいえ、『キタ・セクスアリス』の「男色」は、年長者が少年を導き、最終的に成人男性を養成するタイプのものであり、男性性の伝授という名目で正当化され、「硬派たるが書生の本色」と規範化さえされていた。それに対して、高原英理によれば、大正期以降になると、『キタ・セクスアリス』のような「変革期的・硬派的・武断的気風とははっきり異なる、果敢ない美しさ・脆く瀟洒なたたずまい・死に接近する少年」（高原 23）が好んで表象されるようになったという。男子学生間の同性愛も、男性の育成という「男色」の理念は後景化し、言わば第三のジェンダーであるところの「少年」とどまり、美少年同士が「自他の同一化をめざす関係」、すなわち、一種の自己愛へと変容したのだ（高原 18）。

そうしたなかで、『口ぶえ』や、前章でも触れた乱歩のエッセイ「乱歩打明け話」のように、二つのタイプの同性愛が拮抗し、最後には自己愛的なそれが選択されるプロットを構成する作品も発表されるようになった。『燃ゆる頬』でも、「私」と魚住のような年齢差に基づいた非対称的な関係ではなく、「私」と三枝のより同質的な同性愛が選ばれることにな

る。

もちろん、中沢が男子学生を「スクール・ボーイ」と表記し、「同じ時代のイギリスのパブリック・スクールやドイツのギムナジウムの世界にも通じている」（中沢 10）と補足するように、「スクール・ボーイたちの同性愛」は近代日本に限られたものではない。『失われた時を求めて』でも、厳密には「スクール・ボーイ」とは言えないが、第三巻の『ゲルマントのほう』で、「私」とシャルリュスの甥であるロベール・ド・サン＝ルーとの熱烈な男同士の「友情」が綴られている（Proust b 371-373, 377-378 など）。だが、『ソドムとゴモラ』Ⅰではシャルリュスとジュピアンという中高年男性の同性愛にスポットが当てられ、「スクール・ボーイ」とはかけ離れたものになっている。アントワヌ・コンパニオンもプレイヤッド版解説で、「ソドムは若者たちで満たされているわけではない」（Compagnon 1261）点を強調し、そこにこの作品の男性同性愛表象の斬新さを見ている。

3. 奇妙で、自然な植物としての男性同性愛——『ソドムとゴモラ』Ⅰと『燃ゆる類』（1）

それでは、『ソドムとゴモラ』Ⅰと『燃ゆる類』を比較検討しよう。堀とプルーストの関連性を扱った論文は多い。だがそれは『美しい村』（1934年）に集中しており、まして男性同性愛表象において、両者の関係に迫るものは非常に少ない。

たとえば、『燃ゆる類』におけるプルーストの影響にも触れた松田嘉子の「堀辰雄とフランス文学——比較文学的アプローチ」（1989年）では、旅先で出会う少女と『失われた時を求めて』第二巻の『花咲く乙女たちのかげに』の一節との対応が原文を引用しつつ証明されているのだが（松田 27-30）、冒頭部分のプルーストのテキストとのあからさまな関係は等閑視されている。堀のプルースト受容を詳細に論じた竹内清己の「堀辰雄における西欧文学——プルースト受容」（2006年）でも、『燃ゆる類』に関しては、松田論を引用するにとどまっている（竹内 98）。

それどころか『堀辰雄事典』（2001年）の「プルースト」の項目で森脇善明は、堀の目が「スワンやシャルリュスといった重要人物には届かない」とし、「当然プルーストで問題になる筈の同性愛のような反道徳的なテーマなどは、堀がわざと避けていたふうに思われる」（森脇 197）と述べ、男性同性愛表象におけるプルーストと堀の繋がりを分断する。こうした森脇の見解はただ単にホモフォビックなものだけではなく、薩摩の「兵児二才制度」や古代ギリシアの「ペデラスティ」が示唆するところの、男性同性愛を構成する道徳的側面を捨象し、また、男性間の道徳に付随するホモエロティシズムを見落としてしまうものである。

とはいえ、男性同性愛表象における堀とプルーストの繋がりを探った先行研究がまったく存在しないというわけではない。この領域を拓いたのが禹朋子の「プルーストと堀辰雄——『燃ゆる類』の主題をめぐって」（2004年）である。禹論文では、『燃ゆる類』と『ソドムとゴモラ』Ⅰの冒頭場面の「呼応」（禹 62）が抽出されている。本論文では禹論文を踏まえつつ、しかしそこで十分には議論されていない二つの作品の男性同性愛表象の内実を組

上にのせたい⁸⁶。

本論文は、『燃ゆる頬』の冒頭の一場面注目する。大柄な円盤投げの選手で、「希臘彫刻」のような魚住が、「或る日の昼休み」に「私」を「植物実験室」に呼び寄せ、顕微鏡を見せようとする『燃ゆる頬』の場面は、禹論文で指摘されるように、プールの『ソドムとゴモラ』Iの「シャルリュスとジュピアンの出会の場面を引き写していることは明らかである」（禹 62）。本論文でも確認しよう。「私」は魚住に声をかけられる直前、花壇の花々を次のように描写している。

或る日の昼休みに、私は一人でぶらぶらと、植物実験室の南側にある、ひっそりした花壇のなかを歩いていた。そのうちに、私はふと足を止めた。その一隅に簇がりながら咲いている、私の名前を知らない真白な花から、花粉まみれになって、一匹の蜜蜂の飛び立つのを見つけたのだ。そこで、その蜜蜂がその足にくっついている花粉の塊りを、今度はどの花へ持っていくか、見ていてやろうと思ったのである。しかし、そいつはどの花にもなかなか止まりそうもなかった。そして恰もそれらの花のどれを選んだらいいかと迷っているようにも見えた。……その瞬間だった。私はそれらの見知らない花が一せいに、その蜜蜂を自分のところへ誘おうとして、なんだかめいめいの雌蕊を妙な姿態にくねらせるのを認めたような気がした。（堀 a 210）

一方、ゲルマント公爵夫妻の帰宅を待ちながら、中庭に身を潜める『ソドムとゴモラ』Iの「私」は、「植物学者」（Proust 3）を気取って、庭の植物を次のように観察する。

それから誰にも見られるはずがないことがわかると、私はもはや動くまいと決意した。というのも、奇跡 [miracle] が起こって、長い間それを待ちわびていた処女 [雌花] のもとへ、ほとんど期待できない [presque impossible à espérer]、遠くからの使者である […] 昆虫の到着を見逃してしまうことを恐れたからであった。こうした [雌花の] 待機は、昆虫がより容易く花を受け入れることができるようにとひとりで向きを変える雄蕊を持った雄花に劣らず、受身のものではないということを私は知っていた。ここにある雌花も同様に、昆虫がやって来たら、その「花柱」をなまめかしくたわめ、昆虫をいっそうまきはまり込ませるために、猫をかぶっているのだが実は情熱的な小娘のように、気づかれぬように自ら歩み寄っていくだろう。（Proust 4-5）⁸⁷

『燃ゆる頬』の花壇の場面は、『ソドムとゴモラ』Iの花の媚態とそこに介在する昆虫の存在と「呼応」しており、両者ともそれに続く男性同性愛の隠喩として用いられるという点でも共通している。『ソドムとゴモラ』Iでは昆虫と花はそれぞれ「マルハナバチ」と「蘭」と特定され、ジュピアンはシャルリュスを前に「願ってもない幸運で [providentiellement] やってきた昆虫のために蘭が取り得るような、なまめかしいポーズ」（Proust 6）をする。一方、『燃ゆる頬』の「私」も「植物実験室」の中で、「激しい官能の匂い」を放出する、魚住の「熱い呼吸」を頬に浴びながら、「今のさっき見たばかりの一匹の蜜蜂と見知らない真白な花のことを思い出」す（堀a 211）。「蘭」がジュピアン、「マルハナバチ」がシャルリ

ユスを、「真白な花」が魚住、「蜜蜂」が「私」を指しているのは明白だろう⁸⁸。

『ソドムとゴモラ』Iでは、「蘭」になったジュピアンは「グロテスク」(Proust 6)なものとして描かれるのだが、「ますます美しさを増大させる、奇妙さ、ないしは自然さ[naturel]とでも言えるものに刻印されていた」(Proust 7)とも記される。なるほど、『ソドムとゴモラ』Iの男性同性愛表象には、“nature”やその派生語が頻繁に持ち出されている(Muller 471)。ジル・ドゥルーズの言葉を借りれば、「呪われた種族、あるいは、罪ある種族というテーマは、すべて、植物の性についての無実のテーマとからまり合っている」(ドゥルーズ

149)のである。そうした「奇妙さ」と「自然さ」が入り混じった植物^{フローラ}⁸⁹としての男性同性愛は、『燃ゆる頬』にも受け継がれている。ただし、『燃ゆる頬』の男子学生集団では同性愛に関与する個人が「罪ある種族」とは見なされていないため、植物化した男性同性愛の「自然さ」ではなく、「奇妙さ」のほうが際立っているように思われる。

「自然さ」と「奇妙さ」をめぐる一節の他にも、二つのテキストの間には、一見些細に見えるかもしれないが無視できない相違点が存在する。『ソドムとゴモラ』Iの「私」は「マルハナバチ」と「蘭」の結合を「奇跡」、「ほとんど期待できない」などときわめて特殊なものにとらえており、その姿勢は一貫している。それがシャルリュスとジュピアンの出会いの隠喩になっている以上——『ソドムとゴモラ』Iでは男性同性愛者の数の多さも強調され、この原理は短いテキストにおいても反転されるのだが(Proust 19)——男性同性愛者間の結合が「奇跡」と見なされることになる。

それに対して、『燃ゆる頬』の「蜜蜂」と「真白な花」の結合には「奇跡」というニュアンスはまったくない。「蜜蜂」は、「それらの花のどれを選んだらいいかと迷っているようにも見えた」と、数多の花からの申し出を選び好みしているのであり、「スクール・ボーイたちの同性愛」における上級生の申し出の多さが暗示される。ここからも、『燃ゆる頬』では多くの男子学生が同性愛に関与し得ると解釈されていること、換言すれば、同性愛が「一般化」していることが読み取れる。

しかも、「私」は「いま受精を終わったばかりの、その花をいきなり筆りとっ」(堀 a 210)てしまう。実際に『燃ゆる頬』では「私」と魚住の絆は結ばれる前に破綻し、以降、「私」と三枝の同質的な同性愛にスポットが浴びせられるようになるわけだが、それは『ソドムとゴモラ』Iを越えて、『失われた時を求めて』の最後の巻『見出された時』に至るまで、第一次世界大戦の戦火をもくぐり抜けて結ばれる、シャルリュスとジュピアンの「奇跡」の絆のまさに奇跡的な持続性とは対照的なものである。

4. 彼の中から出現する「少女」の「微笑」——『ソドムとゴモラ』Iと『燃ゆる頬』(2)

さて、『ソドムとゴモラ』Iでは、ゲルマント公爵夫人の植物を観察していた「私」は偶然にシャルリュスを目撃し、次のように描写する。

太陽に向かってまばたきしながら、彼はほとんど微笑んでいるように見えた。私はそ

んなふうには休んでいる状態で、まるで自然の [naturel] 状態で見られた彼の顔に、あまりにも愛情深く、あまりにも武装を解除した何かを見出したので、もし見られているのを知ったら、シャルリュス氏はどんなにか腹を立てただろうと考えずにはいられなかった。というのも、この男が私に考えさせたもの、あれほど男らしさに夢中になり、それを誇っている男、彼にとっては誰もが忌わしいほど女性化して見えるこの男が、私に突然考えさせたもの——それほど、つかの間、彼はそうした顔立ち、表情、微笑をしていたのだが——それは一人の女であったのだ。(Proust 6) 90

それまでは「男らしさ」を信奉し、それを誇示しようとしていたシャルリュスが、太陽光線のもと「武装を解除」してしまうと、一転して「女性化」し、「一人の女」のような「顔立ち、表情、微笑」を露呈するというのである。

「私」は続いてシャルリュスとジュピアンの出会いを覗き見ることで、予想を確信に変え、「彼は一人の女だったのだ！ その見かけほど矛盾してはいないが、気質 [tempérament] が女のものであるというまさにそのために、男性的なものを理想とする人間たちの種族に属していたのだ」(Proust 16) と断言する。シャルリュスを起点にして、「私」は、「何人ものシャルリュス氏」(Proust 15)、「シャルリュス氏のような人々」(Proust 18) へと解釈を拡大する。シャルリュスの内部から立ち現れてくる一人の女性は、「あまりにも特殊な生まれつきの素質 [une disposition innée tellement spéciale]」(Proust 18) が表面化したものにとらえられ、失われたように見えても、「隠された宝石は再び見出される」(Proust 27) と同性愛の不変性が強調される。

『ソドムとゴモラ』Iのこうした男性同性愛表象には、ジッドが『コリドン』の序文で言及するように、19世紀後半の精神医学言説が見て取れる (Gide 8, Rivers 157-158)。第3章で検討した精神医学における同性愛解釈に照合すれば、シャルリュスの体内に囚われた女性、その「あまりにも特殊な生まれつきの素質」は先天的な同性愛に対応している。しかもコンパニオンによると、『ソドムとゴモラ』Iの草稿で、“homosexuel”と“androgynie”は代替可能な語として用いられていた (Compagnon 1216)。『変態性慾心理』においても、もっとも進んだ「階級」は“Androgynie”であったわけであり、ここからも、『ソドムとゴモラ』Iが精神医学言説から紡ぎ出されたテキストであることは明らかである。

ところで、同性愛の先天性の主張の背景には、男性同性愛を脱犯罪化する試みがあった。だが、男性間性行為が違法であった独英と、少なくともそれ自体が犯罪とされていなかったフランスの間には相違がある。そもそもフランスの精神医学では劣悪な環境が「変質 [dégénérescence]」をもたらし、それが遺伝し、先天的に精神病を引き起こすというベネディクト・オーギュスタン・モレルの「変質論」が19世紀中盤から大きな影響力を持っていた。19世紀後半になると、精神医学者のジャン・マルタン・シャルコーやヴィクトール・マニャンが同性愛を「遺伝的変質」の徴と見なし、彼らに続くフランスの精神医学者もその見解に従った (Nye 41, Tamagne 234-235)。すなわち、同性愛の承認を目論んだはずの先天性が脱犯罪化という名目を失い、同性愛を棄却する根拠として用いられたのである⁹¹。第4章で触れたように、こうした転倒は日本の性欲学にも指摘できるものであった。なお、プルーストも初期の短編『夜の前に』(1893年)では、「変質論」の影響を受け、同性愛を「神経の変質 [une altération nerveuse]」と定義している (Compagnon 1191)。

ただし、『ソドムとゴモラ』Iでは、精神医学規範が混乱に陥っていることも補足したい。「私」が連想から確信へと至る短い間にも、シャルリュスを解釈するうえで決定的に重要であったはずの彼の内的な女性性は維持されていない。出会いの場面にしても、シャルリュスではなく、ジュピアンのほうが「蘭」の雌花の「なまめかしいポーズ」を取り、シャルリュスの中の女性は見えなくなる。さらに、「私」は両者を雄と雌、二羽の鳥に重ねた上で、ジュピアンを雌と言う。そうすると、“androgyné”であるべきシャルリュスが雄ということになってしまう (Proust 8)。それゆえにセジウィックなどは、プルーストの男性同性愛表象が精神医学言説の単純な反復には終わらないことを示す例としてこの場面に着眼し、「この取引は、まさに驚くべきことだが、男性として形象されたシャルリュスによる、女性として形象されたジュピアンの求愛として […] 表象されている」(セジウィック 321)と述べる。

翻って、『燃ゆる頬』の「スクール・ボーイたちの同性愛」は、精神医学の分類に従えば、後天的な同性愛に相当する。クラフト=エビングもそれが実践される場として「監獄内、船中」とともに「寄宿舎」を挙げていた (クラフト=エビング 228)。しかし前章で論じたように、少年期・少女期の同性愛は後天的な「変態性欲」と接合されつつも、そこからは一線を画された。それは一時的なもの、無害なものとして表象し得るものであったのだ。『燃ゆる頬』の同性愛も、「燃ゆる頬=薔薇いろの頬」が「脱皮」する前のものと位置づけられており、川端の「推薦の言葉」でもこの点を踏まえて、少年同士の同性愛は「純潔な結晶体」と讃えられる。

それと同時に、本論文では、『孤島の鬼』の男性同性愛表象がまさしくそうであったように、同性愛を少年期へと封じ込め、讃美することが、その期間を越えて持続する同性愛を「変態性欲」と周縁化し、異端視するものであったことにも注意したい。前章でも触れたが、『孤島の鬼』では、少年期のホモエロティックな「遊戯」と対比させて、成人男性の同性愛は「常軌で律すること」が出来ない欲望と見なされ、そこに殺人の動機までが求められた。すなわち、「スクール・ボーイたちの同性愛」の許容、さらに言えば、美化は、それ以外の男性同性愛へのホモフォビアを生成するものでもあったのである。

『燃ゆる頬』に戻ろう。興味深いことに、『ソドムとゴモラ』Iがプレテクストになっているために、『燃ゆる頬』からも、本来はそれとは無関係なはずの「あまりにも特殊な生まれつきの素質」の痕跡が読み取れる。「蜜蜂」と「真白な花」の描写に続いて、「私」は「植物実験室」の中にいた魚住に呼ばれ、彼が「不器用そう」に作った「プレパラート」を見せられる (堀 a 211)。顕微鏡を覗きながら、盗み見た魚住の顔は、彼が花の隠喩で語られるのに伴って、「希臘彫刻」にもたとえられた平生の様子から次のように奇妙に変貌する。

私はそういうぎごちない姿勢を続けながら、しかしもう一方の、顕微鏡を見ていない眼でもって、そっと魚住の動作を窺っていた。すこし前から私は彼の顔が異様に変化しだしたのに気づいていた。そこの実験室の中の明るい光線のせい、それとも彼が何時もの仮面をぬいでいるせい、彼の頬の肉は妙にたるんでいて、その眼は真赤に

充血していた。そして口許にはたえず少女のような弱々しい微笑をちらつかせていた。
(堀 a 211)

「そっと […] 窺っ」た魚住の顔は、「少女のような弱々しい微笑」を露にしている。『ソドムとゴモラ』Iで、覗き見られたシャルリュスが太陽光線の下で武装解除し、「男らしさ」の信奉者という従来の姿を脱し、女性の「微笑」を見せたのと同様に、少年たちの間で特出した男性性を具現し、それゆえに偶像化されていた魚住も、「明るい光線」のもと、あたかも「男らしさ」の「仮面」を脱いだかのように「少女」の「微笑」をたたえているのである。「彼の頬の肉は妙にたるんでいて、その眼は真赤に充血していた」と「希臘彫刻」とは相容れない、魚住の「異様」なイメージが展開される。

このようにして魚住の中から出現した「少女」の「微笑」は、男子学生であれば誰もが関与し得て、一過性のものであった、少なくともそのようなものとして精神医学言説においても保証され、作家も安全に表象することができた「スクール・ボーイたちの同性愛」に、不変的な「素質」の痕跡が忍び込んでいる証拠に他ならない。おそらくは少年の「同性愛の日が閉じる」ことによって「ペエソス」を醸し出そうとした作者の堀の狙いにも背いて、テキストには『ソドムとゴモラ』Iの、言うなれば危険な男性同性愛が入り込んでいるため、『燃ゆる頬』の男性同性愛表象は二重化されたものになっているのだ。つまり、魚住の「少女のような弱々しい微笑」は、ホモエロティックであり、かつ、その時期を越えた男性同性愛へのホモフォビアを暗に強化し得るような、少年たちの「純潔な結晶体」を不安定化させるものなのである。

以上、細い線であるかもしれないが、1920年代のフランス文学において男性同性愛の「流行」や「感染」の源に位置づけられたプルーストが創造した、強烈なキャラクターであるシャルリュスは、1930年代前半には、一見それとは相容れないように思われる堀辰雄の『燃ゆる頬』という日本文学のテキストにまで侵入していたのである⁹²。

5. 「仮面」と男性同性愛表象

本章ではこれまで、堀辰雄の『燃ゆる頬』の「スクール・ボーイたちの同性愛」に、プルーストの『ソドムとゴモラ』Iの男性同性愛を規定する同性愛の「気質」や「素質」がもたらされている点を顕在化させ、1920年代の仏文学で“*moderne*”なものと見なされ、「流行」した男性同性愛が、数年後には日本の文学作品にも到達していることを示した。しかしその線はやはり細いものである。というのも、『燃ゆる頬』では同性愛の「気質」の痕跡が次のようにすぐに隠蔽されることになるからだ。

私はついと顕微鏡から顔を上げた。

「もう、僕……」と腕時計を見ながら、私は口ごもるように云った。

「教室へ行かなくっちゃ……」

「そうか」

いつのまにか魚住は巧妙に新しい仮面をつけていた。そしていくぶん青くなっている

私の顔を見下ろしながら、彼は平生の、人を馬鹿にしたような表情を浮かべていた。(堀 a 212)

魚住は「新しい仮面」によって再び覆われ、出現した「少女」の「微笑」も見えなくなる。

一方、『ソドムとゴモラ』Iでは、同性愛者同士は互いの「仮面をはがす [démâsquar]」(Proust 18)ことに躍起になっており、シャルリュスにしても本人の意図とは無関係に「私」によって「仮面をはが」されてしまう⁹³。セジウィックの言葉を借りれば、『ソドムとゴモラ』Iを境目にして、それ以降、シャルリュスは、「私」にとって、そして、読者にとっても、「一人のホモセクシュアルが、一つのクローゼットの内部に、わくわくするほど下手くそに隠れているのを、これみよがしに見せつける見せ物」(セジウィック b 335)になるのである。

もっとも、『燃ゆる頬』においても、この場面を経ると、作品の冒頭で「希臘彫刻」のような健全さを体現していたはずの魚住は、「大きな鳥のような恰好をした異様な影」(堀 a 213)に重ねられ、その「異様」さがますます強調されるようになる。だが、物語は「私」と三枝の関係にスライドし、魚住は端役になり、最終的には「魚住はもはや私を空気を見るようにしか見なかった」(堀 a 220)と述べられるだけである。結局、「植物実験室」の場面は『燃ゆる頬』の序でしかなく、魚住の「仮面」が再び剥がされることはない。

堀の創作ノートである「プルウストV」を参照すると、シャルリュスに関して、堀が「屢々、ほんの一瞬時彼は、彼の同類に知らせるために、そのマスクをもち上げるようなことがある。が、すぐ、他のものによって気づかれるのを恐れて、「一つのマスク、もう一つ別のマスク」をつけてしまう」と理解していたことがわかる(堀 f 139)。渡部麻美によれば、「プルウストV」は、「プルウスト・ノオト」のなかでもっとも早い時期に書かれたもので、1931年春から1932年夏にかけてであると推定されており(渡部 82)、『燃ゆる頬』執筆と前後している。つまり、堀は同性愛の暴露と同時に、あるいはそれ以上に、その隠蔽を『ソドムとゴモラ』Iから読み取ったのではないか。プルウストのテキストで隠蔽と暴露の間で不安定な見世物として提示される男性同性愛のクローゼットは、『燃ゆる頬』では、魚住に表面化した「少女のような弱々しい微笑」によって、その境界線が一瞬歪むとしても、危険な「素質」の痕跡を「仮面」の下に温存したまま、再び安定するのである。

『燃ゆる頬』でこのようにしてさりげなく持ち出される「仮面」とは、隠蔽と暴露のダイナミズムを演出するものであり、男性同性愛表象にしばしば使われるアイテムである。そして、戦後に、それを利用し、男性同性愛の「仮面劇」(三島 a 261)を目論んだのが三島由紀夫であった。本論文でも終章では、三島の作品の男性同性愛表象に目を向け、これまでの章で問題にしてきたいくつかの論点を整理し直そう。

終章 戦時下、そして、戦後の男性同性愛表象に向けて

ここで本論文のこれまでの論点を整理する。第3章・第4章で論じたように、精神医学、性科学・性欲学言説は様々な綻びを内包しつつも、日本では明治末期から昭和初期にかけて、性愛規範として社会に浸透していった。そうした規範の再生産には文学テキストも貢献したことだろう。だが、文学テキストにおいては、ただ単に「科学」言説が反復されただけではない。そこでは、性愛規範は攪乱され、その虚構性や偏向性が暴き出されたのであった。

森鷗外は、日本の性欲学のブームに先立って、明治末期の『キタ・セクスアリス』、『青年』に西洋の精神医学に由来する“Urning”や“homosexual”といった概念を導入した。しかし、第1章・第2章で分析したように、鷗外のテキストにおいてそれらは十分には機能しておらず、最終的には「同性愛」概念のほうが、文学表象を通して読みかえられることになった。

一方、性欲学が流行した大正時代を経て、江戸川乱歩が昭和初期に発表した『一寸法師』、『孤島の鬼』では「同性愛」概念に従って、男性同性愛は異端視され、ホモフォビックに見世物化された。だが、第5章・第6章で読んだように、乱歩のテキストは「正常／異常」の境界を侵犯する「同性愛の感染性」を有しており、そこには「同性愛」概念そのものを狙上への批評性が潜んでいた。

また、第7章で検討したように、精神医学言説からダイレクトにテキストを紡ぎ出したわけではない堀辰雄の『燃ゆる頬』にも、プルーストの『ソドムとゴモラ』Iを経由して、その痕跡が忍び込んでいた。

以上、本論文では、個々の文学作品の男性同性愛表象を読み解き、それらの軌跡を追うことで、近代日本における性愛観念の規範化と変容に光を当てた。

さて、堀の『燃ゆる頬』が発表されたのは1932年のことであつた。それ以降の男性同性愛表象はどのような変遷をたどったのだろうか。終章では本論文の結論に代えて、そのアウトラインを探る。まずは、戦時下の男性同性愛表象と戦後になってからのホモエロティックな軍隊の表象を概観し、三島由紀夫の作品にも触れる。そのうえで、今後の私の研究課題を示したい。

1. 戦時下の男性同性愛表象と軍隊のホモエロティシズム

1931年9月の満州事変を契機に、日本社会は急速に戦時体制へと突入していった。国力となる「次世代再生産」が義務づけられ、「産めよ、増やせよ」、「良妻賢母」というスローガンのもと、異性愛規範、すなわち、ヘテロノーマティヴィティが強化された (McLelland b 33)。それにもなつて、古川誠が述べるように、「同性愛に関する議論もほとんどなされなく」(古川 b 50) なつた。

たとえば、岩田準一（1900-1945年）の『男色文献書志』には、彼自身のものも含めて、「エロ・グロ・ナンセンス」が全盛であった1930～1932年には毎年25件前後の文献が挙げられている。だが、それ以降は毎年減少し、盧溝橋事件が発生し、日中戦争が勃発した1937年から、同書がカバーする1943年までの7年間で25件の文献しか記載されていない（岩田 447-461）。

ただし同時に、1943年の時点でも『男色文献書志』に『中世国文学の研究』と『歌舞伎史の研究』の名前が挙げられている点は看過できない（岩田 460-461）。プラグフェルダーも、戦時下であっても「国文学」というコンテクストでは男性同性愛を論じた点を強調している（Pflugfelder 328）。また、岩田は言及していないが、本論の第1章で触れた三品彰英の論考「薩摩の兵児二才制度」の初出も1943年であり、そこでも「兵児二才」と「兵児山」の間の「男色」が取り上げられていた。

一方で、岩田は、1937年4月5日付の南方熊楠への書簡の中で次のように記している。

前日ちょっと申し上げた今秋の雑誌創刊について、同人の方で気ぬけのして来た方があるので困っています。費用の一部を負担する人がそんなでは、それを除いて自ら進もうとする勇気が、物質方面からはばまれて来ることになりますから、どうしても出ずとなれば、上京してその人の勇気を奮起せしめるのですが、何をいってもあの研究を、どうも、一方には肯定しながら（社会的にも重大性を意識しながら）、一方に罪悪感ではなくとも、はにかみを持つてのけるので、思い切ったことが書きにくい、だから同人の小部数雑誌にしたところが、やはり発表は発表だから、雑誌創刊もちょっと考えさせられるという意見なのです。（南方・岩田 320-1）

1937年に、岩田は困難を吐露しつつも「あの研究」、すなわち、男性同性愛研究の雑誌の創刊を目論んでいたのだ。同年、8月21日付の岩田の手紙を参照すると、「それにあの方面のことを虚心で公表する人が、今ではなくなっています。時勢がそうさせてしまったのです。しばらく時節の転換後を待つより外なくなりました」（南方・岩田 323）と「時節」のために彼の目論見は頓挫してしまっただけだが、戦時下でも、男性同性愛が完全に隠蔽されたわけではないことがわかる⁹⁴。現に、岩田は1943年に膨大な男性同性愛関連の書物の文献目録である『後岩つつじ』を自費出版しており、それが1956年に乱歩の尽力もあり、『男色文献書志』として出版されることになったのである。

上で触れたように、戦時下においては男性のセクシュアリティも女性のセクシュアリティもしだいにヘテロノーマティブなものになっていった。「家の中」では「次世代再生産」が求められたわけだが、「家の外」では、日本軍は内地には駐屯地付近に公娼施設を、外地には「慰安所」を作り、戦地では強姦行為を常態化させており（笠原 163）、兵士は暴力的なやり方で自己のヘテロセクシュアリティを表明していた。

だが、マーク・マクレランは、戦争による男女の分離が、ホモエロティズムを容易に引き起こすことになったとも論じている（McLelland b 16）。なるほど第4章で取り上げた、日露戦争の日本軍勝利の原動力に「男色」を見るフリーレンダーの見解、あるいは、それに対する性欲学者の反論の例が示すように、肯定するにせよ、否定するにせよ、軍隊と

ホモエロティシズムはつねに密接な関係にあり、議論の対象になっていた。第二次世界大戦後になると、戦時下の軍隊における、ホモソーシャルリティとホモセクシュアリティが一体化したホモエロティックな絆を扱った記事が、『奇譚クラブ』や『風俗科学』といった「変態性欲」を売りにした、いわゆるカストリ雑誌に発表されるようになった。そこでは、たとえば上官と部下のサドマゾ的な関係や、日本軍の兵士と植民地の男性とのホモエロティックな絆が恰好の題材になっていた (McLelland b 49-53)。

これらの記事に対して、マクレランは、前近代の武士道の「義兄弟」を引き合いに出して、欧米とは異なり、日本には「軍事と男性間の欲望の長い結びつき」が存在していたため、軍隊内部の「ホモソーシャルな兄弟愛 [homosocial brotherhood] がホモセクシュアリティに容易く横滑りしていったと述べ、それを解説の前提にしている (McLelland 42)。もちろん、ホモソーシャルリティにホモエロティシズムが組み込まれていることは言うまでもない。しかし、戦時下のホモエロティシズムをノスタルジックに語るこうした記事が、軍隊をホモセクシュアルなものとして偽装し、讃美することで、その背後に存在した異性愛規範の問題を不可視化してしまう点は見逃せない。

というのも、そうした問題点を曖昧にしたまま、「男色」を論拠にして、ホモソーシャルリティをホモセクシュアリティと同一視する読みは、ホモソーシャル集団に存在するホモフォビアやヘテロセクシズムを隠蔽する結果に陥ると思われるからである。軍隊というホモソーシャルリティとホモセクシュアリティの関係性は、そこに男性のセクシュアリティにおける日本の独自性がどこまで指摘できるのかという問いも含めて、該当する文献を一つ一つ詳細に検討していく必要があるだろう。

ホモエロティックな軍隊の表象はカストリ雑誌の専売特許ではない。戦後には、文学作品においても、このようなテーマは繰り広げられた。

たとえば、三島由紀夫の『仮面の告白』(1949年)でも、一人称の語り手で主人公の「私」は、「糞尿汲取人」の「紺の股引」(三島 a 180) や、美少年と思しき男装した絵本の「ジャンヌ・ダルク」(三島 a 182) など幼少期に遭遇したホモエロティシズムを喚起する様々なものを語る過程で、「兵士たちの汗の匂い」に言及する(三島 a 184)。そこでは暗示的なのだが、物語の後半になると、「私は軍隊生活に何か官能的な期待を抱いていた」(三島 a 276) と告げられ、「私」が軍隊にホモエロティシズムを求めていることがはっきりと読み取れる。おそらくそれは「私」が神輿を担ぐ「若衆」たちに見出す、「世にも淫らな・あからさまな陶醉の表情」(三島 a 199) にも通じた「男たちのエロスの世界」(渡辺みえこ 102) なのだ。言うなれば、語り手の「私」が忌避する、ヘテロノーマティブな戦後の「日常生活」(三島 a 335) の中で、戦時下の軍隊のホモソーシャルリティがエロス化され、美化されているのである。

2. 三島由紀夫の男性同性愛表象に触れて——『仮面の告白』と『禁色』

さて、三島由紀夫(1925-1970年)の『仮面の告白』や『禁色』(1953年)は近代日本

の男性同性愛表象の変遷をたどるうえでは重要なものである。だが、本論文でここから三島の文学作品を十分に分析することはできない。そこで、これまで論じてきた問題と関連づけて、『仮面の告白』と『禁色』の男性同性愛表象のいくつかの論点を大まかに提示したい。

三島由紀夫の『仮面の告白』は、1949年7月に河出書房企画の「第五回書き下ろし長篇小説」として発表された。この作品は、「私」が自己の同性愛の欲望にいかにして気づき、いかにしてそれと折り合いをつけていこうとするのかを綴った物語だとまとめられる。「私」の成長を主題としているため、「私」が最初に参加する男性集団は学校である。第7章でも述べたように、『仮面の告白』の、少なくとも第2章は『キタ・セクスアリス』以来の「スクール・ボーイたちの同性愛」表象の系譜に属しているのだ。

「私」が中学二年生になった時、物語には『燃ゆる頬』の魚住を想起させる近江というキャラクターが登場する。その「大きなもの」(三島 a 219)や「腋窩に見られる豊穡な毛」(三島 a 231)といった身体的特徴によって、魚住と同様に、近江も少年たちの中で際立った男性性を象徴し、そのために彼らのホモエロティックな関心の的になっていた。先ほどの軍隊についての解釈が示唆しているように、「私」はホモソーシャル集団にホモエロティシズムを見出そうとしている。しかも、第6章・第7章で論じたように、精神医学言説のもとでも少年期の同性愛は許容されたものであった。

だがそれにもかかわらず、当時を回顧する「私」は男子学生集団の中で自己の欲望を「常規を逸した」(三島 a 233)ものと特殊化する。期間限定的にホモエロティシズムが「一般化」され、正当化されていた「スクール・ボーイたちの同性愛」からの逸脱によって、「私」は自身を「正常なもの」(三島 a 233)ではないと定義するのである。テキストでは、マグヌス・ヒルシュフェルトやハヴロック・エリスなど本論文でも言及した独英の性科学者の見解が何度か引用されているのだが、「私」は「私」自身の「分析医」(渡辺みえこ 19)になって、彼らが言うところの「先天的な倒錯者」(三島 a 205)としてのアイデンティティをひたすら強固なものにしていくのである⁹⁵。

そして、小説の第四章で、戦後の大学生たちのセクシュアルで、かつ、ヘテロノーマティブな「集まり」に加わった「私」の内部から浮上してくる「苦しみ」の声は、次のように「私」に向けて語りかける。

お前は人間ではないのだ。お前は人交わりのならない身だ。お前は人間ならぬ何か奇妙に悲しい生物だ。(三島 a 343)

「私」は「人間ならぬ何か奇妙に悲しい生物」と自己を「フリーク化」している。そこには、性欲学系の雑誌に手紙を寄せて、「科学的の精神病者」などと自らを周縁化した仮名の手紙の書き手、あるいは、「世人」に対して「凡ての意味で異人種なのだ」と自分自身を異端視した『孤島の鬼』の諸戸道雄との共通点も見出せるだろう。

『仮面の告白』は、まさしく一人称の「私」の「告白」という形式を取っている。それゆえ、男性同性愛の「一般化」の徴候はテキストの至るところにうかがえるものの、語り

手の「私」は自身の同性愛の欲望を徹底的に「局所化」し、「倒錯者」というアイデンティティを揺るぎないものにしてしている。それに対して、『禁色』には全知の語り手が設定されており、多くの男性同性愛者が登場し、様々な同性愛言説からテキストが編まれている。その結果、『仮面の告白』との共通性を示しつつも、表象される男性同性愛には興味深い揺らぎが見出せる。

『禁色』は、第一部が1951年1月から10月まで『群像』に、第二部が『秘楽』というタイトルで1952年8月から1953年8月まで『文学界』に連載された。この作品は、強烈なミソジニストである老作家の檜俊輔が「愕くべく美しい青年」（三島 b 34）で、かつ、同性愛者である南悠一を使って、かつて自身を裏切った康子、鏑木夫人、恭子といった女性たちに次々と復讐するプロットを構成する。ミソジニスティックな俊輔の「復讐劇」（渡辺みえこ 38）の中で男性同性愛が持ち出されるため、ここでも男性同性愛表象はミソジニーと不可分なものになっている。そうした「復讐劇」を軸に物語は進展するわけだが、その過程で、日比谷公園と思しき「パーク」（三島 b 76）におけるクルージング、有楽町の「そういう人ばかり集まる喫茶店」（三島 b 83）ルドン、外国人も交えた“Gay Party”（三島 b 201）など男性同性愛に関連した様々な情景が綴られる。

本章では、「パーク」で行なわれるクルージングに注目したい。それは悠一がはじめて自分以外の同性愛者と接触する場面でもある。彼は電車の中で「四十ちかい商人風の男」と「勤め人風の男」（三島 b 75）の会話を耳にし、「パーク」の実体を知る。悠一は彼らを「同類」（三島 b 76）と見なしており、この作品で同性愛者は「この種族」（三島 b 79）と明確に「種族化」されている。それは彼が温泉旅行の広告に見て取る「異性愛の原理」（三島 b 77）——『仮面の告白』の「私」が恐れるヘテロノーマティブな「日常生活」に相違ないのだが——とは真っ向から対立するものである。『仮面の告白』の「私」を規定していた「倒錯者」という特殊なアイデンティティは、『禁色』の悠一にも受け継がれているのだ。

「パーク」に足を踏み入れた悠一は、そこに集っていた他の男性同性愛者たちに対して次のように考える。

これがみんな僕の同類だ。[……] 階級も職業も年齢も美醜もさまざまながら、たった一つの情念で、いわば恥部で結ばれ合ったお仲間だ。何という紐帯！ この男たちは今さら一緒に寝る必要はない。生れながらにわれわれは一緒に寝ているのだ。憎み合いながら、嫉み合いながら、蔑み合いながら、そしてまた温ため合うために、ほんの少し愛し合いながら。あそこに行くあの男の歩き方はどうだ。全身でしなをつくり、肩を交互にせばめ、大きな尻を振り、首をゆらゆらさせ、いわば蛇行を思わせるあの歩み。あれが親子よりも兄弟よりも妻よりももっと身近な僕の同類なんだ！（三島 b 80）

この一節では、「同性愛者」というセクシュアルなカテゴリーが、「階級も職業も年齢も美醜も」超越するものとしてとらえられている。悠一は他の同性愛者に嫌悪感を抱き、「変態」（三島 b 49）や「同性愛」（三島 b 329）という言葉には敏感になっており、そうした言葉は彼をつねに激しい「羞恥と憤怒」に陥れるのだが（三島 b 329）、結局のところ、彼も「同

類」や「お仲間」といったマイノリティ意識を受け入れているのである。

なお、この「パーク」は、大正期以降、「この種族の集り場所として著名」（三島 b 79）であったという。日比谷と浅草の差はあっても、「しな」を作った歩き方からは、第5章で読んだ『一寸法師』の大正末期のクルージングの「あること」を想像させる「一種異様の人種」の「歩きっぷり」との繋がりも浮かび上がってくる。

一方、『一寸法師』では曖昧であった、男性同性愛者のクルージングにおける階級の攪乱が『禁色』で前景化している点にも注意しよう⁹⁶。それはまたプルーストの男性同性愛表象の主題の一つでもあった。『ソドムとゴモラ』Iには次のような一節がある。

〔同性愛者は〕ロージュと呼ばれる支部を持つフリーメーソンよりも、はるかに広がって、有効で、疑われることのないフリーメーソンを形成する、というのも、それは嗜好の、欲求の、習慣の、危険の、修行の、知識の、取引の、用語の同一性の上に成り立っているからだ。そして、そのフリーメーソンの内部では、互いに知り合いになることを望んではいない構成員でさえも、自然の [naturels]、あるいは、習慣のサインで、不意の、あるいは、故意のサインで、すぐに互いにそうだと認識し合う。(Proust 18-19)⁹⁷

男性同性愛者の「フリーメーソン」は、「庶民の中に、軍隊の中に、寺院の中に、牢獄の中に、王座の上に、至るところに党員が数えられ」、特別な「サイン」によって、「大使」と「徒囚」、「大公」と「ならず者」が結合するのである (Proust 19)。これは精神医学の文献においても問題とされた同性愛者間の相互認知であり、シャルリュスとジュピアンにしても、男爵と出会ったことで、結果的にジュピアンが社会的地位を高めていくことが『ソドムとゴモラ』Iの終わりで示唆されている (Proust 31)。

レオ・ベルサーニは、上で引用した『ソドムとゴモラ』Iの一節を引いて、「ゲイ・クルージングのセックスの尋常ではない平等化 [democratization]」(Bersani 148)を指摘しているのだが、それは『禁色』のクルージングにも当てはまるものである。そこでも、男性同性愛者という「種族」は、特別な「サイン」で互いに認知し合い、ある種の「フリーメーソン」を形成する。厳密には階級の越境とは言えないものの、悠一も彼を欲望する男性同性者の「小社会」(三島 b 462)を利用して社会的地位を確立させることになる。

こういった男性間のセクシュアリティと階級の攪乱に関して、近世以前では「男色」を仲立ちとした「個人的盟約関係」が「下剋上」の時代に機能し、また、そのようなものとして表象されていた(小森 c 76)。だが、第7章でも概説したように、少なくとも明治以降の日本文学の男性同性愛表象は「スクール・ボーイたちの同性愛」を中心にしていたため、階級の問題は不可視化される傾向が強かった。『禁色』が顕在化させる、男性同性愛における階級攪乱は重要な論点となるだろう。

以上のように、『禁色』で同性愛は「種族化」され、男性同性者の「小社会」は「フリーメーソン」化している。だが同時に、「種族」の間の境界線は物語が進むにつれて奇妙に歪んでいく。というのも、悠一を操る役割を果たす、「この種族」ではないはずの俊輔が青年

に欲望を抱いてしまうからだ。

そもそも、ルドンで俊輔は「その道の人間」(三島 b 191) を装っていた。ところが、いつしか演技が現実のものとなり、「この美青年 [悠一] を愛している」と感じ、「戦慄」を覚える (三島 b 193)。また、悠一と出会ってから創作しつつある作品には「恋の特質」を認めて、彼は「怖ろしさ」に苛まれる (三島 b 244)。そして、美青年への欲望に直面し、老作家は「俺はこの美しい青年に肉感を感じているのではないか」と「ぞっと」する (三島 b 318)。悠一の強烈的な「肉」の魅力が、「種族」の境界を越えて、「その道の人間」ではないはずの俊輔にまで到達しているのである。

悠一が最初に登場する場面でも、俊輔の目を通して青年の肉体は「アポロン」(三島 b 34) に比せられていたが、この老作家が、同性愛が「一般化」している日本古典文学の「衆道」や古代ギリシアの「ペデラスティ」を執拗なまでに参照する点も示唆的である。最後に悠一と向き合う場面でも、俊輔は自身をソクラテスに、悠一を「美少年」のパイドロスになぞらえている (三島 b 565)。悠一という「若者の肉」(三島 b 318) が、テキストの基盤にあるはずの「同性愛／異性愛」の二元論を崩していくのだ。

『禁色』の結末では、俊輔は悠一に巨額の財産——「一千万円に表現された俊輔の愛」(三島 b 572) ——を残して自殺することになり、そこにこのテキストのホモフォビアをホモエロティシズムへと転換させる力の限界があると言えるのかもしれない。しかしながら、そうした限界はあっても、ホモフォビクな性愛規範を明確に反復している三島のテキストにも、規範を問いただす端緒は見出せるのである⁹⁸。

3. 今後の課題

本論文の最後で、博士論文以降の私の研究課題についても簡潔に述べよう。まず一つには、「科学」言説と「文学」表象の関連性の探求を軸にして、現代の日本文学までを視野に入れた男性同性愛表象の分析を引き続き行なう。あからさまなものだけではなく、本論文で扱った鷗外や乱歩の作品でも、より暗示的なやり方で男性同性愛が表象されるもの、さらには、一見、男性同性愛が描かれているようには見えないものまでを対象に含める。その際には、ただ単に作品をクィアに読むだけではなく、具体的なクィア・リーディングを通して、クィア理論の可能性と問題点を問うていくことも求められるだろう。

こうした個々の作品解釈の過程で、「西洋」由来の「科学」言説と「日本」近現代「文学」の作品との関係を詳細に検討し、序章でも触れた「本質」か「構築」かといった二者択一に陥らないということだけではなく、西洋と比較して、日本はゲイ・ライツにおける後進国か、それとも、日本はもともと「クィア」であり、同性愛にも寛容な国であるかという二者択一にも嵌らない、同性愛の研究を目論む。つまり、文学作品の解釈を通して、同性愛研究のよりいっそうの発展を目指すことを私の研究のもう一つの軸にする⁹⁹。

文学テキストは性愛規範を反復し、再生産するものである。しかしその一方で、時には作者の狙いにも背いて、文学テキストにおいて性愛規範は攪乱され、規範に潜む歪みが顕在化し、そうした歪みに抵抗が企てられもする。本論文でも、いくつかの文学表象の分析

を通じて、ホモフォビアが増殖されるのと同時に、それ自体が切り崩されるプロセスをたどってきた。博士論文を通して、ホモフォビアへの抵抗を試みる場合には、特定の文学作品の解釈が大きな力を発揮することを、私は改めて確信している。したがって、今後の研究でも、文学作品の丁寧な読みを繰り返すことで、性愛規範そのものを俎上へのせ、問い直し、ホモフォビアやホモフォビアと絡み合う様々なフォビアをほどいていくことを目標としていきたい。

男性同性愛の問題を「局所化」することなく、しかし、いたずらにそれを「一般化」することもなく、ジェンダー・セクシュアリティを扱う諸領域との繋がりも意識しながら、博士論文を出発点とした取り組みを継続していくことが、今後の私の研究課題になるだろう。

注

本論文の引用は、文語体のもの以外は、原則として新漢字・新仮名遣いにした。

序章

1 同性愛の「種族化」に関しては第3章で、『ソドムとゴモラ』Iにおける同性愛解釈は第7章で論じる。

2 古代ギリシアの市民階級で、年齢差に従って制度化されていた成人男性と少年との間の性愛も含めた関係。年長者による少年の教育という名目で正当化された。言うなれば、「性愛の要素が附加された師弟の絆」（セジウィック a 5）である。なお、フランス語の“pédérastie”は、いわゆる「少年愛」だけではなく、男性同性愛全般を指し得る言葉だが、その場合には、本論では原語とともに「男性同性愛」と記す。

3 そうなると当然、「同性愛」という言葉もある時代・ある地域のホモエロティックな現象にしか関わらないことになる。だが、本論では議論を円滑に進めるために、暫定的に同性愛を歴史・文化・社会を超えて、同性間の親密な感情・欲望・行為を包括的に示す言葉として用いる。特に、精神医学・性欲学のコノテーションを強調する場合には「同性愛」と括弧付きで記す。

4 『田夫物語』（寛永年間）では、「若衆狂ひ」の「華奢者」と「傾城狂ひ」の「田夫者」はまず美的価値によって「若衆」と「傾城」の優劣を論じるが、最終的に後者が生殖を持ち出し、「若道」を攻撃すると「華奢者」は反論の術を失う。一方、『色物語』（万治寛文年間）では、両者の議論の解決策としてある老人が「中庸」を説く。すなわち、「二つの道」に「かたよら」ないことが重要とされるのだ。「野傾論」からは当時の規範的な「男色」のあり方が読み取れる。

5 「クィア批評」に関しては、村山敏勝の説明が明瞭である。村山は、「最初からクィアであると疑う余地なく認定されるものは、むしろゲイ的ないしレズビアン的ないしトランスジェンダー的 etc…と呼ぶべきではないか」と断ったうえで、「クィア批評」を「一見固定した性的枠組みが機能している場所に斜めの線を引き、アイデンティティの機能を書き換えていく」作業であるとする。つまり、クィアに読むこと、「クィアする」ことで、「見えない欲望を引き出し、新たな解釈を生産すること」が目指されるのである（村山 14）。

6 上記の『ゲイ・スタディーズ』でも、単純に本質主義が唱えられているわけではない。キース・ヴィンセントは、「私たちはアイデンティティそのものに抵抗しながら、それを肯定しなければならない」と述べている。その背景には、「日本の同性愛者が社会的および政治的アイデンティティをいまだ十分持ち得ていない」にもかかわらず、1997年の時点で「最近の方法論」として構築主義による同性愛者のアイデンティティの脱構築が試みられつつあったことが挙げられる。「私たちにとっての「今日の問い」は、いかにホモフォビアと闘うかということである。いかなる理論的立場を取るか、いかなる学派に属するか、それは本質主義か、構成主義〔構築主義〕か、等々というのは二次的な問いに過ぎないのである」というヴィンセントの言葉は、『ゲイ・スタディーズ』の出版から約10年が経過した現在の日本においても、重大な意味を持っている（ヴィンセント・風間・河口 152, 154, 160）。『現代思想』の「レズビアン／ゲイ・スタディーズ」にも、ジュディス・バトラーの「批判的にクィア」といったクィア理論の基礎となる文献が収録されている。

7 一方で、飯田祐子は、『こころ』のホモソーシャリティにホモセクシュアリティを読み込む大橋論等を批判的に継承しつつ、この作品ではヘテロセクシュアリティが具体的には描かれず、しかし、男同士の絆を表象する際にもレトリックとして反復される点を指摘し、「女性を排除してもなお、異性愛が強制される」ことを強調する（飯田 274）。

8 「クィア」が「ゲイ」や「レズビアン」を周縁化してしまう危険性に関しては、ハルプリン (b 96-97)、河口 (62-65) で指摘されている。

9 本論文第2章で論じるが、「ホモセクシュアル・パニック」とは、イヴ・コゾフスキー・セジウィックが『男同士の絆』で提唱した概念で、異性愛を自認している男性が自己の同性愛の欲望に直面した際に陥るパニック状態を指す（セジウィック a 136-137）。

10 近年、性欲学に関連した資料の復刻が進んでいる。たとえば、不二出版の『性と生殖の人権問題資料集成』全35巻（2000年）、『同性愛関連文献集成』全3巻（2006年）や、現在、ゆまに書房から刊行中の『近代日本のセクシュアリティ』シリーズ全36巻など。

第1章

11 中沢新一は「兵児についての文献は、太平洋戦争の末期に、大量にあらわれる。それらの文献はどれも過度に精神主義的で、兵児と同性愛の問題については、隠蔽をおこなっている。この点、三品彰英の研究は、傑出している」（中沢 56）と三品論を評価する。三品論では「兵児二才」と「稚児様」の間の同性愛は「変態的欲求」と見なされ、その存在も疑わしいと述べられているが、「兵児二才」と「兵児山」の間のそれについては、「男色関係が存在したことはかなり顕著なこと」と認められている（三品 329）。なお、1943年の時点ですでに、鹿児島十六学舎などの現代風にアレンジされた例を除けば、「兵児二才制度」そのものは過去のものとして位置づけられている（三品 322）。

12 九州と「男色」の連関にはこうした政治的背景があり、リチャード・バートンが唱えた風土的な“Sotadic Zone”とは異なっている（バートン 140-141）。

13 男子学生集団の構成員の変遷も見逃せない（生方 a 43, 天野 125）。『キタ・セクスアリス』で描かれる明治十年代の男子学生の多くは士族の子弟であり、出身階層的には均質で、年齢の幅は大きかった。そのため、一枚岩的な男性ジェンダーを形成することはきわめて難しかったのである。言うまでもないが、「年長者／少年」という区分は年齢差に基づく「衆道」的結合を容易くする。一方、明治三十年代には学生集団は出身階層の面では多様化し、年齢の面では均質化されていった。そうした変化のため、「男色」が十分には機能しなくなったのだ。また、もちろん金井湛と森鷗外は同一人物ではないものの、1862年に生れた鷗外／林太郎自身も当然ながらこうした環境に身を置いており、非常に優秀で、異例の若さで進学した彼がつねに男子学生集団内で最年少の「少年」の位置に置かれていたことは容易に推測できる（長谷川泉 222 など）。

14 「龍陽」とは、中国の竜陽君が魏王の寵愛を得ていたというエピソードに基づいて、男性同性愛を意味する。

15 江戸川乱歩もこの点に注目し、1933年に書かれたエッセイの「もくづ塚」で「ホームーなどとは余りに突飛な比喩」だと述べつつも、「外国人が筋書だけを読んだとすれば、あの平田三五郎の物語は、いかにも『イリアッド』のある部分に似ていないこともない」と

記している（江戸川 k 166）。作者不明の『賤のおだまき』は明治大正昭和前半に渡って世界を駆け巡っていたのだ。

16 古川誠の分類によれば、「衆道」と「ペデラスティ」は「年齢階梯制にもとづく同性愛のパターン」ということになる。同時に、古川は「兵児二才制度」における「稚児様」に着目し、「年長者と年少者との力関係 [が] 逆転している」点を日本の「男色」の独自性として提示している（古川 d 125）。ただし、「ペデラスティ」において（美）少年は性的に受身である対象に過ぎなかったのかどうかは検証する必要がある。ハルプリンを辛辣に批判するカミール・パーリア（パーリア 254）などを参照のこと。また、三品が論じるように、「稚児様」を「衆道」の対象とすることは「兵児二才制度」では禁じられていた点にも留意しなければならない。

17 さらに、「僕」はそこに「後になって考えて見れば」という一言を加え、未来の時制を導入する。生方が指摘しているように、「僕」は明治時代の多くの「男色」の書き手と同様、学生集団を離れた「男色」にはいっさい言及しないが、この「後になって考えて見れば」には、学生集団を越えた「男色」の存続を読み込むことができる（生方 a 42）。「スクール・ボーイたちの同性愛」以外の男性同性愛が不可視化されていた明治期に、『キタ・セクスアリス』のこの一節の意味は小さくないだろう。

18 このように小森論では『キタ・セクスアリス』に散在している「男色」的エロティシズムが丁寧に読み取られているのだが、「男色」と「同性愛」を同一視しているため、たとえば古賀の結婚については、「結局、かつての男色者も妻帯し、普通の生活に入るか、社会そのものからドロップアウトしていくという設定になっている」と読み、物語の結末も、「男性的セクシュアリティ」が散らばっている“VITA SEXUALIS”は、同性愛を異端視する近代西洋医学を日本で構築した中心人物「陸軍軍医総監森林太郎に「捧げ」られる「告白」として封印されてしまった」とまとめられる（小森 d 257, 258）。しかし、本章の後半で読んでいくように、小森論の結論とは異なり、『キタ・セクスアリス』は「陸軍軍医総監森林太郎」が作った近代医学における同性愛解釈を裏切っていくテキストである。『キタ・セクスアリス』の男性同性愛表象を読み解くためには、同性愛の二重性に留意する必要がある。

19 鷗外の文学作品で「性欲」が持ち出されるのは、『キタ・セクスアリス』が最初ではない。たとえば、1909年3月に発表された『半日』の結末にも、「性欲の対象が妙な方角にそれるのを *perverse* だと云って、病的にする以上は、嫉妬の方角違になるのも病的ではあるまいか」（森 c 481）という一節がある。また、同年5月に発表された『追儼』では、『キタ・セクスアリス』と同様に、「自然派の小説」が引き合いに出され、語り手は、「僕のように五十近くなると、性欲生活が生活の大部分を占めてはいない」（森 d 590）と述べている。ただし、言及されてはいるものの、どちらの作品でも「性欲」が物語の主題になっているわけではない。

20 1908年3月22日に起きた出歯亀事件と、翌日に発生した平塚明子 [らいてう] と森田米松 [草平] が心中を計ったいわゆる「煤煙事件」、及び、自然主義の関連性は、金子 (37) などを参照のこと。

21 『饗宴』の登場人物の一人パウサニアスの演説によると、アフロディテには二種類ある。年長のほうはウラヌス神の娘、天の神ウラニアであり、年少のほうはゼウスとディオネの

娘、万人向けのもの、パンデモースである。天の神ウラニアが“Urning”の起源に置かれているのだ（月川 b 176-177）。ここからは、ウルリヒスが男性同性愛を崇高化しようとしたことが読み取れる。

²² 前田愛の調査によれば、鷗外は留学前にも、『槐西雑誌』の「雑説称變童始黄帝」の則、「乃多冒端麗小兒。未過十歳者。興諸童嫖戲。時便執燭侍側。種々淫状。久而見慣。視若当然。過三数年。稍長可御。皆順流之舟矣。」の欄外に“Zuchten der Urninge”と書き付けていた。彼は、青年時代から“Urning”の問題に関心を向けていたのである（前田 a 83）。

²³ この点については第4章で検討する。また、本章の冒頭でも触れたが、1890年に『衛生新誌』に発表された「男色の事」は「男色の事、クラフト・エエビングの書などに詳論せられたり」という出だしで始まり、以降、江戸時代の「かげま」の証文が詳細に紹介される（森 j 46）。ただし、この記事ではクラフト=エビングの名前が用いられているだけで、「かげま」が精神医学的に再解釈されるわけではない。

²⁴ 美少年の埴生を「生れながらの軟派」ととらえる「僕」の見方は、「醜男子」意識を抱きつつ、自己を「先天的失恋者」（森 a 113）、「美男に生れて来なかった」（森 a 142）と解釈する一節とも共鳴している。井上優が指摘するように、美醜を先天性や「遺伝」と結びつけること自体が「精神病学者」の見解である（井上優 120）

²⁵ もっとも、本論で引用した一節で「僕」が持ち出す「不自然」は「男色」だけに限定されない。矢部彰が論じるように、それは「親孝行」（森 a 142）を基盤とした「三角同盟」の「性欲」の抑制そのものも含意したものだろう（矢部 270-271）。

²⁶ キース・ヴィンセントは、「〈硬派〉は、女の退廃的な魅惑に対して免疫ができていますので、孝心を実践するとか勤勉に学んで国家に奉仕するとかいった伝統的な価値を他の誰にもまして支えることができるということを主人公は否定できなかった」（ヴィンセント a 129）と述べる。「硬派」が「女の退廃的な魅惑に対して免疫ができています」とは『キタ・セクスアリス』からは読み取ることができないし、また、「否定できな」いのは、「主人公」の金井湛というよりも、テキストとしたほうが妥当であると思われるが、『キタ・セクスアリス』の男性同性愛表象の問題点を端的に示した指摘である。

²⁷ 井上優は、金井が“VITA SEXUALIS”という書物を書き、読み返すことで「逸脱者を生み出す排除機能としての〈物語〉、〈物語〉の生成の持つ政治性や権力性そのものが、今や疑問視され、相対化される」と論じ、それゆえにこの書物は「文庫」へと封印されることになるかと読んでいる（井上優 127）。

²⁸ 『キタ・セクスアリス』における性愛の隠蔽と暴露を論じるヨコタ村上孝之は、この結末部分に触れ、「告白されるべきものとは、発表してはならないもの」であり、「発表してはならないものとは、暴露されるべきものである」（ヨコタ村上 160）と“VITA SEXUALIS”という書物が「暴露」される必然性を指摘する。

第2章

²⁹ 太田翼は、純一が「青年」ではなく、年長者の男性のホモエロティックな欲望を喚起する「美少年」という認識を持っていることを指摘し、この一節を引用して「むしろ「美少年」という認識に満足しているといった方が適切かもしれない」と述べる（太田 259）。一

方、本論文でも論じるように、女性相手では「美少年」という自己認識は純一の男性性を混乱させる。

³⁰ 生方智子は、『青年』で純一が目指す「新人」が「意識」によって「無意識」を管理する存在であることに着眼し、「純一にとって、「芸術家」になるとは、自らの「無意識」を「意識」の力によって統括する力を身につけることなのである」と論じて、「意識」＝“M”による「無意識」＝“W”の統制の試みを指摘する。同時に、『青年』では純一が実際に小説を書くわけではないため、その不十分さも示唆される（生方 b 9, 11-12）。

³¹ 大村は続けて、女性を「娼妓のタイプと母のタイプ」（森 b 364）に二分し、「恋愛」は「凡て男子の構成した幻影」（森 b 365）だと結論づけるワイニンガーの説を純一に紹介する。大村経由のワイニンガーによって純一の「恋愛」の理想は否定されるのだが、彼は「そんな事を考えると、厭世的になってしまいますね」（森 b 366）と言うだけで、反論するわけでもない。なお、『男女と天才』では同性愛も取り上げられている。“Homosexualität”は「同種性慾」と訳され、男性の中の“W”の要素、女性の中の“M”の要素の多さによって説明される（ワイニンゲル 48-54）。そこには“Urning”との共通点も見出せる。

³² この作品には鷗外自身をモデルにしたと考えられる、鷗村なる作家への言及もあり、「みずみずしい青年の中にはいつまでかまごついている人」（森 b 278）と称されている。鷗村と鷗外を重ね合わせると、彼は、純一や大村のような「みずみずしい青年」の間を「まごつきながら、『青年』を創作していると解釈できる。同時に、「みずみずしい青年」という表現が放つエロティシズムも見逃せない。一方で、純一は物語の冒頭で「東京方眼図」（森 b 275）を頼りにしているのだが、1909年にそれを編集したのは鷗外である。そこからは、一見、「まごついている」ように見せつつも、実は、「みずみずしい青年」の「欄干」になっているという仕掛けが浮かび上がってくる。

³³ 一方、純一と同郷の瀬戸速人などは、「フランスは読めない」（森 b 353）ことが強調され、仏文学が結ぶ純一と大村の「友情」から容赦なく除外される。

³⁴ 反対に「年長者」ではない瀬戸は、純一の「黒く澄んだ瞳」を「頗る不愉快」に感じている（森 b 281）。

³⁵ 太田翼は、大石がはじめ純一のことを「少年」と認識し、だが実際には「青年」という言葉を発するという使い分けに着目し、『キタ・セクスアリス』で「少年」が「男色の受身」という意味で使われていたという一節も踏まえつつ、「大石の世代の人間にとっては、「少年」という語は、性的イメージ […] の付随するものであったのだろう」と論じている（太田 256-257）。

³⁶ 太田翼は、この名刺の場面に着眼し、「男同士の結びつきに女性を入れまいとしているようでもある」と述べる（太田 260）

³⁷ もっとも藤森論文でも、「男色」と「ホモソーシャル体制下でのホモセクシュアル」は「別のもの」と補足されており（藤森 133），“homosexuel”という語の「暗いオーラ」は「明治四十年代の現実の青年」、あるいは、作者の鷗外自身には「どれほどの力をもちえたかは定かではない」とも記されている（藤森 131）。それに対して、本論文は、“homosexuel”の「暗いオーラ」が『青年』という作品でも、十分な効力を持ってはおらず、難なく解消される点を強調するものである。

38 生方論文『キタ・セクスアリス』と男色の問題系』では、補足的に『青年』の“homosexuel”にも言及され、「異性愛が自然化されていく道程」にあると指摘される（生方 a 44）。しかし、本論文で論じてきたように、『青年』では、“homosexuel”は“hétérosexuel”を単純に「自然化」するものではない。テキストでは“homosexualité”の読みかえが試みられているのだ。

39 第1章でも触れたように、「外情の事を録す」や「性欲雑説」といった医学テキストでは、鷗外／林太郎は、「男の男と交わるもの」、「鶏姦」、「素股」、「男子相姪、女子相姪」といった同性間の性行為にも目を向けている。

第3章

40 同時代の河岡だけではなく、現在に至るまで『キタ・セクスアリス』における精神医学的な「同性愛」概念は読み落される傾向にある。たとえば、千葉一幹は、オナニズムは早い時期から小説の中で「恥ずべき悪習」として表象されたのに対して、「男色ないしは同性愛についてはそれを「異常性欲」とし、恥ずべきものと捉える視点がなかなか現れなかった」と論じ、この文脈で『キタ・セクスアリス』を引き合いに出している。だが、第1章で検証したように、『キタ・セクスアリス』には、同性愛を「異常性欲」と見なす「精神病学者」の視点、すなわち、“Urning”はすでに存在している。ただそれが十分には機能していないのである。文学テキストに「異常性欲」としての「同性愛」が持ち込まれるのは、千葉が言うように「三島由紀夫『仮面の告白』まで待たねばならない」わけではないということは強調される必要がある（千葉 122, 123）。

41 「性科学」という枠組みは1906年にイワン・ブロッホによって作られたと言われる。それはドイツ語で「性に関する知」を意味する“Sexualwissenschaft”である。ブロッホが1914年に創刊した『性に関する知の雑誌』には、いわゆる自然科学だけではなく哲学や文学も含まれていた（上野 37）。『変態性欲論』でも“Sexualwissenschaft”が「性欲学」の語源と明記されている（羽太・澤田 24）

42 斎藤光は、クラフト=エビングの「異常性欲」概念の「揺れ」と「発展」を指摘している。*Psychopathia Sexualis*に“Homosexualität”という概念が頻出するのは、1888年の第三版以降である（斎藤 a 154）。ただしそもそも、“Urningtum”、“Homosexualität”、“conträre Sexualempfindung”はそれぞれに関連性の深い概念であることにも注意しよう。

43 後天的な同性愛が実践される場としては、「監獄内、船中、及び寄宿舍内」が挙げられる（クラフト=エビング 228）。本論文ではその中でも「寄宿舍」が重要な場となる。

44 反対に「バイセクシュアリティ」もいわゆる「両性具有」を指す言葉である。竹村和子はバイセクシュアリティの曖昧さに関して、「あるときはそれが主語の組成にかかわるもの——つまり一つの個体に男女両方の性をもつ両性具有と同義——に考えられ、またあるときは、述部を構成するもの——つまり性的関心をむける対象を男女の両方とする性指向——として理解される」と説明する（竹村 b 248）。

45 男性の「同性色情者」を示す言葉として“Urning”が用いられていることにも注目したい。ウルリヒスの定義を確認すれば、“Urning”とは「男の身体に囚われた女の魂」を意味する。したがって、第三「階級」の「婦女的男子」、あるいは、第四「階級」の「女化」

のほうがふさわしい。『変態性慾心理』では“Urning”の原義からのズレが指摘できるのだ。

⁴⁶ ハヴロック・エリスは1897年に出版した『性対象倒錯』で、クラフト=エビングの細分化された分類法を批判している（エリス89）。

⁴⁷ La sodomie — celle des anciens droits civil ou canonique — était un type d'actes interdits; [...] L'homosexuel du XIX siècle est devenu un personnage : [...] Il ne faut pas oublier que la catégorie psychologique, psychiatrique, médicale de l'homosexualité s'est constituée du jour où on l'a caractérisée [...] moins par un type de relations sexuelles que par une certaine qualité de la sensibilité sexuelle, une certaine manière d'intervertir en soi-même le masculin et le féminin. L'homosexualité est apparue comme une des figures de la sexualité lorsqu'elle a été rabattue de la pratique de la sodomie sur une sorte d'androgynie intérieure, un hermaphrodisme de l'âme. Le sodomite était un relaps, l'homosexuel est maintenant une espèce.

第4章

⁴⁸ 後天的な同性愛は「単純なる顛倒的同性間性慾」、「男性脱化及び女性脱化」、「偏執性変態性慾」と三つの「階級」に分けられており、クラフト=エビングの「偏執性色情的変態への移行級」、「偏執的色情的変態」が一つになっている（羽太・澤田115-144）。

⁴⁹ 田中香涯は、澤田をあてこすって、「道学者流の空論横議が大に幅を利かしつつある」と日本の状況を嘆いてみせる（田中 a 2, 斎藤 c 8）。とはいえ、「変態性慾」に関する田中と澤田の見解の間に本質的な差異はない。

⁵⁰ ただし、澤田順次郎が記した「序言」では、『変態性慾論』の読者は「相当の学識あるもの」と想定されており、続く本論の方向性との間に齟齬が生じている（羽太・澤田 序言 3）。

⁵¹ 性欲学者が全員田中と同じ見解であったわけではない。『変態性慾論』では、「裏面に廻れば、昔を今と変わる男娼の、尚も其所此所に、潜めるものありと聞く」（羽太・澤田185）と同時代の男娼も考慮に入れられている。

⁵² 「中条」は、水銀を使用した墮胎剤で有名な医学の流派中条流に由来する。よし町〔芳町〕は、堺町や湯島とともに「陰間茶屋」で有名であった町。

⁵³ 澤田の『神秘なる同性愛』にも「薩摩隼人の武骨にして、士気の溢れたるは、女性を排して、男性を近づけたる結果なりと、説明することは、必らずしも不当ではないけれども、薩摩隼人の歴史的関係を度外して、之れを単に男性愛に帰するのは、浅見も亦、大なりと謂うべきである」（澤田 20）というフリートレンダーを想定した一節がある。しかし、『変態性慾論』とは異なり、「単に男性愛」だけが理由として持ち出されることが批判されているのであり、「英傑」と男性同性愛の関係が完全に「不当」と見なされているわけではない。また、田中香涯は、フリートレンダーが「男色の社会的許可と男性的能力の養成との間に原因関係のあることを論じ」た点に反論し、「謬見僻見」と述べる（田中 d 171）。薩摩の「男色」は「封建時代に於ける遺風の存する」ためであり、そこでは「花も恥じらう美少年」や「よか稚児」が特権化されていることから、むしろ「女色」に近いと結論づけている（田中 d 172）。したがって、田中も薩摩とホモエロティシズムの連関そのものは認めているの

である。

⁵⁴ 『変態性慾論』には「軍隊に於ける男色」という項目があり、「頗る多き」と評されているのだが、そこでも同性愛はあくまでも禁じるべき「変態性慾」の一つとして位置づけられている（羽太・澤田 194）。もっとも、羽太や澤田の目論見とは別に、性欲学以後も、両者を結びつける言説は流通した。たとえば、『犯罪科学』1930年11月号に掲載された丸木砂土の「愛する戦友」は、「軍隊に於ける恋愛の一つが、同性愛である事は、僕等が目睹し、同感し、且同情する事柄である」と始められ、同性愛と友愛が連続的に解釈されている。しかもこの記事では、性欲学者が否定しようとしていた、軍隊内部のエネルギーとしての男性同性愛の役割も暗示されている（丸木 84, 85）。

⁵⁵ 赤川学によれば、性欲学系の雑誌は都市部だけではなく農村部でも、男性だけではなく女性にも読まれていた（赤川 296）。確かに、『変態性慾』にも女性の読者からの手紙が掲載されているが、少なくとも同性愛関連の手紙に限定すれば書き手はすべて男性である。なお、本論文で扱う男性同性愛者からの手紙に関しては、岩田準一の『男色文献書志』（岩田 434-435）に掲載されている文献に当たり、プラグフェルダーの『欲望の作図法』（Pflugfelder 299-300）を参考にした。

⁵⁶ 田中香涯ら性欲学者の見解に同一化した『変態性慾』の読者の多くは、精神面の女性化によって自らの同性への欲望を解釈しているのだが、同時に、肉体面での女性化には違和感を示している。1923年1月号で、岡山天紅生は、「私は世の変態者が持つ特有の女性的分子は精神的には有り得るようですけど、[...] 私の風采は之と正反対です」と綴っている（岡山天紅生 46）。1923年3月号の戸塚A生も、「二月号所載の「女性的男子」は、殆んど感謝の涙を流さん程の歓びを以て拝読いたしました。或る個所に至っては、先生が私の胸底を何時の間にか探り知られたのではないかとすら思われました」と田中の論考「女性的男子」に一体化しているものの、外見は「男性的」で、「男性的男色者の中でも特別なものではないかと思えます」（戸塚A生 129）と記している。ここからも、ホモセクシュアリティとトランスセクシュアリズムの連続体で同性愛を解釈するやり方の綻びが見える。

⁵⁷ *l'apparition au XIX siècle, dans la psychiatrie, la jurisprudence, la littérature aussi, de toute une série de discours sur les espèces et sous-espèces d'homosexualité, d'inversion, de pédérastie, d'« hermaphrodisme psychique », a permis à coup sûr une très forte avancée des contrôles sociaux dans cette région de « perversité » ; mais elle a permis aussi la constitution d'un discours « en retour » : l'homosexualité s'est mise à parler d'elle-même, à revendiquer sa légitimité ou sa « naturalité » et souvent dans le vocabulaire, avec les catégories par lesquelles elle était médicalement disqualifiée.*

なお、翻訳では、渡辺守章は“discours « en retour »”を「「反動として」の言説」と訳しているのだが（フーコー131）、この渡辺訳の問題点については、キース・ヴィンセントが『ゲイ・スタディーズ』で指摘している（ヴィンセント・風間・河口 80-84）。

第5章

⁵⁸ 『犯罪科学』創刊号1930年6月号の巻末の宣伝。

⁵⁹ 1930年に「同性愛考」というエッセイを記した浜尾四郎も、読者からの反響の多さを、

続編の「再び同性愛に就いて」で述べている。手紙の書き手は「その遠きは日本のはずれ、その近きは余の居住せる東京市からであるが執筆者はいずれも男性で皆可なり極度のウールニング（同性愛者）」（浜尾 b 58）であったという。本論文の第4章で検討した、性欲学者と読者である男性同性愛者との間で行なわれた交流は、「エロ・グロ・ナンセンス」期の雑誌記事の書き手と読み手の間にも指摘できるのである。

⁶⁰ 聞き手の役割を果たすBも、Aに向かって「かげまの中でも特に目立って変態なのはいないかね」（三村 a 131）、「その他に、まだ特種なのはいないかね」（三村 a 133）とさらなる「奇」を狩猟しようとする。構造上も「猟奇的」なテキストになっているのである。

⁶¹ 浜尾四郎も「同性愛考」で、美青年を相手に性的に“passive”になる「四五六の紳士態の男」に焦点を当てている（浜尾 a 141）。

⁶² 一方、「新東京陰間團」の続編である「ある陰間の一姿態」は、1931年に、ヒルシュフェルトが来日した際に発表された。内容を概観すれば、「研究材料」（三村 b 222）の提供という名目で、三村はヒルシュフェルトに浅草公園の「陰間」を引き合わせようとする。「髪をきれいに分けた、痩せ形の、二十歳前後の青年」を見つけ、「顔の手入れの行き届いていることと、言葉に何処か女性的の処がある」ため、その青年が「陰間」であると目星を付ける（三村 b 223）。ところが、肝心のヒルシュフェルトがホテルに帰ってしまったため、彼の計画はあえなく失敗する。ここで重要なのは、ヒルシュフェルトの研究に協力する名目とはいえ、アルコールや金銭によって青年と「取引」（三村 b 224）する三村の行動が、「新東京陰間團」で示された「かげま買い」とほとんど見分けがつかない点である。同性愛を「性の中間段階」や「第三の性」などと「局所化」して定義した性科学の大家ヒルシュフェルトを歓迎した記事であるにもかかわらず、このテキストでも「変態性」は「一般化」しているのである。

⁶³ 「浅草趣味」や『一寸法師』の他にも、乱歩の作品では、「猟奇」趣味を満たす究極の素材として男性のホモエロティズムが持ち出され、しばしば浅草に結びつけて表象された。たとえば、『屋根裏の散歩者』（1925年）では、「どんな遊びも、どんな職業も、何をやって見ても、一向この世が面白くない」（江戸川 e 497）という主人公の郷田三郎は、浅草で女装をして他の男性と「きわどい悪戯」（江戸川 e 502）を行なうことに快楽を見出す。『屋根裏の散歩者』のホモエロティックな「悪戯」は、『陰獣』（1928年）では、「猟奇の趣味が嵩じ」て、「夜女装をし、浅草をぶらついた。そして、男と恋の真似事さえやった」探偵作家のエピソードとして継承されている（江戸川 f 656）。また、『猟奇の果』（1930年）では、主人公の「猟奇家」の青木愛之助は浅草で「アサクサ・ストリート・ボーイズ」、「浅草ウールニング」と思しき美青年に遭遇する（江戸川 g 417-420）。

⁶⁴ 物語が進むと、「一寸法師」は、死体の手首を銀座の百貨店の「お梅人形」（江戸川 a 540）のそれとすげかえたり（人形の人間化）、「キューピー人形」（江戸川 a 657）の内部に手足を切断した人間の死体を塗り込んだり（人間の人間化）、「人間／人形」の境界線を意図的に揺さぶることになる。

⁶⁵ 「遊人風の男」は「純粹の浅草人種」と称される。光文社文庫版の注を参照すると、「浅草人種」とは「繁華街浅草、特に六区 […] を好んで逍遥する人々のことで、銀座新宿の客と違って学生、店員、職人などがその多くを占めていた」（江戸川 a 740）という。浅草

に集う人々が「人種化」されていたのだ。そうすると、『一寸法師』冒頭に登場する、紋三、「一寸法師」、男性同性愛者、巡査などはみな「浅草人種」になるわけだが、その中でも男性同性愛者が「一種異様の人種」とことさらに特殊化されているのである。

⁶⁶ 「衛生博覧会」とは、もともとは衛生学を啓蒙するための催し物であったが、性病、出産、病変部位、死体などに関する模型や蠟人形の展示を中心としており、観客の好奇心、特に性的好奇心をそそるものであった。博覧会がブームになった大正時代には、「死体（標本）や人形が入り混じって展示されている […] グロテスク趣味の見世物」（田中聡 106）になっていたのである。

⁶⁷ 『一寸法師』の続きをたどれば、「一寸法師」だけではなく、名探偵明智小五郎も「一種異様の人種」の一員になる。上海帰りで「支那服」（江戸川 a 526）を着た明智は、クライマックスでは、人形師の仕事場で「人形共と見さかい」（江戸川 a 649）がつかなくなる。それは「生人形」のような「一寸法師」とも、「衛生博覧会」の「人体模型」へと変貌する男性同性愛者とも類似したものである。

⁶⁸ 『一寸法師』全体と新聞記事の「相補性」に関しては成田（55, 63）を参照のこと。なお、『朝日新聞』大阪版では翌日、1926年12月11日に「前科男が陥ちた奇怪な同性愛」という見出しで報道されている。特に、「奇怪な同性愛」の文字が強調されており、犯行に至るまでの経緯が詳しく記される。大阪版ではこの記事は5頁で、『一寸法師』は裏面の6頁であり、両者はまさに接続している。

⁶⁹ 本論文の第7章でも触れるが、「同性愛の感染性」とは同性愛表象においてしばしば言及される重大な論点である。とりわけ、いわゆるエイズ・パニックを経験した1990年前後の日本で発表された、エイズを男性同性愛者に転嫁した文学作品では、実際のウィルスを通して、「同性愛の感染性」が発揮されている。島田雅彦の『未確認尾行物体』（1987年）や筒井康隆の『文学部唯野教授』（1990年）などが挙げられる。両作品では強烈なホモフォビアのもとで、男性同性愛者は異様なもの、「神出鬼没」（筒井 69）な「テロリスト」（島田 52）と見なされ、病理化される。だが、ヒト免疫不全ウィルス、すなわち、HIVは「正常者」と「異常者」、「われわれ」と「彼ら」を問わずに感染するものであるため（ソクタグ 43-44）、「正常者」の体内に「異常なるもの」が取り込まれることになる。「正常」であるべき「男性異性愛」が脆弱性を露にし、結果的に「同性愛／異性愛」の二元論が無効化されるのだ。あたかもすぐれたクィアの実践であるかのように、あからさまにホモフォビクなエイズ表象は、性科学・性欲学規範を問い直してもいるのである。

第6章

⁷⁰ 『探偵小説四十年』によると、『孤島の鬼』執筆に際して、乱歩は三重県南部の漁村に避寒し、鳥羽在住の岩田に「宿へ来てもらって、毎日舟に乗ったり、村の附近を散歩したり、寝ころんで話をしたりして日を暮らした」。岩田が持参した『鷗外全集』の『キタ・セクスアリス』に出てくる「中国の片輪者製造の話」が、『孤島の鬼』の「不具者製造」にインスピレーションを与えたという。なお、乱歩と岩田は6歳差であり、諸戸と「私」の年齢差に合致し、乱歩自身も二組のペアを重ね合わせるような記述をしている（江戸川 1384）。それをフィクション化したものが岩田の孫に当たる岩田準子の小説『二青年凶』である。

71 「私」の名前は「蓑浦」であるが、それが読者に明かされるのは、学生時代に「諸戸と蓑浦は変だ」（江戸川 b 30）と噂されたことによる。つまり、諸戸との「変」なペアの片割れとして「蓑浦」は物語に登場してくるのだ。この点は橋本治も指摘している（橋本 53-54）。

72 日本の性欲学者は少年期・少女期の同性愛をどのように解釈したか、いくつか例を出そう。羽太と澤田の『変態性慾論』では、子供は「性的中性」（羽太・澤田 94）と規定され、学校や寄宿舎の同性愛は「男女関係の欠乏したるもの」（羽太・澤田 104）の一例として後天的な同性愛に含められる。ただし、論の後半では「学生間に於ける男色」は先天的なそれの一例となっており、矛盾が生じている（羽太・澤田 186-190）。また、澤田は単著『神秘なる同性愛』で、自身の少年時代の同性愛を想起しつつ、「幼少時代或いは壮年時代」には「一時性同性愛」がしばしば見られることを指摘し（澤田 上 12）、「幼時に起こりたる同性愛が、中絶することなくして、永く続き、而して破瓜期の際、異性愛が起こらずして、同性愛のみ成立せし時に、初めて先天性なりと謂うことが出来る」（澤田 上 40）と論じる。もっとも彼も著書の後半では、寄宿舎が同性愛という「病毒の潜伏所」になっており、それを「消毒」することが必要だと警戒を強めている（澤田 下 125-127）。一方、田中香涯は、「小児時代に於て何人も屢々同性に対する愛情の起る」とし、「併し健全なる心性を有するものでは、次第に此の如き傾向が消失して異性を愛するようになるが、之に反して心性に異常があり、或は遺伝素質を有するものでは、猶依然として同性に対する愛情の傾向の留存することがある」（田中 b 52）と述べる。性欲学者もクラフト=エビングと同じように、同性愛そのものは「局所化」し、しかし、少年期・少女期のそれは「一般化」して解釈するのである。

73 男性同性愛と女性嫌悪を結びつける言説は、精神医学においてだけではなく、「男色」を主題とした前近代の文献にも見出せる。たとえば、井原西鶴の『男色大鑑』の「詠めつづけし老木の花の頃」では、16歳と19歳の頃に「若道」（井原 b 441）の契りを結び、当年、63歳と66歳になった主水と半右衛門の絆が主題となっているのだが、彼らは、軒先で雨宿りをする女性を「むさしきたなし、立ちのけ」と追い払い、この逸話は「これ程女嫌い、江戸広しと申せども、又見た事もなし」と締めくくられる（井原 b 443）。

74 乱歩はフロイトに傾倒していた時期があるが、『孤島の鬼』はそれに先んじている。ただし、1929年より春陽堂が『フロイト精神分析学全集』全10巻を刊行しており、この時期の乱歩が、部分的、あるいは、間接的にでもフロイトの同性愛解釈に触れていた可能性も否定できない。なお、1933年に乱歩は全集を訳した大槻憲二の「精神分析研究会」に参加するようになるのだが、それは「精神分析には同性愛が非常に大きな題目として取扱われて」おり、「会員の中にも同性愛研究に興味を持っている人が二三ならずいた」ためであったと乱歩自身が語っている（江戸川 1546）。

75 澁澤龍彦は、「乱歩の少年小説にも、どことなく倒錯的なエロティシズムの匂いがする」と述べ、「師弟関係や男の友情のなかに、無意識の男色趣味の匂いを敏感に嗅ぎつけるほど、大方の日本の読者は洗練された小説の読み手ではないのであろう」（澁澤 138）と皮肉を込めて語っている。

76 本論で引用した一節は「生地獄」が頂点に達しようとする瞬間に唐突に幕が引かれる。橋本が指摘するように、ここでは「私」と諸戸の間の何か、すなわち、性行為を隠すこと

で見せる手法が用いられている（橋本 55）。なお、「生地獄」が中断された後、「私」と諸戸が洞窟から脱出する過程で、徳さんから蟹の生肉が与えられる。二人は「まだモヤモヤと動いている太い足をつぶして、その中のドロドロしたものを啜る」（江戸川 b 311-312）。それはきわめてホモエロティックな描写であり、フェラチオとペニスから溢れる精液を想起させる。あたかも中断された男性間の性行為をほのめかしているかのようである。

⁷⁷ 「フリーク」には「楽しい」が、「余生」しか残されなくなる（江戸川 b 329）。この「立派な不具者の家」（江戸川 b 329）が「諸戸屋敷」の裏返しであることは明白であり、「私」は丈五郎のように君臨する。「鬼」としての「私」のイメージは払拭されないのである。

⁷⁸ アンゲルスはそこに「ロマンティックな恋人」としての諸戸の姿を見、彼がただの「性慾倒錯者」として終わっていない点を強調し、同性愛へのネガティブなイメージがかき乱される端緒を指摘している（Angles 223）。それは間違いではない。『一寸法師』にせよ、『孤島の鬼』にせよ、アンゲルスは乱歩作品の丁寧な読解を実践している。ところが、彼は「同性愛／異性愛」の二元論を暗黙の前提としており、乱歩のテキストに見出せる境界侵犯性をほとんど読み取っていない。本論文で繰り返し述べているように、私は、乱歩テキストが、性科学・性欲学が構築した「同性愛／異性愛」の二律背反を再生産すると同時にそれを攪乱する点を重視している。

第7章

⁷⁹ 1. Avez-vous remarqué que la préoccupation homosexuelle se soit développée en littérature depuis la guerre ? [...] A quelles causes attribueriez-vous le développement de cette préoccupation ?

2. Pensez-vous que la présentation dans le roman, dans la poésie ou au théâtre, de personnages invertis, puisse avoir une influence sur les mœurs ? Est-elle nuisable à l'art ?

3. Si vous croyez qu'on doit combattre cette tendance, par quels moyens ? Si vous croyez qu'on doit la tolérer, pour quelles raisons ?

なお、『マルジュ』誌で問われるのは“homosexualité”であるが、回答者の多くは男性のそれを想定して答えている。『マルジュ』誌の特集、及び、フランソワ・ポルシェの著作に関しては、原田武『プルーストと同性愛の世界』で知った。

⁸⁰ プルースト、ジッド双方の名前を出している回答者は、ジェラルド・バウアー、ピエール・ボナルディ、レオン・デュフー、ジョゼフ・ジョリノン、ラ・フシャルディエール、カミーユ・モクレール、ジョルジュ・モルヴェール、フランソワ・モーリヤック。プルーストのみに言及するのは、ジャン・カスー、アルベール・フラマン、ルイ・マルタン＝シオフィエ、オクターヴ・ユザンヌ。ジッドのみは、ピエール・ドミニク、ギー・ラヴォー、ジャン・ド・グールモン。ピネ＝ヴァルメールの『リュシアン』（1910年）の主人公リュシアンと比べて、シャルリュスやコリドンが「興味深い」（Marges 26）キャラクターであるからこそ、それらに注意しなければならないという回答もあった。

⁸¹ Naguère encore, être convaincu de mœurs « inavouables » jetait un certain discrédit sur un écrivain; aujourd'hui au contraire de son vice il tirera du lustre, les snobs

l'admireront, les salons le fêteront : il sera moderne, il sera « à la page ». D'où un certain nombre d'auteurs pédérastes, et davantage encore d'auteurs qui feignent de l'être.

⁸² Certains livres — ceux de Proust en particulier — ont habitué le public à s'effaroucher moins et à oser considérer de sang-froid ce qu'il feignait d'ignorer, ou préférerait ignorer d'abord. [...] Mais ces livres, du même coup, ont beaucoup contribué, je le crains, à égarer l'opinion. La théorie de l'homme-femme [...] que lançait le Dr Hirschfeld en Allemagne, assez longtemps déjà avant la guerre, et à laquelle Marcel Proust semble se ranger — peut bien n'être point fausse; mais elle n'explique et ne concerne que certains cas d'homosexualité, ceux dont précisément je ne m'occupe pas dans ce livre — les cas d'inversion, d'efféminement, de sodomie.

⁸³ サナトリウムの少年は、おそらくは日光浴療法のため、「日に黒く焼けた、そして唇だけがほのかに紅い色をしている細面の顔」(堀 a 221) をしている。「静脈の透いて見えるような美しい皮膚」(堀 a 212) をした三枝とは対照的であり、少年は、あたかも黒人であるかのように表象される。第5章で指摘した、「エロ・グロ・ナンセンス」の「グロ」のもとでの黒人表象と男性同性愛表象の接近が、同時期のものではあるが、「エロ・グロ・ナンセンス」とは無縁と思われる『燃ゆる頬』にも見出せるのではないだろうか。

⁸⁴ 初出は『新潮』1932年2月号の「文藝時評」。島崎藤村の『夜明け前』や泉鏡花の『菊あわせ』とともに『燃ゆる頬』も論じられている。ただし、同誌同号に掲載されたのは「驚くべきである」まで。それ以降は1939年に新潮社から堀が『燃ゆる頬』のタイトルで短編集を刊行した際に「推薦の言葉」として付け加えられた(『新潮』1939年6月号)。

⁸⁵ 深澤晴美の指摘による。深澤は三島の『煙草』や『燃ゆる頬』と関連づけて川端の『少年』を論じている(深澤 151-153)。

⁸⁶ 『燃ゆる頬』以前にも、堀は性愛の揺らぎを扱っている。『不器用な天使』(1929年)では、語り手で主人公の20歳の「僕」は最初、男性の友人槇が「「ものにしよう」として夢中になっている一人の娘」に向ける「はげしい欲望」に同一化し、彼女に欲望を抱く(堀 b 8)。しかし、彼女と「シネマ・パレス」で「エミル・ヤニングスの『ヴァリエテ』」という映画を観た後、「彼女がいま無意識のうちにヤニングスの肩と槇の肩をごっちゃにしている」ことを感じ取り、今度は彼女に同一化し、槇を欲望するようになる(堀 b 24-25)。こうした曖昧な性愛の表象に、1931年以降に受容したプルーストの男性同性愛表象が肉付けをし、『燃ゆる頬』という作品が実を結んだと思われる。なお、1933年に『文藝春秋』に発表した『顔』でも、主人公の路易と「年上の円盤投げの選手」、「瘠せた少年」の三角関係(堀 c 270)と性的「混乱」(堀 c 282)が取り上げられる。

⁸⁷ Puis me rendant compte que personne ne pouvait me voir, je résolu de ne plus me déranger de peur de manquer, si le miracle devait se produire, l'arrivée presque impossible à espérer [...] de l'insecte envoyé de si loin en ambassadeur à la vierge qui depuis longtemps prolongeait son attente. Je savais que cette attente n'était pas plus passive que chez la fleur mâle, dont les étamines s'étaient spontanément tournées pour que l'insecte pût plus facilement la recevoir; de même la fleur femme qui était ici, si l'insecte venait, arquerait coquettement ses « styles » et pour être mieux pénétrée par

lui ferait imperceptiblement, comme une jeune fille hypocrite mais ardente, la moitié du chemin.

『ソドムとゴモラ』Iの引用は翻訳（鈴木道彦訳）を参照しつつ、原則的に拙訳した。

⁸⁸ 『燃ゆる頬』の初出では、現行テキストの「名前を知らない真白な花」が「蘭の花」、「なまめかしく」が「コケティッシュに」と記されており、『ソドムとゴモラ』Iとの対応関係はより露骨なものになっている。1933年12月に四季社の四季叢書第三篇として出版された『麦藁帽子』に収録されたテキストでは現行のバージョンである。

⁸⁹ 堀は、「フローラとフォーナ」（1933年）というエッセイで、『ソドムとゴモラ』にも触れ、プルーストは「人間を^{フローラ}植物として見る。決して^{フォーナ}動物として見ない」（堀 d 401）と述べ、「僕なんかも flora 組かも知れない」（堀 d 403）とプルーストへの共感を露にしている。

⁹⁰ *Clignant des yeux contre le soleil, il semblait presque sourire, je trouvai à sa figure vue ainsi au repos et comme au naturel quelque chose de si affectueux, de si désarmé, que je ne pus m'empêcher de penser combien M. de Charlus eût été fâché s'il avait pu se savoir regardé ; car ce à quoi me faisait penser cet homme qui était si épris, qui se piquait si fort de virilité, à qui tout le monde semblait odieusement efféminé, ce à quoi il me faisait penser tout d'un coup, tant il en avait passagèrement les traits, l'expression, le sourire, c'était à une femme !*

⁹¹ 当時のフランスでもアンドレ・ラファロヴィッチは『ユラニスムとユニセクシュアリテ [Uranisme et Unisexualité]』（1896年）で先天性に基づいて同性愛の解放を唱えた。

⁹² ジャン・コクトーの『白書』（1928年）も『燃ゆる頬』の男性同性愛表象に影響を与えたと考えられる。堀は、『ソドムとゴモラ』に関心を示していた1931年に、葛巻義敏宛の手紙に「そのとき又コクトーの『白い本』を借りたい」（4月（推定）16日）（堀 g 70）、「ちょっとまたコクトーの『白い本』が読みたい」（10月31日）（堀 g 76）とコクトーの「白い本」＝『白書』への興味を綴っている。特に、『白書』に登場するダルジュロスという男子学生と魚住との間には明白な対応関係が見て取れる。

⁹³ ここから同性愛者の「仮面をはがす」ことに専心する「私」自身も同性愛者ではないかという読みが可能になる。『ソドムとゴモラ』Iの途中で、「私」は「結局、少なくとも彼ら [同性愛者] の多くは、他の種族の人々 [異性愛者] とのやさしく危険な親密性の中で暮らし、その人たちを挑発し、自らの悪徳をまるでそうではないかのように話して戯れるのだが、相手の盲目、あるいは誤りによって、このゲームは容易になり、これら調教師たちが飲みこまれるスキャンダルの日まで、何年も続けられることもある」（Proust 19）とさりげなく語っている。あたかも自らを同性愛者であると読ませるかのような挑発的な「ゲーム」が読者との間に仕掛けられるのである（黒岩 a 304-305）。

終章

⁹⁴ 第7章で触れた『燃ゆる頬』についての川端康成の「推薦の言葉」も『新潮』の1939年6月号に掲載され、それ以降、7月号、8月号と短縮されながらも再掲載されている。ここでは『燃ゆる頬』の主題として少年間の同性愛がむしろ強調されている。換言すれば、

1939年の時点でも「同性愛」が「推薦の言葉」として機能し得たのだ。『燃ゆる頬』を含めた堀の9編の短編小説集は同年に新潮社から刊行されている。

⁹⁵ 『仮面の告白』とコクトーの『白書』の男性同性愛表象の対応関係も指摘できる。『白書』のリセ・コンドルセでも男子学生の間で遊戯的な同性愛は「一般化」していた。しかし、「私」は自身のダルジュロスへの欲望を「私の性質 [nature]」(Cocteau 200) に結びつけ、「局所化」し、他の同級生と一線を画したものとして解釈する。なお、三島は1949年7月19日付の式場隆三郎宛の手紙の中で「ジャン・コクトーの *Livre Blanc* という稀購本」に触れている(井上隆史 35, 三島 d 514)。

⁹⁶ 『仮面の告白』の「私」も、一貫して自身よりも社会的に下のものと見なされる階級に属する男性に欲望を向けている。物語の最後で「私」は、「廿二三の、粗野な、しかし浅黒い整った顔立ち」をした「半裸」の若者の「腋窩のくびれからはみだした黒い叢」や「引締った腕にある牡丹の刺青」への「情慾」に襲われている(三島 a 361, 362)。ただし、『仮面の告白』には、「私」以外に男性同性愛者であるキャラクターは登場しないため、階級の攪乱には至っていない。

⁹⁷ *formant une franc-maçonnerie bien plus étendue, plus efficace et moins soupçonnée que celle des loges, car elle repose sur une identité de goûts, de besoins, d'habitudes, de dangers, d'apprentissage, de savoir, de trafic, de glossaire, et dans laquelle les membres mêmes qui souhaitent de ne pas se connaître, aussitôt se reconnaissent à des signes naturels ou de convention, involontaires ou voulus, [...]*

⁹⁸ 戦後の男性同性愛表象に取り組むうえで、大江健三郎の諸作品もはずすことはできないだろう。たとえば、『性的人間』(1963年)では、登場人物の老人の言葉として、「ホモ・セクシュアルの連中を見るがいい、かれらは特殊な新しい黒人みたいに、いま迫害されている。そしてかれらは、世界中のいろんな隅ずみに小集団をつくって抵抗している。もしかしたら二十一世紀には自分たちの種族の国をつくって独立しようと考えているかもしれない。すくなくとも、かれらのための議員の数人くらいはそれぞれの国でだすようになるだろう」(大江 86-87)と予言的に述べられているのだが、そこには同性愛の「種族」化がはっきりと見て取れる。それと同時に、三人称の語り手は、かつて同性との性行為を行っていた主人公の男性Jに関して、「もっともJは男色家的本質というものが生れながらに一人の人間に内在的に存在してその人間を一生涯、男色家として決定する、というように考えるタイプではなかった」(大江 73)とも述べている。つまり、テキストでは、特殊な「本質」に基づいた同性愛の「種族」化が相対化されているのだ。大江作品の男性同性愛表象の分析も、今後の課題としていきたい。

⁹⁹ 本論では一貫して「男性同性愛」を論じてきた。だが、「同性愛／異性愛」の二律背反、すなわち、ホモソーシャリティとホモセクシュアリティの関係をつねに問題としてきたことが示すように、それは「男性異性愛」を俎上にのせることに他ならない。本論の序章で引用した大橋洋一言葉を再び借りれば、同性愛で異性愛を再考する目論見でもあったのだ(大橋 b 199)。今後の研究でもこうした視点を継承し、「ヘテロ男性学」であることを自明とする傾向があり、ゲイ・スタディーズやクィア理論と乖離しかねない「男性学」(新田 103)を問い直していきたい。

引用文献

●日本語の文献（翻訳を含む）

- 赤川学『セクシュアリティの歴史社会学』勁草書房、1999年。
- 天野郁夫『学歴の社会史——教育と日本の近代』新潮社、1992年。
- 飯田祐子『彼らの物語——日本近代文学とジェンダー』名古屋大学出版会、1998年。
- 稲垣足穂『少年愛の美学』『稲垣足穂全集』第4巻、筑摩書房、2001年。
- 井上隆史『三島由紀夫 虚無の光と闇』試論社、2006年。
- 井上優「性と知、あるいは領土化をめぐる言説の抗争——森鷗外『キタ・セクスアリス』論」『思想』1997年5月号、pp.110-132。
- 井原西鶴 a『好色一代男』『井原西鶴集』第1巻、小学館、1996年。
—— b『男色大鑑』『井原西鶴集』第2巻、小学館、1996年。
- 岩田準一『本朝男色考；男色文献書志』原書房、2002年。
- 禹朋子「ブルーストと堀辰雄——『燃ゆる頬』の主題をめぐる」『帝塚山学院大学研究論集』2004年、pp.53-71。
- ヴィンセント、キース・風間孝・河口和也『ゲイ・スタディーズ』青土社、1997年。
- ヴィンセント、キース a「大江健三郎と三島由紀夫の作品におけるホモフェイズムとその不満」竹内孝宏訳『批評空間』1997年、pp.129-154。
—— b「ゲイのこえ——言語、フェティシズム、近代日本のホモソーシャルリティの起源」上田敦子訳『文化の市場——交通する』『越境する知』第5巻、栗原彬 [ほか] 編、東京、東京大学出版会、2001年、pp.219-255。
- 上野千鶴子『差異の政治学』岩波書店、2002年。
- 氏家幹人『武士道とエロス』講談社現代新書、1995年。
- 内田隆三『探偵小説の社会学』岩波書店、2001年。
[鶴沼直]『モダン語辞典』大空社、1995年。
- 生方智子 a『『キタ・セクスアリス』と男色の問題系——ジェンダーとセクシュアリティの結節点に向けて』『日本文学』1998年11月号、pp.36-46。
—— b「表象する〈青年〉たち——『三四郎』『青年』『日本近代文学』2004年、第71号、pp.1-16。
- 江戸川乱歩 a『一寸法師』『江戸川乱歩全集』第2巻、光文社文庫、2004年。
—— b『孤島の鬼』『江戸川乱歩全集』第4巻、光文社文庫、2003年。
—— c「一寸法師」『朝日新聞』東京版朝刊、1926年12月10日、p.8。
—— d『D坂の殺人事件』『江戸川乱歩全集』第1巻、光文社文庫、2004年。
—— e『屋根裏の散歩者』『江戸川乱歩全集』第1巻、光文社文庫、2004年。
—— f『陰獣』『江戸川乱歩全集』第3巻、光文社文庫、2005年。
—— g『猟奇の果』『江戸川乱歩全集』第4巻、光文社文庫、2003年。
—— h『大金塊』『江戸川乱歩全集』第13巻、光文社文庫、2005年。
—— i「乱歩打明け話」『江戸川乱歩全集』第24巻、光文社文庫、2005年、pp.23-31。
—— j「浅草趣味」『江戸川乱歩全集』第24巻、光文社文庫、2005年、pp.37-45。
—— k「もくづ塚」『江戸川乱歩全集』第24巻、光文社文庫、2005年、pp.472-484。

-
- 1『探偵小説四十年』上『江戸川乱歩全集』第28巻、光文社文庫、2006年。
- m「同性愛文学史——岩田準一君の思い出」『江戸川乱歩全集』第30巻、2005年、pp.158-172。
- n「二人の師匠」『江戸川乱歩全集』第30巻、2005年、pp.173-174。
- エリス、ハヴロック『性対象倒錯』佐藤晴夫訳、未知谷、1995年。
- 大江健三郎『性的人間』新潮文庫、1968年。
- 太田翼「森鷗外『青年』論——「青年」と「美少年」」『文学研究論集』2005年、第23号、pp.251-263。
- 大塚美保「衛生学の二つの顔——日本における近代衛生学と森鷗外」『国文学解釈と鑑賞』2005年2月号、pp.52-57。
- 大橋洋一 a「クイアー・ファザーの夢、クイアー・ネイションの夢——『こゝろ』とホモソーシャル」『漱石研究』第6巻、1996年、pp.46-59。
- b「〈キーワード〉解説」『“ポスト”フェミニズム』竹村和子編、作品社、2003年、pp.198-199。
- 大町桂月「鷗外の性慾小説」『趣味』1909年8月号、pp.15-18。
- 笠原十九司「戦地の男たち——性と性暴力」『モダニズムから総力戦へ』『男性史』第2巻、阿部恒久・大日方純夫・天野正子編、日本経済評論社、2006年、pp.142-175。
- 金子明雄「メディアの中の死——「自然主義」と死をめぐる言説」『文学』1994年7月号、pp.30-43。
- 河岡潮風 a「学生の暗面に蟠れる男色の一大悪風を痛罵す」『冒険世界』1909年8月号、pp.67-79。
- b「男性間の顛倒性慾を排す」『新公論』1911年、pp.42-48。
- 河口和也『クイア・スタディーズ』岩波書店、2003年。
- 川端康成「堀辰雄『燃ゆる頬』推薦の言葉」『川端康成全集』第34巻、新潮社、1982年、pp.206-207。
- クラフト=エビング『変態性慾心理』[黒澤良臣訳]大日本文明協会、1913年。
- 黒岩裕市 a「同性愛を語る三つの作品——『ソドムとゴモラ』I、『コリドン』、『純粹なもの』と不純なもの』を読む」、一橋大学大学院言語社会研究科修士論文、2001年。
- b「『ソドムとゴモラ』Iにおける倒錯の二重のゲーム」『一橋論叢』第127号第3巻、2002年、pp.293-309。
- c「健全なる男性同性愛のかげに——『コリドン』、『一粒の麦もし死なずば』におけるアンドレ・ジッドの戦略」『一橋論叢』第132号第3巻、2004年、pp.273-291。
- d「「男色」と「変態性欲」の間——『悪魔の弟子』と『孤島の鬼』における男性同性愛の表象」『一橋論叢』第134号第3巻、2005年、pp.374-393。
- e「同性愛の感染性——1930年の「陰間」表象と江戸川乱歩の『一寸法師』」『昭和文学研究』第54号、2007年、pp.1-12。
- f「変態か、グロか、優美か——昭和初期の「陰間」表象をめぐる」『F-GENS ジャーナル』No.8、若手研究者特集号、2007年、pp.61-66。
- 紅樓夢主人『美少年論』『戦前期同性愛関連文献集成』古川誠編、不二出版、2006年。

-
- 小森陽一 a 『『こゝろ』における同性愛と異性愛——「恋」と「罪悪」をめぐる』『総力討論 漱石の『こゝろ』』小森陽一・中村三春・宮川健郎編、翰林書房、1994年、pp.141-165。
- b 「男になれない男たち」『漱石研究』第3巻、1994年、pp.60-75。
- c 「日本近代文学における男色の背景」『文学』1995年1月号、pp.72-83。
- d 「表象としての男色——『キタ・セクスアリス』の“性”意識」『講座 森鷗外』第2巻『鷗外の作品』平川祐弘・平岡敏夫・竹盛天雄編、新曜社、1997年、pp.235-258。
- [小山湖南] 『これ一つで何でも分る現代新語集成』大空社、1995年。
- 斎藤光 a 「クラフト=エビングの『性的精神病質』とその内容の移入初期史」『京都精華大学紀要』第10号、1996年、pp.154-177。
- b 「セクシュアリティ研究の現状と課題」『セクシュアリティの社会学』、岩波書店、1996年、pp.223-249。
- c 「解説 学術的と壊乱的の間——『変態性慾』と田中香涯」『変態性慾』復刻版、不二出版、2002年、pp.5-26。
- d 「生物学と性科学」『生命科学の近現代史』広野喜幸・市野川容孝・林真理編、勁草書房、2002年、pp.267-306。
- e 「『変態性慾心理』解説」『近代日本のセクシュアリティ——〈性〉をめぐる言説の変遷』第2巻、ゆまに書房、2006年、pp.1-10。
- 佐伯順子 a 「色」と「愛」の比較文化史』岩波書店、1998年。
- b 「聖母を囲む男性同盟——『坊つちやん』における男色的要素」『漱石研究』第12巻、1999年、pp.150-167。
- 佐藤義亮編『現代猟奇尖端図鑑』『エロ・グロ・ナンセンス』『コレクション・モダン都市文化』第15巻、島村輝編、ゆまに書房、2005年。
- 時代世相研究会編『変態風俗画鑑——蛮地の奇観』『エロ・グロ・ナンセンス』『コレクション・モダン都市文化』第15巻、島村輝編、ゆまに書房、2005年。
- 澁澤龍彦「乱歩文学の本質——玩具愛好とユートピア」『江戸川乱歩——評論と研究』中島河太郎編、講談社、1980年、pp.135-139。
- 島田雅彦『未確認尾行物体』文芸春秋、1987年。
- 薺露庵主人『江戸の色道——性愛文化を繙く禁断の絵図と古川柳』男色篇、葉文館、1996年。
- 白倉敬彦『江戸の男色——上方・江戸の「売色風俗」の盛衰』洋泉社、2005年。
- セジウィック、イヴ・コゾフスキー a 『男同士の絆——イギリス文学とホモソーシャルな欲望』上原早苗・亀澤美由紀訳、名古屋大学出版会、2001年。
- b 『クローゼットの認識論——セクシュアリティの20世紀』外岡尚美訳、青土社、1999年。
- c 「クィア理論をとおして考える」竹村和子・大橋洋一訳『現代思想』2000年12月号、pp.30-42。
- 添田唾蟬坊『浅草底流記』『添田唾蟬坊・添田知道著作集』第2巻、刀水書房、1982年。
- ソントグ、スーザン『エイズとその隠喩』富山太佳夫訳、みすず書房、1990年。
- 高原英理『無垢の力——〈少年〉表象文学論』講談社、2003年。

-
- 田口律男『孤島の鬼』論——〈人間にはいろいろなかたちがあるのだ〉『国文学解釈と鑑賞』1994年、pp.109-114。
- 竹内清己「堀辰雄における西欧文学——プルースト受容」『文学論藻』2006年、pp.83-108。
- 竹村和子 a 『愛について——アイデンティティと欲望の政治学』岩波書店、2002年。
- b 「忘却／取り込みの戦略——バイセクシュアリティ序説」『現代思想 レズビアン／ゲイ・スタディーズ』1997年5月、pp.248-256。
- c 「フェミニズムの「文学力」宣言」『かくも多彩な女たちの軌跡——英語圏文学の再読』海老根静江・竹村和子編、南雲堂、2004年、pp.3-12。
- 田中香涯 a 「発刊の辞」『変態性慾』1922年5月号、pp.1-3。
- b 「変態性慾要説」『変態性慾』1922年5月号、pp.46-53。
- c 「男娼考」『変態性慾』1922年7月号、pp.128-135。
- d 「同性愛に関する学説に就いて」『変態性慾』1924年4月号、pp.169-172。
- 田中聡「万国衛生博覧会」『太陽』1994年12月号、pp.106-107。
- 千葉一幹「森鷗外『キタ・セクスアリス』からはじまる系譜」『国文学解釈と教材の研究』1999年1月号、pp.116-123。
- 月川和雄 a 「江戸川乱歩の男色論をめぐって」『imago』1995年3月号、pp.223-251。
- b 「解放運動の先駆者たち」『imago』1995年11月号、pp.176-200。
- 筒井康隆『文学部唯野教授』岩波書店、2000年。
- 坪内逍遙『当世書生気質』『明治の文学』第4巻、筑摩書房、2002年。
- ドゥルーズ、ジル『プルーストとシーニュ——文学機械としての『失われた時を求めて』』宇波彰訳、法政大学出版局、1977年。
- 永井荷風『祝盃』『すみだ川・新橋夜話』岩波文庫、1987年。
- 中沢新一「解題 浄のセクソロジー」『浄のセクソロジー』南方熊楠コレクション第3巻、河出文庫、1991年、pp.9-57。
- 中村三春『一寸法師』——百貨店と探偵『国文学解釈と鑑賞』1994年12月号、pp.103-108。
[中山由五郎]『モダン語漫画辞典』大空社、1995年。
- 成田大典『一寸法師』のスキヤンダル——乱歩と新聞小説『国語国文研究』2002年、pp.53-67。
- 新田啓子「ジェンダー系批評①——男性学の文脈とジェンダー批評の意義」『現代批評理論のすべて』大橋洋一編、新書館、2006年、pp.100-103。
- 橋本治「孤島の小林少年——江戸川乱歩とグロテスク考」『乱歩』下、新保博久、山前謙編、講談社、1994年、pp.33-65。
- 長谷川泉『鷗外「キタ・セクスアリス」考』明治書院、1968年。
- 長谷川天溪「ゴシツプ」『太陽』1909年8月号、pp.158-159。
- バトラー、ジュディス『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』、竹村和子訳、青土社、1999年。
- バートン、リチャード『千夜一夜の世界』大場正史訳、桃源社、1980年。
- 羽太鋭治・澤田順次郎『変態性慾論——同性愛と色情狂』春陽堂、1915年。
- 浜尾四郎 a 「同性愛考」『婦人サロン』1930年9月号、pp.136-142。

-
- b 「再び同性愛に就いて」『婦人サロン』1930年11月号、pp.58-65。
- 原田武『ブルーストと同性愛の世界』せりか書房、1996年。
- パーリア、カミール『セックス、アート、アメリカンカルチャー』野中邦子訳、河出書房新社、1995年。
- ハルプリン、ディヴィッド a 『同性愛の百年間——ギリシア的愛について』石塚浩司訳、法政大学出版局、1995年。
- b 『聖フーコー——ゲイの聖人伝に向けて』村山敏勝訳、太田出版、1997年。
- 肥留間由紀子「近代日本における女性同性愛の「発見」」『解放社会学研究』2003年、pp.9-32。
- フィードラー、レスリー『フリークス——秘められた自己の神話とイメージ』伊藤俊治・旦敬介・大場正明訳、青土社、1999年。
- フーコー、ミシェル『性の歴史 I 知への意志』渡辺守章訳、新潮社、1986年。
- 深澤晴美『『少年』論』『川端文学の世界——その発展』第2巻、勉誠出版、1999年、pp.135-159。
- 福永武彦「堀辰雄と外国文学との多少の関係について」『福永武彦全集』第16巻、新潮社、1987年、pp.165-175。
- 藤田みどり『アフリカ「発見」——日本におけるアフリカ像の変遷』岩波書店、2005年。
- 藤森清「強制的異性愛体制下の青春——『三四郎』『青年』『文学』2002年1・2月号、pp.120-133。
- プラトン『饗宴』久保勉訳、新潮文庫、1952年。
- フリートレンダー、ベネディクト「同性的情交ニ就テ」『人性』1906年4月号、pp.183-186。
- 古川誠 a 「恋愛と性欲の第三帝国——通俗的性欲学の時代」『現代思想』1993年7月号、pp.110-127。
- b 「セクシュアリティの変容——近代日本の同性愛をめぐる3つのコード」『日米女性ジャーナル』1994年、No.17、pp.29-55。
- c 「同性「愛」考」『imago』1995年11月号、pp.201-207。
- d 「同性愛の比較社会学——レズビアン／ゲイ・スタディーズの展開と男色概念」『セクシュアリティの社会学』『岩波講座現代社会学』第10巻、井上俊〔ほか〕編、岩波書店、pp.113-130、1996年。
- ブルースト、マルセル『ソドムとゴモラ』I 『失われた時を求めて』第7巻、鈴木道彦訳、集英社、1998年。
- フロイト、ジークムント『性理論三篇』『エロス論集』中山元訳、筑摩書房、1997年。
- ポオ、エドガー・アラン『モルグ街の殺人事件』『黒猫・モルグ街の殺人事件』中野好夫訳、岩波文庫、1978年。
- 堀辰雄 a 『燃ゆる頬』『堀辰雄全集』第1巻、筑摩書房、1977年。
- b 『不器用な天使』『堀辰雄全集』第1巻、筑摩書房、1977年。
- c 『顔』『堀辰雄全集』第1巻、筑摩書房、1977年。
- d 「フローラとフォーナ」『堀辰雄全集』第3巻、筑摩書房、1977年、pp.400-403。
- e 『堀辰雄作品集第一・聖家族』あとがき「自作について」『堀辰雄全集』第4巻、筑摩書房、1978年、pp.254-260。
- f 「プルウストV」『堀辰雄全集』第7巻上、筑摩書房、1979年、pp.75-140。

-
- g『堀辰雄全集』第8巻、筑摩書房、1978年。
- 前田愛 a「鷗外の中国小説趣味」『近代読者の成立』筑摩書房、1989年、pp.74-87。
- b「『賤のおだまき』考——『キタ・セクスアリス』の少年愛」『近代読者の成立』筑摩書房、1989年、pp.321-328。
- 槇山朋子「『燃ゆる頬』」『国文学解釈と鑑賞』1996年9月号、pp.84-88。
- 松田嘉子「堀辰雄とフランス文学——比較文学的アプローチ」（前編）『キリスト教文学』1989年、pp.25-34。
- 丸木砂土「愛する戦友」『犯罪科学』1930年11月号、pp.84-89。
- 三品彰英「薩摩の兵児二才制度——主としてその民間伝承的性質について」『新羅花郎の研究』『三品彰英論文集』第6巻、平凡社、1974年、pp.305-338。
- 三島由紀夫 a『仮面の告白』『三島由紀夫全集』第1巻、新潮社、2000年。
- b『禁色』『三島由紀夫全集』第3巻、新潮社、2001年。
- c「短編集『真夏の死』解説」『三島由紀夫全集』第36巻、2003年、pp.202-207。
- d『三島由紀夫全集』第38巻、新潮社、2004年。
- 南方熊楠・岩田準一『南方熊楠男色談義——岩田準一往復書簡』長谷川興蔵・月川和雄編、八坂書房、1991年。
- 三村徳蔵 a「新東京陰間團」『犯罪科学』1930年7月号、pp.127-133。
- b「ある陰間の一姿態——ヒルシュフェルド博士を案内して」『犯罪科学』1931年6月号、pp.222-235。
- c「或る特異性格者の告白」『犯罪公論』1933年6月号、pp.113-118。
- 村山敏勝『（見えない）欲望へ向けて——クィア批評との対話』人文書院、2005年。
- 森鷗外 a『キタ・セクスアリス』『鷗外全集』第5巻、岩波書店、1972年。
- b『青年』『鷗外全集』第6巻、岩波書店、1972年。
- c『半日』『鷗外全集』第4巻、岩波書店、1972年。
- d『追儼』『鷗外全集』第4巻、岩波書店、1972年。
- e『月草』「叙」『鷗外全集』第23巻、岩波書店、1973年、pp.294-301。
- f「ルソウオが少な時の病を診す」『鷗外全集』第29巻、岩波書店、1974年、pp.20-26。
- g「外情の事を録す」『鷗外全集』第29巻、岩波書店、1974年、pp.154-156。
- h『性慾雑説』『衛生新篇』『鷗外全集』第32巻、岩波書店、1974年。
- i『独逸日記』『鷗外全集』第35巻、岩波書店、1976年。
- j「男色の事」『森鷗外性欲雑説』河村敬吉編、日本医事新報出版部、1949年、pp.46-52。
- 森脇善明「プルースト」『堀辰雄事典』竹内清己編、勉誠出版、2001年、pp.193-197。
- 矢部彰「「墮落」しない男たちの肖像——『キタ・セクスアリス』から『青年』・『雁』へ」『講座 森鷗外』第2巻『鷗外の作品』平川祐弘・平岡敏夫・竹盛天雄編、新曜社、1997年、pp.259-279。
- 山田美妙『少年姿：新体詩華』香雲書屋、1886年。
- ヨコタ村上孝之『性のプロトコル——欲望はどこからくるのか』新曜社、1997年。
- 吉川豊子「ホモセクシュアル文学管見」『日本文学』1992年11月号、pp.93-103。
- 吉行エイスケ『享楽百貨店』『モダン Tokyo 円舞曲——新興芸術派作家十二人』春陽堂、1930

年、pp.225-258。

ラウレティス、テレサ・デ「クィア・セオリー——レズビアン／ゲイ・セクシュアリティ イントロダクション」大脇美智子訳『ユリイカ』1996年11月号、pp.66-77。

リッチ、アドリエンヌ『血、パン、詩』大島かおり訳、晶文社、1989年。

ワイニンゲル [ワイニンガー、オットー]『男女と天才』片山正雄訳『世界女性学基礎文献集成』第5巻、ゆまに書房、2001年。

渡辺憲司「江戸川乱歩と男色物の世界」『江戸川乱歩と大衆の二十世紀』藤井淑禎編、2004年、至文堂、pp.149-157。

渡部麻実「堀辰雄〈ブルーストに関するノート〉」『昭和文学研究』第44号、2002年3月、pp.78-93。

渡辺みえこ『女のいない死の楽園——供犠の身体・三島由紀夫』パンドラ、1997年。

『賤のおだまき』東京同益出版社、1885年。

『田夫物語』『日本古典文学全集』第37巻、小学館、1974年。

『色物語』『仮名草子集成』第4巻、朝倉治彦編、東京堂出版、1983年。

「帝国海軍と山本権兵衛」『萬朝報』1899年7月3日～7月6日。

「学生の大墮落蒼龍義團の事」『萬朝報』1900年3月7日、p.3。

「奇怪を極めた変な殺人事件」『東京朝日新聞』1926年12月10日、p.11。

「前科男が陥ちた奇怪な同性愛」『大阪朝日新聞』1926年12月11日、p.5。

「新陰間團現わる！——その総数恐くなかれ五十有余人」『犯罪科学』1930年6月号、p.61。

[東京] TO 生 a 「男子同性愛の一实例」『変態性慾』1922年9月号、pp.241-243。

—— b 「同性愛者より」『変態性慾』1923年5月号、pp.237-238 (表記は「東京 JO 生」)。

大阪 SK 生 「同性窃視症者より」『変態性慾』1922年12月号、pp.383-384。

岡山天紅生 「叛逆者の叫び」『変態性慾』1923年1月号、pp.45-47。

戸塚 A 生 「『女性的男子』を読んで」『変態性慾』1923年3月号、pp.129-130。

静岡 HY 生 「もの苦しさに」『変態性慾』1923年5月号、p.236。

神戸 YK 生 「同性愛者の苦しみ」『変態性慾』1923年5月号、pp.236-237。

●英語・仏語・独語の文献

Altman, Dennis. *Homosexual : Oppression & Liberation*. New York University Press, 1993.

Angles, Jeffrey. "Writing the Love of Boys : Representations of Male-Male Desire in the Literature of Murayama Kaita and Edogawa Ranpo." Ph.D. diss., Ohio State University 2003.

Bersani, Leo. *Homos*. Harvard University Press, 1995.

Carpenter, Edward. *Intermediate Types among Primitive Folk : a Study in Social Evolution*. George Allen & Unwin, 1919.

Cocteau, Jean. *Le Livre blanc*. in *Jean Cocteau, romans, poésies, œuvres diverses*. La

-
- Pochothèque, 1995.
- Compagnon, Antoine. "Notice." in *A la recherche du temps perdu III*. Pléiade, 1988, pp.1185-1261.
- Courouve, Claude. *Vocabulaire de l'homosexualité masculine*. Payot, 1985.
- Foucault, Michel. *Histoire de la sexualité I: la volonté de savoir*. Gallimard, 1976.
- Garber, Marjorie. *Vice Versa, Bisexuality and the Eroticism of Everyday Life*. Simon & Schuster, 1995.
- Gide, André. *Corydon*. Gallimard(folio) 1993.
- Greenberg, David. *The Construction of Homosexuality*. University of Chicago Press, 1988.
- Grosz, Elizabeth. "Intolerable Ambiguity : Freaks as / at the Limit." in *Freakery : Cultural Spectacles of the Extraordinary Body*. edited by Rosemarie Garland Thomson. New York University Press, 1996, pp.55-66.
- Hauser, Renate. "Krafft-Ebing's Psychological Understanding of Sexual Behaviour." in *Sexual Knowledge, Sexual Science : the History of Attitudes to Sexuality*. edited by Roy Porter and Mikulas Teich. Cambridge University Press, 1994, pp.210-227.
- Krafft-Ebing, R von Richard. a. *Psychopathia sexualis : mit besonderer Berücksichtigung der contraren Sexualempfindung : eine klinisch-forensische Studie*. Ferdinand Enke, 1894.
- b. *Psychopathia Sexualis mit besonderer Berücksichtigung der kontraren Sexualempfindung : eine medizinisch-gerichtliche Studie*. Ferdinand Enke, 1912.
- McLelland, Mark. a. *Male Homosexuality in Modern Japan : Cultural Myths and Social Realities*. Curzon, 2000.
- b. *Queer Japan from the Pacific War to the Internet Age*. Rowman & Littlefield, 2005.
- McRuer, Robert. "Compulsory Able-Bodiedness and Queer / Disabled Existence." in *Disability Studies : Enabling the Humanities*. edited by Sharon L. Snyder, Brenda Jo Brueggemann and Rosemarie Garland-Thomson. Modern Language Association of America, 2002, pp.88-99.
- Muller, Marcel. "*Sodome I* ou la naturalisation de Charlus." in *Poétique*, NO 8, 1971, pp.470-478.
- Nye, Robert A. "Sex Difference and Male Homosexuality in French Medical Discourse 1830-1930." in *Homosexuality and Medicine, Health and Science*. edited by Wayne R. Dynes and Stephen Donaldson. Garland Publishing, 1992, pp.168-187.
- Pflugfelder, Gregory. *Cartographies of Desire : Male-male Sexuality in Japanese Discourse, 1600-1950*. University of California Press, 1999.
- Porché, François. *L'amour qui n'ose pas dire son nom*. Grasset, 1927.
- Proust, Marcel. a. *Sodome et Gomorrhe*. in *A la recherche du temps perdu III*. Pléiade, 1988.

——— b. *Le Côté de Guermantes*. in *A la recherche du temps perdu II*. Pléiade, 1988.

Rivers, J.E. *Proust and the Art of Love : the Aesthetics of Sexuality in the Life, Times and Art of Marcel Proust*. Columbia University Press, 1980.

Tamagne, Florence. *Histoire de l'homosexualité en europe : Berlin, Londres, Paris 1919-1939*. Seuil, 2000.

Les Marges. Gai-Kitsch-Camp, 1993.